

市道仏生山町8号線新設改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

萩前・一本木遺跡Ⅱ

2018年3月

高松市教育委員会





調査区全景（北から）



16- 竪穴Ⅰカマド遺物出土状況（南から）



出土遺物

例 言

- 1 本書は、香川県高松市仏生山町甲に所在する萩前・一本木遺跡Ⅱの発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、市道仏生山町8号線新設改良事業に伴うものである。本書には、2011年度の成果を収録した。
- 3 調査は、高松市教育委員会が実施した。
- 4 調査期間と面積は以下のとおりである。
第1次調査：2011年4月11日～2011年6月24日（約865㎡）（第1・2調査区）
第2次調査：2011年11月17日～2012年3月30日（約2,000㎡）（第15～19調査区）
- 5 現地調査は高松市創造都市推進局文化財課（当時、高松市教育委員会文化財課）文化財専門員 船築 紀子、波多野 篤、同課非常勤嘱託職員 岡本 治代、磯崎 福子、森原 奈々が担当した。
- 6 本報告書の執筆・編集は、船築・森原が行った。
- 7 現地調査と整理作業にあたっては、下記の方々の御協力と御指導・助言を賜った。記して感謝する次第である。（順不同・敬称略）
機関：香川県教育委員会
個人：市来 真澄、大久保 徹也、中野 咲
- 8 以下の業務については、委託業務として行った。
基準点打設業務委託：株式会社 イビソク、株式会社 四航コンサルタント
空中写真測量業務委託：株式会社 イビソク、株式会社 四航コンサルタント
掘削業務委託：株式会社 松内建設
遺物写真撮影業務委託：西大寺フォト
出土鉄器の保存処理及び実測：株式会社 文化財サービス
- 9 香川県農業試験場圃場内の第3～14・20～24・27～39・41～47調査区の成果については、2017年刊行の『萩前・一本木遺跡Ⅰ』に収録した。
- 10 地理的・歴史的環境については、『萩前・一本木遺跡Ⅰ』を参照されたい。

凡 例

- 1 本書で使用了座標系は平面直角座標系第IV系(世界測地系)、標高は東京湾平均海水面を基準とした。土層注記及び遺物観察表(土器・土製品)の色調表示は、『新版 標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人 日本色彩研究書 色票監修)によった。
- 2 遺構名の表記は、原則として以下の規則により、調査区名-遺構種別(堅穴・掘立・柵列・SD・SK・SX・SP)個別番号の数字の組み合わせで統一した。個別番号に関しては、原則として調査当時に付した番号を踏襲している。
- 3 遺構種別については、付属施設を伴う堅穴(堅穴建物)、掘立(掘立柱建物等)、柵列(柵)は漢字表記、単体の遺構はSD(溝)、SK(土坑)、SX(性格不明遺構)、SP(ピット)といった遺構記号とする。ex)、第1調査区の堅穴建物1は「1-堅穴1」(1+堅穴+1)
- 4 堅穴建物・掘立柱建物内部の遺構については、それぞれ「カマド」や「周壁溝」、「支柱穴」、「土坑」などの名称を与えることとする。
- 5 出土遺物の実測図は、土器は1/4、鉄器は1/2、玉類は1/1、石器は1/2、1/4、1/6、遺構の縮尺については図面ごとに示している。また、写真図版における遺物の縮尺はすべて任意である。

本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第Ⅱ章 調査の成果	4
第1節 調査の方法	4
第2節 基本層序	4
第3節 遺構と遺物	4
第1調査区	4
(1) 竪穴建物	4
(2) 掘立柱建物	7
(3) 土坑	17
(4) 性格不明遺構・風倒木痕	18
第2調査区	25
(1) 竪穴建物	26
(2) 性格不明遺構	26
(3) 掘立柱建物	26
(4) 土坑	31
第15調査区	32
(1) 竪穴建物	32
(2) 性格不明遺構・ビット	39
(3) 掘立柱建物	39
(4) 柵列	44
(5) 土坑	44
(6) 溝	46
第16調査区	51
(1) 竪穴建物	51
(2) 掘立柱建物	66
(3) 柵列	68
(4) 土坑	68
(5) 溝	75
第17調査区	76
(1) 掘立柱建物	76
(2) 土坑	78
(3) 性格不明遺構	78
第18・19調査区	81
(1) 竪穴建物	81
(2) 柱穴群	83
(3) 土坑	86
(4) 性格不明遺構	89
(5) 溝	89
第Ⅲ章 まとめ	98
第1節 萩前・一本木遺跡の集落の変遷	98

挿 図 目 次

図 1	調査区配置図 (S= 1/2000)	3	図 47	16- 竪穴 1 カマド 平・断面図	56
図 2	第 1 調査区 平面図 (S= 1/200)	5	図 48	16- 竪穴 1 出土遺物実測図	57
図 3	1- 竪穴 1 平・断面図	6	図 49	16- 竪穴 3 平・断面図	58
図 4	第 1 調査区 出土遺物実測図	7	図 50	16- 竪穴 3 カマド 平・断面図	59
図 5	1- 竪穴 40 平・断面図	8	図 51	16- 竪穴 4 平・断面図	60
図 6	1- 掘立 1 平・断面図	10	図 52	16- 竪穴 2 カマド 平・断面図	61
図 7	1- 掘立 3 平・断面図	12	図 53	16- 竪穴 2 平・断面図	63
図 8	1- 掘立 2 平・断面図	14	図 54	16- 竪穴 2 カマド 平・断面図及び SP5 遺物出土状況	64
図 9	1- 掘立 4 平・断面図	15	図 55	16- 竪穴 2・3・4 出土遺物実測図	65
図 10	1- 掘立 5・1- 柱穴群 平・断面図	16	図 56	16- 掘立 1 平・断面図	67
図 11	1-SK 4・10・30・50・78 平・断面図	19	図 57	16- 櫛列 1 平・断面図	69
図 12	1-SK101・102・104・105・122 平・断面図	20	図 58	16-SK 5・6・7・8・9・19 平・断面図	70
図 13	1-SX115 平・断面図	21	図 59	16-SK10・21・27・95・88 平・断面図	72
図 14	1-SX22・113 平・断面図	22	図 60	16-SK17・18・22・23・25・26・87 平・断面図	73
図 15	1- 風倒木痕 1・3 平・断面図	23	図 61	16-SD11・12 平・断面図	74
図 16	1- 風倒木痕 2 平・断面図	24	図 62	16・17-SK・SD・その他 出土遺物実測図	74
図 17	第 2 調査区 平面図 (S=1/200)	25	図 63	17- 掘立 1 平・断面図	75
図 18	2- 竪穴 51 平・断面図	26	図 64	17- 掘立 2 平・断面図	76
図 19	2-SX41 平・断面図	27	図 65	17-SK 1・6・7・8・SX 5 平・断面図	77
図 20	2- 掘立 1 平・断面図	28	図 66	第 18・19 調査区 平面図 (S=1/200)	79・80
図 21	2-SK14・15・23・32・54・56・57 平・断面図	29	図 67	19- 竪穴 20 平・断面図	82
図 22	2-SK26・27・101 平・断面図	30	図 68	19- 竪穴 20 平・断面図	83
図 23	第 2 調査区 出土遺物実測図	30	図 69	19- 竪穴 20 出土遺物実測図	84
図 24	第 15 調査区 平面図 (S=1/200)	33	図 70	19- 竪穴 60 平・断面図	84
図 25	15- 竪穴 10 平・断面図	34	図 71	19- 竪穴 40 平・断面図	85
図 26	15- 竪穴 10 出土遺物実測図	35	図 72	19- 竪穴 40 カマド 平・断面図	86
図 27	15- 竪穴 20 平・断面図	36	図 73	19- ビット群 平・断面図	87
図 28	15- 竪穴 20 出土遺物実測図	37	図 74	18-SK 8・19-SK 8・9・10・43 平・断面図	88
図 29	15- 竪穴 40 平・断面図	38	図 75	19-SX50 平・断面図	90
図 30	15- 竪穴 40・50 出土遺物実測図	39	図 76	19-SX50 出土遺物実測図	91
図 31	15- 竪穴 50 平・断面図	40	図 77	18・19-SD44・45 平・断面図及び出土遺物実測図	93
図 32	15-SX60 平・断面図及び SP62 出土遺物実測図	41	図 78	18・19-SD 5 平・断面図及び出土遺物実測図	94
図 33	15- 掘立 2 平・断面図	42	図 79	18・19-SD 1・7 平・断面図	95
図 34	15- 掘立 1 平・断面図	43	図 80	19-SD 1 出土遺物実測図	96
図 35	15- 掘立 1・2 出土遺物実測図	43	図 81	18・19-SD 1・7 出土遺物実測図	97
図 36	15- 櫛列 1・2 平・断面図及び出土遺物実測図	45	図 82	時代変遷図 (古墳時代中期)	99
図 37	15-SK30 出土遺物実測図	45	図 83	時代変遷図 (古墳時代後期)	100
図 38	15-SK25・26・30・32・33 平・断面図	46	図 84	時代変遷図 (飛鳥～古代)	101
図 39	15-SD22・23 平・断面図	47	図 85	時代変遷図 (中世)	102
図 40	15-SD24・29・56 平・断面図	48			
図 41	15-SD21 平・断面図	49			
図 42	15-SD 出土遺物実測図	49			
図 43	第 15 調査区 出土遺物実測図	50			
図 44	第 16 調査区 平面図① (S=1/200)	52			
図 45	第 16・17 調査区 平面図② (S=1/200)	53・54			
図 46	16- 竪穴 1 平・断面図	55			

挿 表 目 次

表 1	調査工程表	1	表 10	土器観察表⑦	109
表 2	整理作業工程表	2	表 11	土器観察表⑧	110
表 3	遺構一覧表	102	表 12	土器観察表⑨	111
表 4	土器観察表①	103	表 13	土器観察表⑩	112
表 5	土器観察表②	104	表 14	土器観察表⑪	113
表 6	土器観察表③	105	表 15	土器観察表⑫	114
表 7	土器観察表④	106	表 16	石器観察表	115
表 8	土器観察表⑤	107	表 17	鉄器観察表	115
表 9	土器観察表⑥	108			

巻 頭 図 版 目 次

巻頭図版 1	調査区全景（オルソ）
巻頭図版 2	調査区全景（北から） 16- 竪穴 1 カマド 遺物出土状況（南から）
巻頭図版 3	出土遺物

図 版 目 次

図版 1	調査区 全景 (北西から)	図版 12	18・19-SD 1 (東から)
	第1調査区 全景 (西から)		18・19-SD 1 南壁断面 (北から)
図版 2	第2調査区 全景 (西から)		19-SD 1 遺物出土状況 (東から)
	第15調査区 全景 (南西から)	図版 13	18・19-SD 5 (北東から)
図版 3	第16調査区 全景 (北西から)		19-SD 5 北壁断面 (南から)
	第16調査区 全景 (南西から)		18-SD 5 遺物出土状況 (北から)
図版 4	第17～19調査区 全景 (東から)	図版 14	19- 竪穴 40 (東から)
	第17～19調査区 全景 (西から)		19- 竪穴 40 カマド (南から)
図版 5	1- 竪穴 1 (東から)		19- 竪穴 20 (南から)
	1- 竪穴 40 (南から)		19-SK42 遺物出土状況 (南から)
	1- 掘立 1 (北西から)		19-SK50 (北から)
	1- 掘立 1 完掘状況 (西から)	図版 15	出土遺物①
	1- 掘立 1 SP14 (南東から)	図版 16	出土遺物②
	1- 掘立 1 SP13 (南東から)	図版 17	出土遺物③
	1- 掘立 1 SP16 (南東から)	図版 18	出土遺物④
	1-SX115 断面 (西から)	図版 19	出土遺物⑤
図版 6	2- 竪穴 51 (西から)	図版 20	出土遺物⑥
	2- 掘立 1 完掘状況 (東から)	図版 21	出土遺物⑦
	15- 竪穴 20 (南から)	図版 22	出土遺物⑧
	15- 竪穴 20 SP31 遺物出土状況	図版 23	出土遺物⑨
	15- 竪穴 50 (南東から)	図版 24	出土遺物⑩
	15- 竪穴 50 遺物出土状況 (南東から)	図版 25	出土遺物⑪
	15- 竪穴 50 カマド (東から)	図版 26	出土遺物⑫
	15- 竪穴 10 (西から)	図版 27	出土遺物⑬
図版 7	15- 掘立 1 検出状況 (南西から)	図版 28	出土遺物⑭
	15-SK75 断面 (西から)	図版 29	出土遺物⑮
	15-SD21 完掘状況 (東から)	図版 30	鉄製品・骨・石器
	15-SD21 西壁断面 (東から)		
図版 8	16- 竪穴 1 (南から)		
	16- 竪穴 1 カマド遺物出土状況 (南から)		
	16- 竪穴 1 カマド完掘状況 (南から)		
	16- 竪穴 1 カマド東西断面 (南から)		
図版 9	16- 竪穴 2 (南から)		
	16- 竪穴 3 (北西から)		
	16- 竪穴 4 (南西から)		
図版 10	16- 竪穴 2 カマド完掘状況 (南から)		
	16- 竪穴 2 遺物出土状況 (西から)		
	16- 竪穴 2 遺物出土状況 (東から)		
	16- 竪穴 3 カマド完掘状況 (南から)		
	16- 竪穴 4 カマド完掘状況 (南から)		
図版 11	16- 掘立 1 完掘状況 (南から)		
	16- 掘立 1 SP32 断面		
	16- 掘立 1 SP36 断面		
	16- 掘立 1 SP31 断面		
	16- 掘立 1 SP30 断面		

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成20年度に高松市仏生山町甲808番1号ほか（香川県農業試験場の圃場内）に、高松市民病院の建設が計画され、事業課（高松市病院局新病院整備課・道路課）から教育委員会（以下、市教委）に埋蔵文化財包蔵地の有無の照会があった。周辺での調査の蓄積がほとんど無い地域であり、埋蔵文化財包蔵地として認識されていなかったが、高松市新病院建設計画の事業面積が広大であることから、土地所有者である香川県の了解のもと、事前の試掘調査を実施した。試掘調査は平成21年10月27日～11月2日の実働5日で実施した。その後追加で、平成23年6月27日～6月30日の実働4日を実施した。事業対象面積は、約14,500㎡で、現地に既存する圃場の区画に合わせて南北方向のトレンチを8本設定した。

試掘調査の結果、試掘調査の対象地全域で埋蔵文化財の包蔵が確認できたため、事業課に対して、当該地において保護層が確保できない掘削工事を行う場合は、事前に埋蔵文化財に対する保護措置が必要である旨を伝え、協議を実施した。

事業課から平成23年4月8日付けで文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が市教委に提出された。その通知を香川県教育委員会に進達したところ、香川県教育委員会から4月9日付けで事前に発掘調査を行う旨の行政指導があったため、発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

調査は、平成23年4月11日から6月24日に第1・2調査区を、11月17日から3月30日に第15～19調査区の調査を行った。

整理作業は、平成24年度から29年度にかけて実施した。

萩前・一本木遺跡Ⅱ（市道仏生山町8号線）

調査日誌抄録

H23.4.11（月）第2調査区 調査開始

H23.4.14（木）第1調査区 調査開始

H23.6.15（水）第1・2調査区 写真測量
（堀イビソク）

H23.6.24（金）第1・2調査区 調査終了

H23.6.27（月）～6.30（木）

72.73.74.75.76.77.78.79号地 試掘調査開始

H23.7.4（月）35号地 試掘調査開始

H23.8.17（水）～8.22（月）

65.66.68.70.71.79.80.81号地 試掘調査開始

H23.11.17（木）第15調査区 調査開始

H23.11.24（木）第16調査区 調査開始

H23.12.26（月）第17調査区 調査開始

H24.1.18（水）第18調査区 調査開始

H24.1.24（火）第15・16調査区 全景写真撮影
（高所作業車）・写真測量（四航コンサルタント）

H24.1.25（水）第19調査区 調査開始

H24.2.20（月）第15・16調査区 調査終了

H24.3.10（土）第17・18・19調査区 全景写真撮影（高所作業車）

H24.3.11（日）第17・18・19調査区 写真測量
（四航コンサルタント）

H24.3.30（金）第17・18・19調査区 調査終了

表1 調査工程表

調査区	担当者	調査面積 (㎡)	平成23年度											
			4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1	船業・森原・磯崎	418.0												
2	波多野・岡本	447.0												
15	船業・森原	460.0												
16	船業・森原	674.0												
17	船業・森原	230.0												
18	船業・森原	142.0												
19	船業・森原	494.0												

表2 整理作業工程表

		平成23年度											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	洗浄												
	接合・復元												
	実測												
	遺構トレース												
	遺物トレース												
	写真撮影												
		レイアウト											
		執筆・編集											
		平成24年度											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	洗浄												
	接合・復元												
	実測												
	遺構トレース												
	遺物トレース												
	写真撮影												
		レイアウト											
		執筆・編集											
		平成25年度											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	洗浄												
	接合・復元												
	実測												
	遺構トレース												
	遺物トレース												
	写真撮影												
		レイアウト											
		執筆・編集											
		平成26年度											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	洗浄												
	接合・復元												
	実測												
	遺構トレース												
	遺物トレース												
	写真撮影												
		レイアウト											
		執筆・編集											
		平成27年度											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	洗浄												
	接合・復元												
	実測												
	遺構トレース												
	遺物トレース												
	写真撮影												
		レイアウト											
		執筆・編集											
		平成28年度											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	洗浄												
	接合・復元												
	実測												
	遺構トレース												
	遺物トレース												
	写真撮影												
		レイアウト											
		執筆・編集											
		平成29年度											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	洗浄												
	接合・復元												
	実測												
	遺構トレース												
	遺物トレース												
	写真撮影												
		レイアウト											
		執筆・編集											

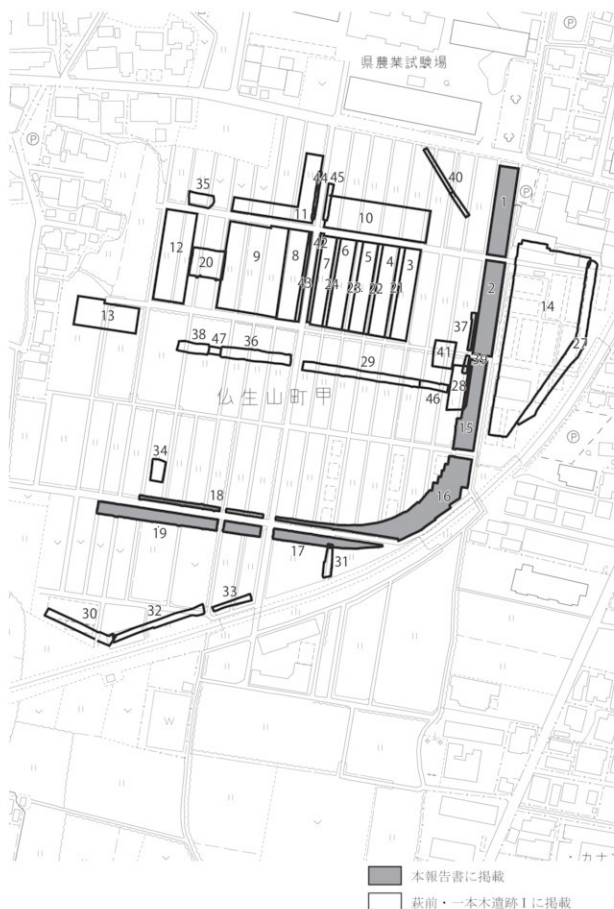


図1 調査区配置図 (S=1/2000)

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査の方法

a. 調査区の呼称と遺構番号、遺物の取上げ

調査区名は、香川県農業試験場跡地（圃場内）で発掘調査を実施した順に第1調査区から番号を与えた。このため、道路新設改良事業の事業用地である調査区は、第1・2・15～19調査区となった（図1）。

遺構には、遺構の種類に関係なく検出した順番で1から番号を与えた。遺構の種類は、現地での調査所見をもとに性格を判断し、遺構番号の上に遺構の略号を冠した。

遺物の取上げは、遺構単位で、かつ出土土層が明らか場合は、層位も記載して取上げた。

b. 記録作成

図化作業の際に使用する基準点と水準点は、第1・2調査区が（株）イビソク、第15～19調査区を（株）四航コンサルタントに委託し、世界測地系第Ⅳ系・4級基準点を用いた。平面図は第1・2調査区がラジコンヘリによる撮影、第15～19調査区はボール撮影による航空測量を行った。断面図は手測りで記録を作成した。

第2節 基本層序

調査区の基本層序は、第1・2調査区では①農業試験場圃場の耕作土と床土、②古墳時代の遺構面であり、また包層でもある黒褐～暗褐細砂混じりシルト～粘土層、③褐灰シルト混じり粘土の地山面の順となる。第15～19調査区においては、耕作土と床土直下で地山面が確認できた。

第3節 遺構と遺物

第1調査区（図2）

（1）竪穴建物

1-竪穴1（図3・4）

第1調査区南側で検出した竪穴建物である。平面形状はやや歪な隅丸方形で、攪乱に東側辺を切られる。主軸方位N-80°-W、検出面の標高は約35.5mである。規模は、長辺約5.2m、短辺5.0m以上、深さ約0.2mを測る。

検出段階で平面プランが歪であったことから、一段落しを実施し、堆積状況を確認した。この結果、一段落しの段階で貼床面となっていることが確認できた。貼床面で遺構の検出を行い、カマドと支柱穴（SP26～29）、ピット（SP79）、土坑（SK30・78）を確認した。このうちSK30・78については、後述する土坑の項で記述を行うものとする。

埋土は、黒褐細砂～シルトである。埋土から須恵器杯蓋（3・4）・甕（5）、土師器甕の把手（6）、その他図示できなかったが須恵器杯蓋片・杯身片・高杯片・甕片・甕片・壺片・器台片、土師器高杯片・製塩土器片が出土した。

貼床は地山ブロックを多量に含む黒褐細砂～シルトである。

カマドは竪穴建物西側中央やや北寄り、焼土と炭化物を検出した。カマド内部の堆積と考えられる。カマド袖は削平により確認できなかった。カマド内部の堆積は、上層が炭化物を多量含む黒褐細砂～シルトで、にぶい黄褐シルトブロックを含む。カマドの機能面と考えられる。下層は炭化物と地山ブロック土を含む暗褐シルトである。

支柱穴は4基確認できた。SP26は不整形を呈し、長径約0.76m、短径約0.7m、深さ約0.5mを測る。断面形状は不整逆台形を呈し、西側の肩は二段落ちとなる。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が地山ブロック土を斑状に含む黒褐細砂～シルト、掘形が地山ブロック土を含む黒褐細砂～シルトである。遺物は須恵器杯蓋（1・2）が出土した。

SP27は楕円形を呈し、長径約0.7m、短径約0.6m、深さ約0.46mを測る。断面形はラッパ型を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が地山ブロック土を斑状に含む黒褐細砂～シルト、掘形が垂角礫状地山ブロック土を含む黒褐細砂～シルトとほぼ地山ブロック土で構成する暗オリーブ褐細砂～シルトである。



図2 第1調査区 平面図 (S=1/200)

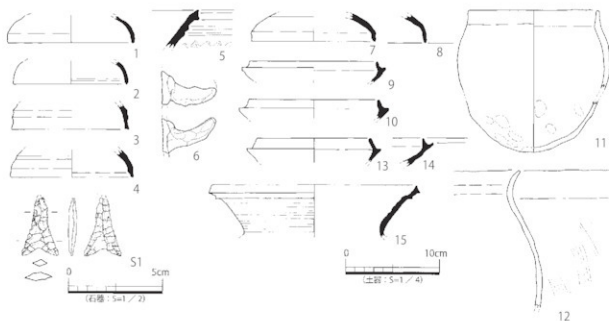


図4 第1調査区 出土遺物実測図

S P 28 は円形を呈し、長径約 0.48m、短径約 0.46m、深さ約 0.42m を測る。断面形状は U 字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が地山ブロック土を斑状に含む黒褐細砂～シルト、掘形が黒褐細砂～シルトと暗褐細砂～シルトである。

S P 29 は楕円形を呈し、長径約 0.74m、短径約 0.64m、深さ約 0.42m を測る。断面形状は筒型を呈し、南西肩は二段落ちとなる。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が地山ブロック斑状に含む黒褐細砂～シルト、掘形がほぼ地山ブロック土で構成する暗褐細砂～シルトと地山ブロック斑状に含む黒褐細砂～シルトである。

出土遺物の年代から、古墳時代後期末、T K 209 併行期と判断できる。

1－竪穴 40 (図4・5)

第1調査区北西側で検出した竪穴建物と考えられる遺構である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。検出面の標高は約 35.4m である。平面形状はやや歪な方形を呈する。主軸方位 N-6°-W、長辺約 6.75m、短辺約 4.8m 以上、深さ約 0.25m を測る。

埋土は上層が細礫と地山ブロック土を含む黒褐細砂～シルト、下層が地山ブロック土を含む黒褐細砂～シルトである。遺物は埋土から須恵器杯蓋(7・8)・杯身(9・10)、土師器甕(11)が出土した。また

図示できなかったが須恵器杯身片・高杯片・壺片、土師器高杯片・壺片、粘土塊、製塩土器片、砥石が出土した。

S P 69 は竪穴建物下層で検出したビットである。調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。直径約 0.75m、深さ約 0.17m を測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は暗褐細砂～シルトである。

出土遺物の年代から古墳時代後期後半～飛鳥時代、T K 209～217 併行期と考えられる。

(2) 掘立柱建物

1－掘立 1 (図6)

調査区の中央南側で検出した掘立柱建物である。3×2 間の総柱建物で、調査区外に延びるため全体の形状は不明である。S P 11～21・80 で構成する。検出面の標高は約 35.4m である。梁行総長約 5.0m、桁行総長約 5.3m、床面積は約 26.5m² を占める。主軸方位は N-19°-W。芯芯間距離は約 1.5～1.6m、2.5～2.7m である。

S P 11 は隅丸方形を呈し、長辺約 0.41m、短辺約 0.39m、深さ約 0.19m を測る。断面形状は椀状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルト、掘形が黒シルトとにぶい黄褐シルトである。

S P 12 は楕円形を呈し、長径約 0.4m、短径約 0.33m、深さ約 0.23m を測る。断面形状は U 字



図5 1- 竪穴40 平・断面図

形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒シルトである。

S P 13 は楕円形を呈し長径約 0.52 m、短径約 0.42 m、深さ約 0.38 m を測る。断面形状は U 字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒シルトである。遺物は土師器片・製塩土器片が出土した。

S P 14 は楕円形を呈し、長径約 0.48 m、短径約 0.35 m、深さ約 0.23 m を測る。断面形状は方形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒褐細砂～シルトとにぶい黄褐シルトである。

S P 15 は円形を呈し、直径約 0.45 m、深さ約 0.26 m を測る。断面形状は椀状に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は掘形が地山ブロックを含む黒褐シルト、柱痕が掘形よりも地山ブロック土を多く含む黒褐シルトである。

S P 16 は楕円形を呈し、長径約 0.54 m、短径約 0.47 m、深さ約 0.39 m を測る。断面形状は V 字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が暗褐シルトである。

S P 17 は円形を呈し、直径約 0.34 m、深さ約 0.23 m を測る。断面形状は椀状に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が暗褐細砂～シルトと暗褐シルトである。

S P 18 は隅丸方形を呈し、長辺約 0.55 m、短辺約 0.49 m、深さ約 0.35 m を測る。断面形状は方形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒褐細砂～シルトである。

S P 19 は楕円形を呈し、長径約 0.42 m、短径約 0.36 m、深さ約 0.14 m を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は暗褐シルトである。

S P 20 はやや歪な楕円形を呈し、長径約 0.56 m、短径約 0.5 m、深さ約 0.24 m を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は上層が黒褐シルト、下層が黒褐細砂～シルトである。

S P 21 は円形を呈し、直径約 0.35 m、深さ約 0.15 m を測る。断面形状は「へ」の字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒褐細砂～シルトである。

S P 80 はやや歪な楕円形を呈する柱穴である。S P 12 に切られる。長径約 0.38 m、短径約 0.3 m、深さ約 0.35 m を測る。断面形状は U 字形に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒シルト、

掘形が黒褐シルトである。

いずれのピットも出土遺物が細片であるため、時期は不明である。

1-掘立3 (図7)

第1調査区の中央で検出した掘立柱建物である。2×3間の縦柱建物で、梁行総長約 4.9～5.5m、桁行総長約 5.2～5.6m、床面積は約 28.1㎡を占める。検出面の標高は約 35.25m である。S P 51～58・60・61・83・84 で構成する。主軸方位は N-85°-E。芯芯間距離は約 2.4～2.9、1.5～2.3m である。

S P 51 は隅丸方形を呈し、長辺 0.5 m、短辺約 0.43 m、深さ約 0.13 m を測る。断面形状は浅い皿状に弱い段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒細砂～シルトと黒褐シルトである。

S P 52 は円形を呈し、直径約 0.41 m、深さ約 0.13 m、断面形状は浅い皿状に弱い段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒細砂～シルト、掘形が黒褐シルトとにぶい黄褐シルトである。

S P 53 は円形を呈し、直径約 0.42 m、深さ約 0.21 m を測る。断面形状は椀状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒褐細砂～シルトと暗褐シルトである。

S P 54 は不整形な形状で、長軸約 0.62 m、短軸約 0.47 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は浅い皿状に弱い段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒褐細砂～シルトと黒褐シルトである。遺物は須恵器杯身片、土師器破片が出土した。

S P 55 はやや歪な隅丸方形を呈し、長辺約 0.51 m、短辺約 0.42 m、深さ約 0.24 m を測る。断面形状は椀状に段落ちである。埋土は単層で、暗褐細砂～シルトである。

S P 56 は円形を呈し、直径約 0.4 m、深さ約 0.19 m を測る。断面形状は「へ」の字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルト、掘形が暗褐シルトである。

S P 57 はやや歪な楕円形を呈し、長径約 0.52 m、短径約 0.44 m、深さ約 0.19 m を測る。断面形状は逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘形が褐灰細砂～シルトと暗褐シルトである。

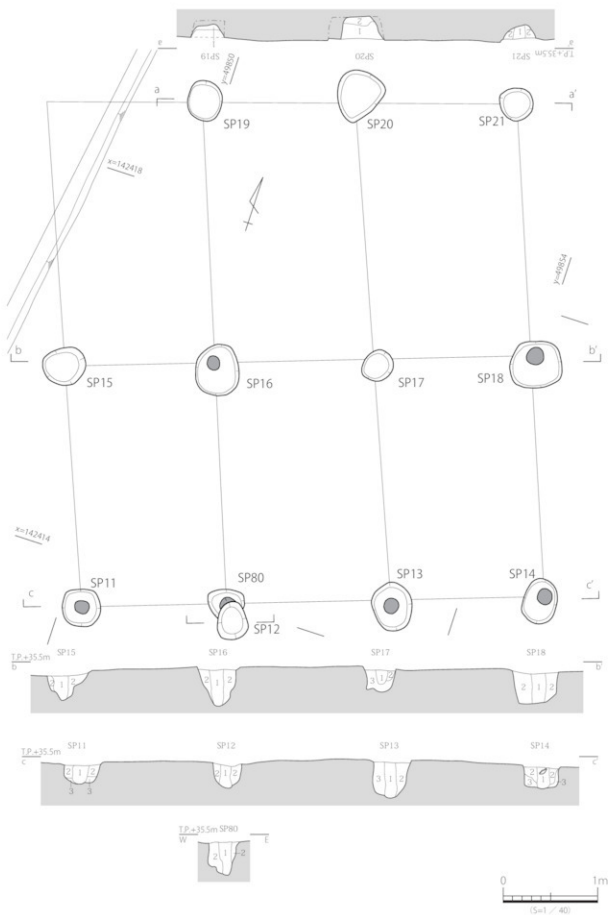


図6 1-掘立1 平・断面図

SP11

- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト 下部Fe沈着 地山ブロック状に3%
- 2 10YR2/1 黒 シルト 地山ブロック状に3%
- 3 10YR4/3 に近い黄褐色 シルト はば地山土で構成

SP12

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロック状に3%
- 2 10YR2/1 黒 シルト 地山ブロック状に2%

SP13

- 1 10YR3/2 黒褐色 シルト 径1～2 cm程度の地山ブロック状に含む 土屑片含む
- 2 10YR2/1 黒 シルト 径1 cm程度の地山ブロック多量含む
- 3 10YR2/1 黒 シルト 地山ブロック状に2%

SP14

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 下部にFe沈着 径1～2 cm程度の地山ブロック状に含む 土屑片含む
- 2 10YR3/1 黒褐色 細砂～シルト 地山ブロック状に2%
- 3 10YR4/3 に近い黄褐色 シルト はば地山土で構成

SP15

- 1 10YR3/2 黒褐色 シルト 地山ブロック3%
- 2 10YR3/2 黒褐色 シルト 地山ブロック2%

SP16

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロック3%
- 2 10YR3/3 暗褐色 シルト 地山ブロック2%

SP17

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロック2%
- 2 10YR3/3 暗褐色 細砂～シルト 地山ブロック2%
- 3 10YR3/3 暗褐色 シルト

SP18

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロック3%
- 2 10YR3/1 黒褐色 細砂～シルト 地山ブロック2%

SP19

- 1 10YR3/3 暗褐色 シルト 地山ブロック3%

SP20

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロック3%
- 2 10YR3/1 黒褐色 細砂～シルト 地山ブロック3%

SP21

- 1 10YR2/3 黒褐色 シルト 地山ブロック1%
- 2 10YR2/2 黒褐色 細砂～シルト 地山ブロック2%

SP20

- 1 7.5YR2/1 黒 シルト しまり強 径1 cm程度の地山ブロック含む
- 2 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロック状に3%

S P 58 は円形を呈し、直径約0.63m、深さ約0.34 m、断面形状は方形に弱い段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒褐細砂～シルトである。

S P 60 は楕円形を呈し、長径約0.5 m、短径約0.33 m、深さ約0.28 mを測る。断面形状は方形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒褐細砂～シルトと暗褐シルトである。

S P 61 は歪な隅丸方形を呈し、長辺約0.56 m、短辺約0.5 m、深さ約0.29 mを測る。断面形状は枕状である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐灰シルト、掘形が灰黄褐極細粒砂～シルトと灰黄褐シルトである。

S P 83 は攪乱に切られるため全体の形状は不明であるが、不整形な形状を呈する。長径約0.8 m、短径約0.6 m、深さ約0.29 mを測る。断面形状は枕状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルト、掘形が暗褐細砂～シルトとにぶい黄褐シルトである。

S P 84 は楕円形を呈し、長径約0.52 m、短径約0.41 m、深さ約0.65 mを測る。断面形状は筒型を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が暗褐シルトである。

いずれのピットも出土遺物が細片のため、詳細な時期は不明である。

1-掘立2 (図8)

第1調査区の中央東側で検出した掘立柱建物である。1×2間の側柱建物で、調査区外に延びる

ため全体の形状は不明である。梁行総長約1.5m以上、桁行総長約3.9m、床面積は約5.9m²以上を占める。S P 44～48で構成する。検出面の標高は約35.3mである。主軸方位はN-14°-W。芯芯間距離は約1.5～2.0mである。

S P 44 は円形を呈し、直径約0.39 m、深さ約0.12 mを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は単層で、暗褐シルトである。

S P 45 は楕円形を呈し、長径約0.42m、短径約0.27 m、深さ約0.07 mを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は単層で、黒褐細砂～シルトである。

S P 46 は楕円形を呈し、長径約0.44 m、短径約0.37 m、深さ約0.07 mを測る。断面形状は浅い皿状で下部に段落ちが確認できる。埋土は単層で、暗褐細砂～シルトである。

S P 47 は円形を呈し、直径約0.54m、深さ約0.16 m、断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は上層が黒褐シルト、下層が地山ブロック土を多量に含む黒褐シルトである。

S P 48 は円形を呈し、直径約0.5m、深さ約0.33 mを測る。断面形状は枕状に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒褐細砂～シルトとにぶい黄褐シルトである。

いずれのピットからも遺物が出土していないため、時期は不明である。

1-掘立4 (図9)

第1調査区の中央西側で検出した掘立柱建物であ

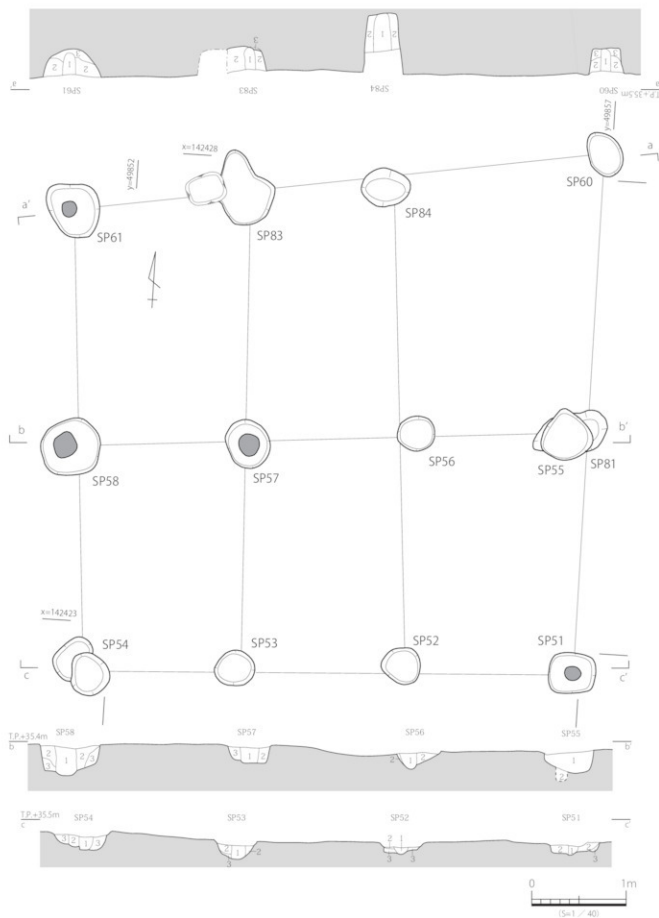


図7 1-掘立3 平・断面図

SP51

- 1 10YR2/2 黒褐 シルト 地山ブロック1%
- 2 10YR2/1 黒 細砂～シルト 地山ブロック3%
- 3 10YR3/2 黒褐 シルト 地山ブロック5%

SP52

- 1 10YR2/1 黒 細砂～シルト 径1mm程度の地山ブロックを含む
- 2 10YR2/2 黒褐 シルト 地山ブロック1%
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト ほぼ地山土で構成

SP53

- 1 10YR2/2 黒褐 シルト 径1mm程度の地山ブロックを含む
- 2 10YR2/2 黒褐 細砂～シルト 地山ブロック状に2%
- 3 10YR3/3 暗褐 シルト 地山ブロック多量含む

SP54

- 1 10YR2/2 黒褐 シルト 地山ブロック5%
- 2 10YR2/1 黒 細砂～シルト 地山ブロック1%
- 3 10YR2/2 黒褐 シルト 地山ブロック2%

SP55

- 1 10YR3/3 暗褐 細砂～シルト 地山ブロック3%
- 2 10YR3/4 暗褐 シルト 地山ブロック3%

SP56

- 1 10YR3/2 黒褐 細砂 地山ブロック1%
- 2 10YR3/3 暗褐 シルト 地山ブロック1%

SP57

- 1 10YR3/3 暗褐 シルト 地山ブロック3%
- 2 10YR4/1 褐灰 細砂
- 3 10YR3/4 暗褐 シルト ほぼ地山土で構成

SP58

- 1 10YR2/3 黒褐 シルト
- 2 10YR2/3 黒褐 細砂～シルト 土層片含む
- 3 2.5Y3/2 黒褐 細砂

SP60

- 1 10YR4/1 褐灰 シルト 細砂5%
- 2 10YR4/2 灰黄褐 極細砂 地山ブロック5%
- 3 10YR5/2 灰黄褐 シルト ほぼ地山土で構成 細砂7%

SP61

- 1 10YR2/3 黒褐 シルト 地山ブロック1%
- 2 10YR2/2 黒褐 細砂～シルト 地山ブロック1%
- 3 10YR3/3 暗褐 シルト ほぼ地山土で構成

SP83

- 1 10YR2/3 黒褐 シルト 地山ブロック2%
- 2 10YR3/3 暗褐 シルト 地山ブロック3%

SP84

- 1 10YR3/1 黒褐 細砂～シルト 地山ブロック3%
- 2 10YR3/3 暗褐 細砂～シルト 径1mm程度の地山ブロック多量含む
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト ほぼ地山土で構成

る。2×2間以上の側柱建物で、調査区外に延びるため全体の形状は不明である。S P 31～34・82で構成する。梁行総長約3.2m、桁行総長約3.4m以上、床面積は約10.9m²以上を占める。検出面の標高は約35.3m、主軸方位はN-66°-E。芯芯間距離は約1.5～1.7mである。

S P 31は円形を呈し、直径約0.52m、深さ約0.21mを測る。断面形状は方形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細砂～シルト、掘形が暗褐シルトと黒褐シルトである。

S P 32は楕円形を呈し、長径約0.58m、短径約0.48m、深さ約0.26mを測る。断面形状は方形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が暗褐細砂～シルトと暗褐シルト、黒褐細砂～シルトである。

S P 33は隅丸方形を呈し、長辺約0.43m、短辺0.41m、深さ約0.17mを測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は2層に分層でき、暗褐シルトと黒褐細砂～シルトである。

S P 34は隅丸長方形を呈し、長辺約0.41m、短辺約0.32m、深さ約0.2mを測る。断面形状はU字形を呈する。埋土は単層で、黒褐細砂～シルトである。

S P 82は隅丸長方形を呈し、長辺約0.63m、短辺約0.47m、深さ約0.2mを測る。断面形状は逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルト、掘形が柱痕よりも地山ブロック土を多く含む黒褐細砂～シルトとにぶい黄褐シルトで

ある。

遺物はS P 31とS P 32から須恵器片と土師器片が出土したが、出土遺物が細片のため、詳細な時期は不明である。

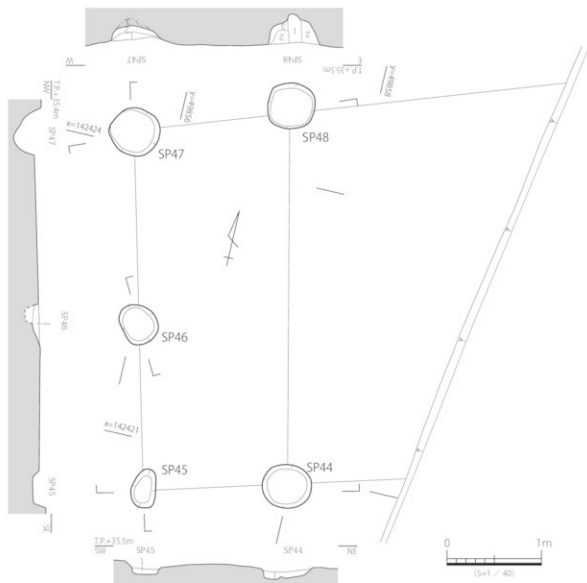
1-掘立5 (図10)

調査区の中央西側で検出した掘立柱建物である。S P 62・66・68・71で構成する。1×2間以上の側柱建物で、調査区外に延びるため全体の形状は不明である。検出段階では柱穴を確認できず、竪穴建物40の埋土を掘削したのち、貼床面で掘立柱建物と柱穴群を検出した。本来は竪穴40を切っていたと考えられる。梁行総長約2.1m以上、桁行総長約4.8m以上、床面積は約10.0m²以上を占める。検出面の標高は約35.1m、主軸方位はN-37°-E。芯芯間距離は約2.0～2.8mである。

S P 62は円形を呈し、直径約0.37m、深さ約0.13m、断面形状は碗状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルト、掘形が極暗褐シルトである。

S P 66は隅丸方形を呈し、長辺約0.42m、短辺約0.38m、深さ約0.33mを測る。断面形状は方形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルト、掘形が黒褐シルトである。

S P 68は楕円形を呈し、長径約0.44m、短径約0.36m、深さ約0.25mを測る。断面形状は方形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細砂～シルト、掘形が黒褐シルトである。



- SP44 1 10YR3/3 暗褐色 シルト 地山ブロック 3%
 SP45 1 10YR3/2 黒褐色 細砂～シルト 地山ブロック 5%
 SP46 1 10YR3/3 暗褐色 細砂～シルト 地山ブロック 5%
 SP47 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 地山ブロック 3%
 2 10YR3/1 黒褐色 シルト 径 2 cm 程度の地山ブロック多量含む 土師器片含む
 3 ベース
 SP48 1 10YR2/3 黒褐色 シルト 地山ブロック 1%
 2 10YR2/2 黒褐色 細砂～シルト 径 2 cm 程度の地山ブロック多量含む
 3 10YR4/3 に近い黄褐色 シルト ほゞ地山土で構成

図 8 1- 掘立 2 平・断面図

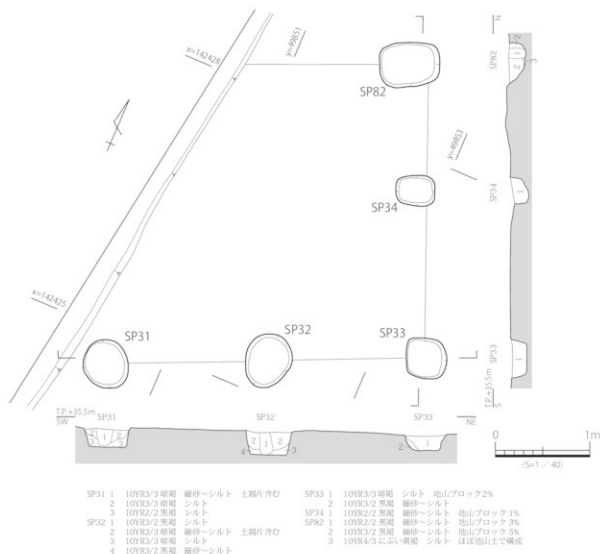


図9 1-掘立4 平・断面図

S P 71 は円形を呈し、直径約 0.4 m、深さ約 0.31 m を測る。断面形状は U 字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルト、掘形が黒褐シルトと暗褐シルトである。

いずれのビットからも遺物が出土していないため、時期は不明である。

1-柱穴群 (図 10)

掘立 5 と同様に、竖穴 40 貼床面で検出したビット群である。

S P 85 は円形を呈し、直径約 0.36 m、深さ約 0.27 m を測る。断面形状は U 字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細砂～シルト、掘形が黒褐シルトである。

S P 63 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.35 m、

短径約 0.33 m、深さ約 0.31 m を測る。断面形状は方形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が暗褐シルトである。

S P 64 は円形を呈し、直径約 0.32 m、深さ約 0.29 m を測る。断面形状は U 字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が暗褐細砂～シルトとにぶい黄褐細砂～シルト、黒褐細砂～シルトである。

S P 65 はやや歪な楕円形を呈し、長径約 0.44 m、短径約 0.36 m、深さ約 0.28 m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細砂～シルト、掘形が黒褐細砂～シルトである。

S P 67 は隅丸方形を呈し、長辺約 0.44 m、短辺約 0.41 m、深さ約 0.12 m を測る。断面形状は

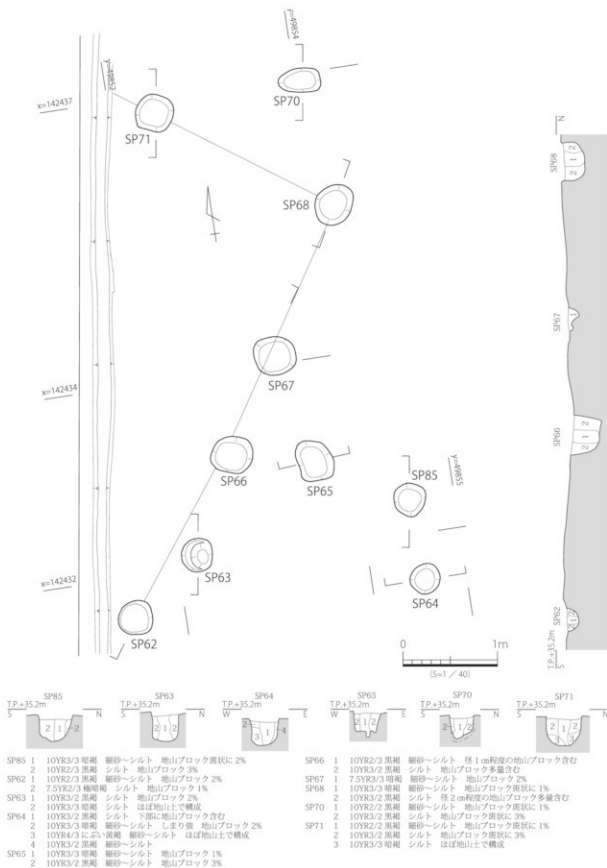


图 10 1-掘立 5·1-柱穴群 平·断面图

不整形である。埋土は単層で暗褐細砂～シルトである。

S P 70は楕円形を呈し、長径約0.44 m、短径約0.24 m、深さ約0.25 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルト、掘形が黒褐シルトである。

いずれの柱穴からも遺物が出土していないため、時期は不明である。

(3) 土坑

1ーS K 4 (図11)

第1調査区の南側で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位N-83°-W、検出面の標高は約35.5mである。長径約0.7m、短径約0.56m、深さ約0.25mを測る。断面形状は椀状を呈する。

埋土は2層に分層でき、上層が黒褐細砂～シルト、下層が地山ブロック土を多量に含む暗褐細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

1ーS K 10 (図4・11)

第1調査区の南東隅で検出した土坑である。平面形状は不整形で、調査区外へと延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-7°-E、検出面の標高は約35.5mである。長軸約4.0m、短軸約0.6m以上、深さ約0.15mを測る。断面形状は起伏のある浅い皿状である。

埋土は単層で、褐灰シルトである。

遺物は土師器甕(12)が出土した。出土遺物の年代から、古墳時代後期後半と考えられる。

1ーS K 30 (図11)

第1調査区南側、堅穴1の上面で検出した土坑である。平面形状は隅丸長方形である。主軸方位N-88°-W、検出面の標高は約35.5mである。長辺約1.23m、短辺約0.69m、深さ約0.19mを測る。断面形状は起伏のある逆台形である。

遺物は土師器高杯片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

1ーS K 50 (図11)

第1調査区の北西で検出した土坑である。調査区

外へ延びるため全体の形状は不明である。主軸方位N-8°-E、検出面の標高は約35.4mである。長軸約2.4m、短軸1.5m以上、深さ0.45mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は6層に分層でき、にぶい赤褐細砂～シルトと黒褐細砂～シルト、暗褐シルト、暗褐細砂～シルト、褐細砂～シルト黒褐細砂～シルトである。玉石が筋状に斜め縦方向に認められ、また堆積が不規則な状態であることから、風倒木痕の可能性が考えられる。

遺物は須恵器杯身片が出土したが、遺物が細片であるため、詳細な時期は不明である。

1ーS K 78 (図11)

第1調査区の中央南側、堅穴建物1内で検出した土坑である。平面形状は不整形である。主軸方位N-57°-W、検出面の標高は約35.3mである。長軸約2.6m、短軸約0.9m、深さ0.32mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は2層に分層でき、上層が黒褐細砂～シルト、下層がほぼ地山土で構成する暗褐細砂～シルトとオリブ褐シルトである。

遺物は須恵器杯蓋片・杯身片が出土したが、細片のため、詳細な時期は不明である。

1ーS K 101 (図12)

第1調査区第2面の中央で検出した土坑である。平面形状はやや歪な楕円形である。主軸方位N-60°-W、検出面の標高は約35.0mである。長径約1.5m、短径約1.1m、深さ約0.2mを測る。断面形状は椀状である。

埋土は2層に分層でき、上層が黒褐細砂～シルト、下層が暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

1ーS K 102 (図12)

第1調査区第2面の北西側で検出した土坑である。調査区外へと延びるため、全体の形状は不明であるが、不整形な形状を呈する。主軸方位N-0°-W、検出面の標高は約35.05mである。長軸約1.8m、短軸約1.2m以上、深さ約0.25mを測る。断面形状は浅い皿状で段落ちを有する。

埋土は2層に分層でき、上層がにぶい黄褐シルト、下層が暗褐シルトである。

遺物は須恵器杯身片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

1-SK 104（図12）

第1調査区第2面の南側で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈する。主軸方位N-80°-W、検出面の標高は約35.25mである。長径約0.8m、短径約0.5m、深さ約0.1mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、黒褐シルトである。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

1-SK 105（図12）

第1調査区第2面の南側で検出した土坑である。平面形状はやや歪な楕円形を呈する。主軸方位N-75°-W、検出面の標高は約35.2mである。長径約0.8m、短径約0.6m、深さ約0.4mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、黒褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

1-SK 122（図12）

第1調査区の南東側で検出した土坑である。調査区外へ延びるため、全体の形状は不明であるが、不整形な形状を呈する。主軸方位N-45°-E、検出面の標高は約35.3mである。長軸約2.1m以上、短軸約1.0m以上、深さ約0.15mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層で、褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

（4）性格不明遺構・風倒木痕

1-SX 115（図13）

第1調査区第2面の北側で検出した落ち込み状の遺構である。調査区外に延びるため全体の形状は不明であるが、平面形状は不整形である。主軸方位N-75°-W、検出面の標高は約35.0mである。長軸約7.0m以上、短軸約2.1m、深さ約0.5mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は西側で2層、東側で3層に分層できる。西側では上層が灰黄褐シルト、下層がにぶい黄橙シルトである。東側では、上層が灰黄褐シルト、中層がにぶい黄橙シルト、下層がにぶい黄褐シルトであ

る。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

1-SX 22（図14）

第1調査区の南側で検出した風倒木痕と考えられる遺構である。平面形状は不整形で、検出面の標高は約35.5m、主軸方位N-28°-Wである。長軸約3.8m、短軸約0.9m、深さ約0.55mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は6層に分層でき、上層が黒褐シルト、中層が黒シルトと黒シルトに粘土、下層がオリーブ黒微細砂と黒褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

1-SK 113（図14）

第1調査区第2面の北側で検出した風倒木痕と考えられる土坑である。平面形状は楕円形を呈する。検出面の標高は約35.0m、主軸方位N-22°-Wである。長径約1.7m、短径約1.4m、深さ約0.65mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は5層に分層でき、上層が黒褐細砂～シルト、下層が暗褐シルトと灰黄褐シルトに粘土、ほぼ地山土で構成する黒褐シルトと暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

1-風倒木痕1（図15）

第1調査区第2面の南西側で検出した風倒木痕である。調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、平面形状は不整形を呈すると考えられる。検出面の標高は約35.3m、主軸方位N-28.5°-Eである。長軸約2.9m、短軸約2.8m以上、深さ約0.7mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は13層に分層でき、上層が灰黄褐シルトとにぶい黄極細砂、黄褐極細砂、黒褐シルト、オリーブ褐極細砂、灰黄褐極細砂～シルト、中層が黒シルトと灰黄褐極細砂、下層が黄褐シルトに粘土と黄褐シルト～中礫、黒シルトに粘土、暗オリーブ褐極細砂である。

遺物は出土していない。

1-風倒木痕3（図15）

第1調査区第2面の中央で検出した風倒木痕である。平面形状は不整形である。検出面の標高は約35.0m、主軸方位N-90°-Wである。長軸約3.4m、

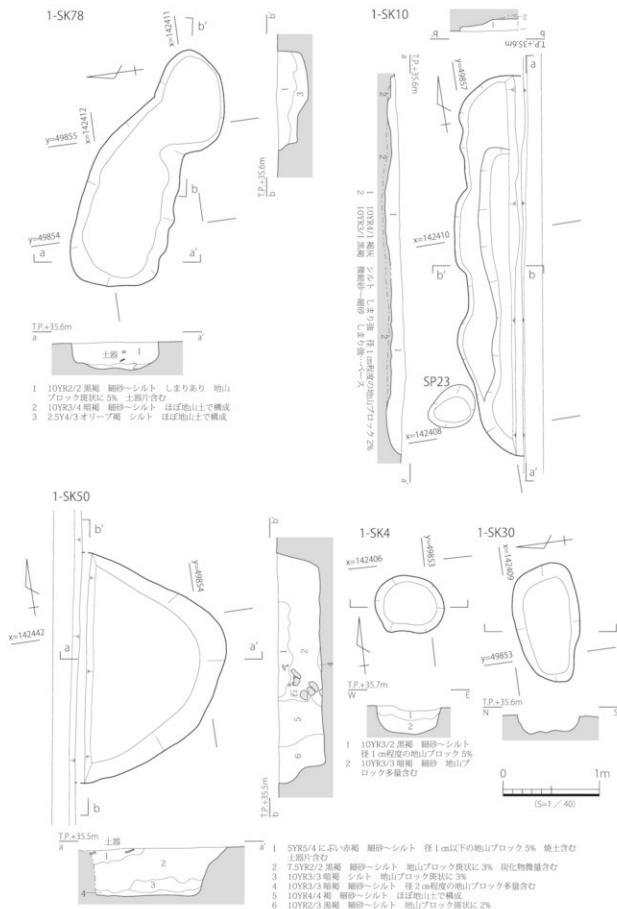


図 11 1-SK 4・10・30・50・78 平・断面図

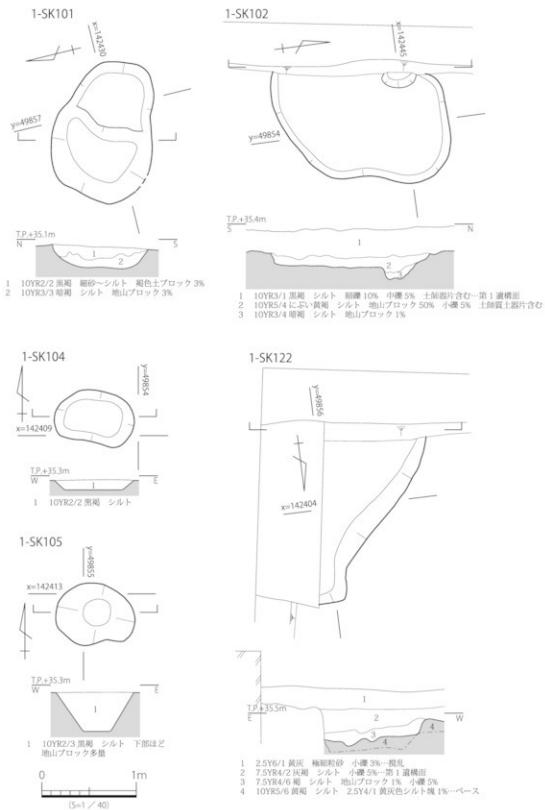


図 12 1-SK101・102・104・105・122 平・断面図

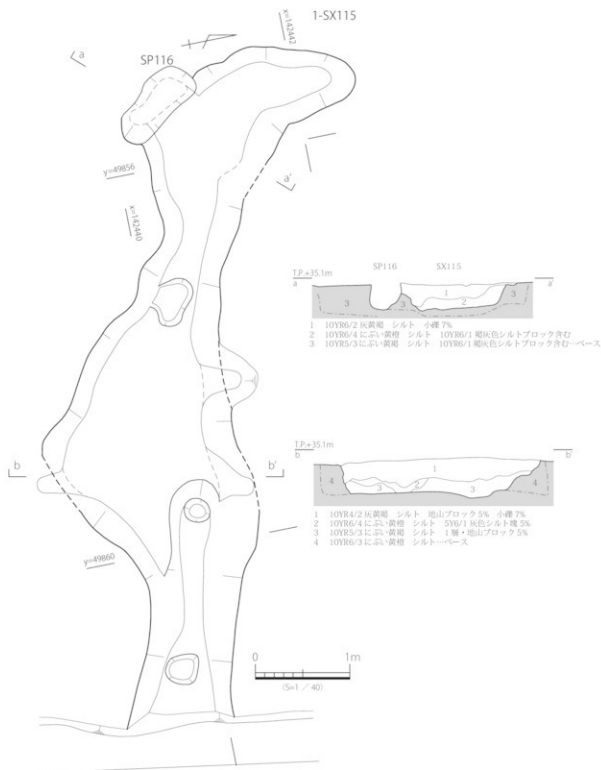


図 13 1-SX115 平・断面図

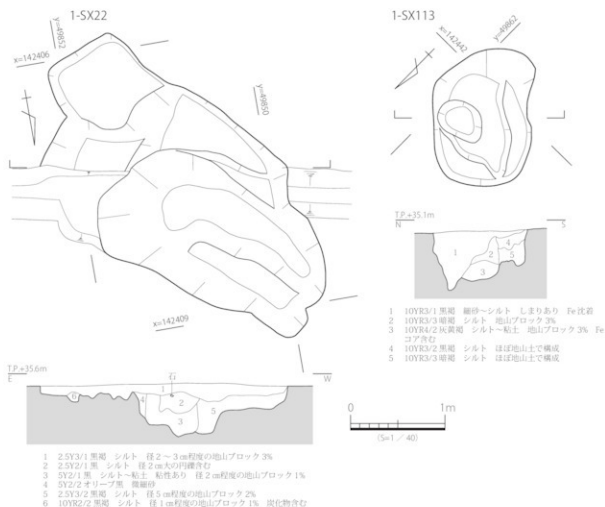


図 14 1-SX22・113 平・断面図

短軸約 2.8m、深さ約 0.7m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は 10 層に分層でき、堆積状況から西側から東側へ堆積したと考えられる。最終埋没と考えられる東側の 3 層が褐灰極細砂〜シルトと灰黄褐極細砂、黒褐極細砂〜シルト。中央の 3 層がにぶい黄褐極細砂と褐灰シルト、黒褐極細砂である。西側の 4 層がにぶい黄褐シルトとにぶい黄褐シルト混じり細礫〜中礫、灰黄褐極細砂、灰黄褐シルトである。

遺物は出土していない。

1ー風倒木痕 2（図 16）

第 1 調査区第 2 面の中央で検出した風倒木痕である。平面形状は不整形である。検出面の標高は約 35.1m、主軸方位 $N-90^{\circ}-W$ である。長軸約 5.7m、短軸約 3.8m、深さ約 0.7m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は 14 層に分層でき、堆積状況から南側から

北側へと堆積したと考えられる。最終埋没と考えられる南側が、黒褐シルトと黒褐極細砂、褐灰極細砂〜シルト、灰黄褐極細砂、暗灰黄極細砂、褐灰極細砂〜シルト、灰黄褐極細砂〜シルトである。中央がにぶい黄褐極細砂と褐シルト、北側がにぶい黄褐シルト混じり小礫〜中礫と褐シルト、灰黄褐極細砂である。

遺物は出土していない。

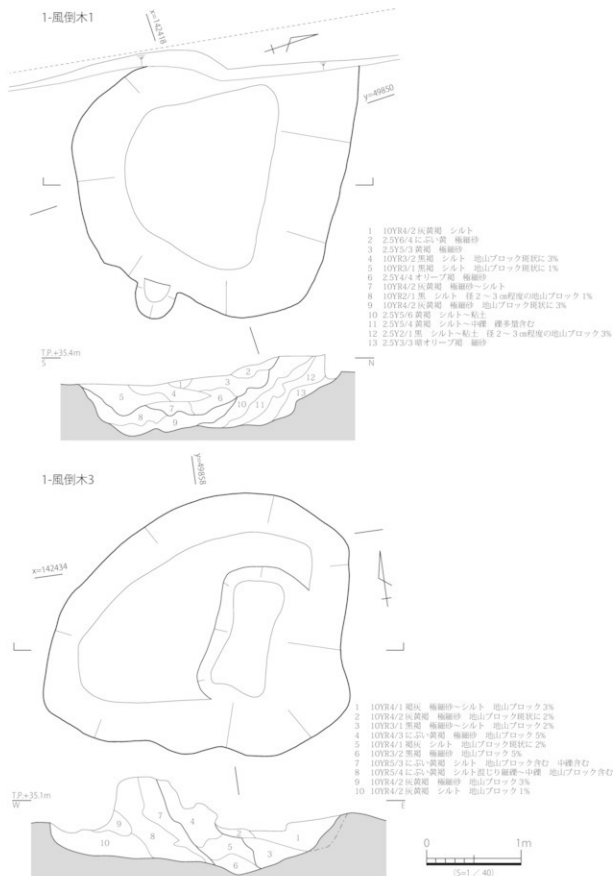


図 15 1-風倒木痕 1・3 平・断面図

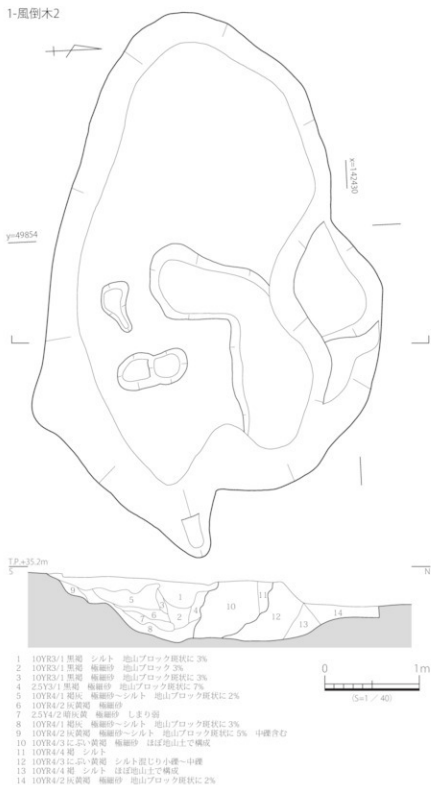


図16 1-風倒木痕2 平・断面図

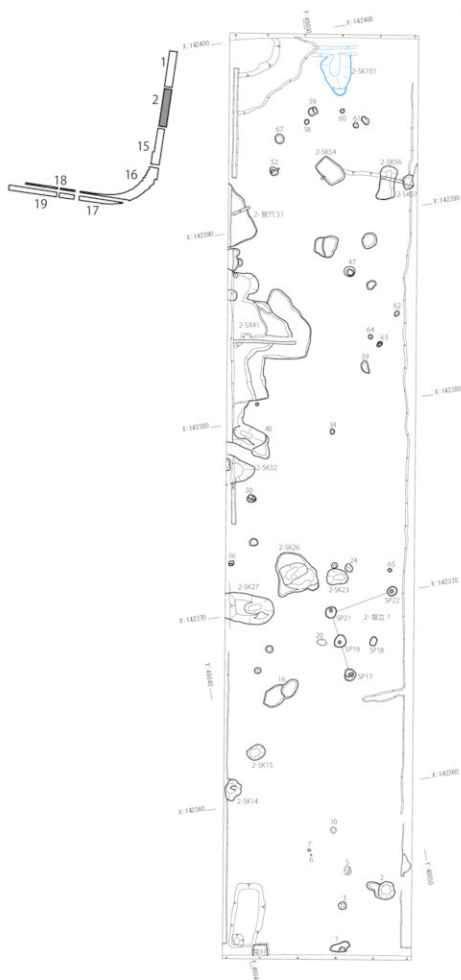


图 17 第 2 調査区 平面図 (S=1/200)

第2調査区（図17）

（1）竪穴建物

2-竪穴51（図18・23）

第2調査区北西側で検出した竪穴建物と考えられる遺構である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、平面形状は方形を呈すると想定できる。検出面の標高は約35.65m、主軸方位N-15°-Wである。規模は、長辺約2.7m以上、短辺約1.7m以上、深さ約0.3mを測る。

断面形状は、南側は急角度で掘り込まれるが、北側は緩やかな角度で落ちる。

埋土は黒褐細砂～シルトで、中央に焼土塊が確認できた。

遺物は土師器甕（16）、土師器高杯片が出土した。出土遺物の年代から、古墳時代中期中葉と考えられる。

（2）性格不明遺構

2-SX41（図19）

第2調査区中央西側で検出した性格不明遺構である。掘削当初、竪穴建物の可能性を想定したが、平面プラン及び堆積状況から、竪穴建物の可能性を排除した。調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。検出面の標高は約35.7m、主軸方位N-0°-Wである。平面形状は不整形である。規模は、長軸約6.9m以上、短軸約4.2m以上、深さ約

0.3mを測る。

埋土は単層で、褐灰極細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

（3）掘立柱建物

2-掘立1（図20）

第2調査区の中央で検出した掘立柱建物である。1×2間の側柱建物で、削平を受けている可能性が考えられる。SP17・19・21・22で構成する。SP18が総柱建物の中央の柱穴となる可能性も想定できる。梁行総長約3.4m以上、桁行総長約3.4m、床面積は約11.6㎡以上を占める。検出面の標高は約35.7m、主軸方位はN-9°-W。3である。芯芯間距離は約1.7～3.4mである。

SP17は円形を呈し、直径約0.63m、深さ約0.11mを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐灰極細砂～シルト、掘形が暗灰黄極細砂～シルトである。

SP19は楕円形を呈し、長径約0.66m、短径約0.61m、深さ約0.07mを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐灰極細砂～シルト、掘形が暗灰黄極細砂～シルトである。

SP21は円形を呈し、直径約0.64m、深さ約0.12mを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐灰極細砂～シルト、



図18 2-竪穴51 平・断面図

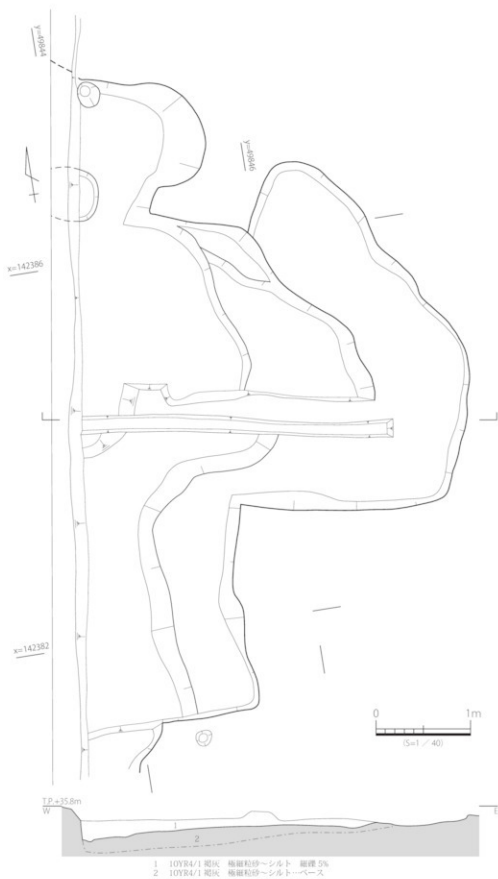


図 19 2-SX41 平・断面図

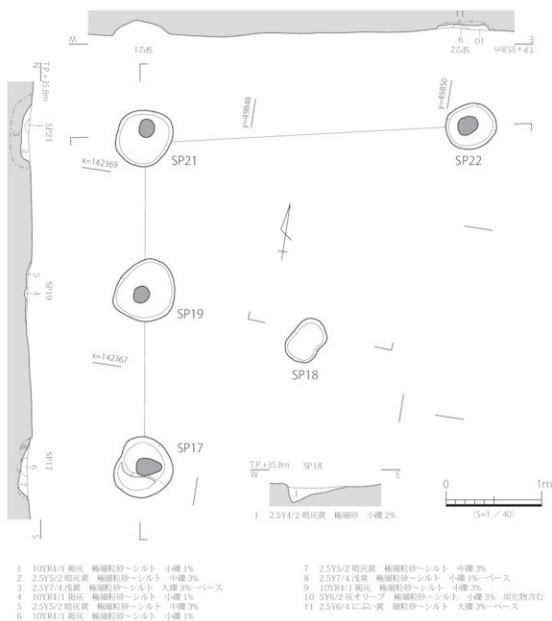


図20 2-掘立1 平・断面図

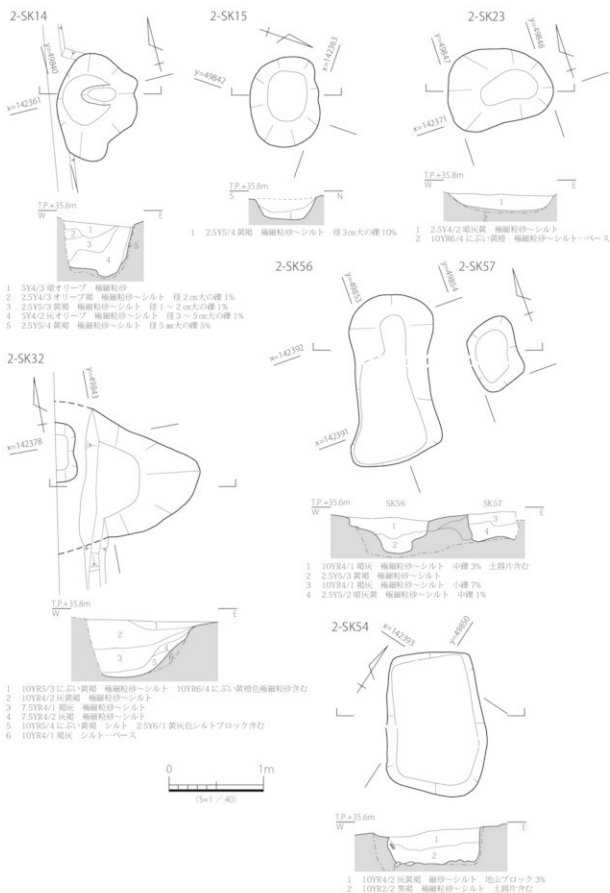


図21 2-SK14・15・23・32・54・56・57 平・断面図

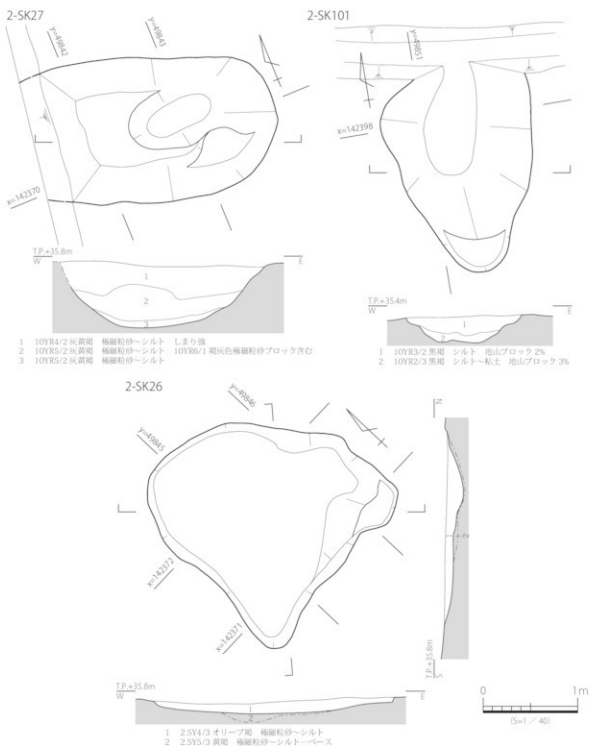


図22 2-SK26・27・101 平・断面図

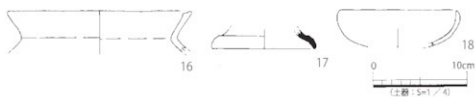


図23 第2調査区 出土遺物実測図

掘形が暗灰黄極細砂～シルトである。

S P 22 は円形を呈し、直径約 0.53 m、深さ約 0.07 m を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐灰極細砂～シルト、掘形が灰オリブ極細砂～シルトである。

S P 18 は楕円形を呈し、長径約 0.49 m、短径約 0.33 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は「へ」の字形を呈する。埋土は単層で暗灰黄極細砂～シルトである。

遺物は S P 17 から土師器片、S P 22 から須恵器片が出土したが、いずれも細片のため、詳細な時期は不明である。

(4) 土坑

2-S K 14 (図 21)

第2調査区の南側で検出した土坑である。平面形状は不整形である。主軸方位 N-16°-E、検出面の標高は約 35.65 m である。長軸約 1.1 m、短軸 0.8 m、深さ 0.55 m を測る。断面形状は逆台形で段落ちを有する。

埋土は5層に分層でき、上層が暗オリブ極細砂～シルトとオリブ褐極細砂～シルト、下層が黄褐極細砂～シルトと灰オリブ極細砂～シルト、黄褐極細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

2-S K 15 (図 21)

第2調査区の南側で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈し、主軸方位 N-69°-E、検出面の標高は約 35.7 m である。長径約 0.95 m、短径約 0.7 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、黄褐極細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

2-S K 23 (図 21)

第2調査区の中央で検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈し、主軸方位 N-71°-W、検出面の標高は約 35.65 m である。長径約 1.1 m、短径約 0.85 m、深さ約 0.15 m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、暗灰黄極細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

2-S K 32 (図 21)

第2調査区の中央西側で検出した土坑である。平面形状は不整形で、調査区外へと延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-81°-W、検出面の標高は約 35.7 m である。長軸約 1.2 m 以上、短軸約 1.4 m、深さ約 0.6 m を測る。断面形状は椀状である。

埋土は5層に分層でき、上層がにぶい黄褐極細砂～シルトと灰黄褐極細砂～シルト、中層が褐灰極細砂～シルトと灰褐極細砂～シルト、下層がにぶい黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

2-S K 54 (図 21・23)

第2調査区の北側で検出した土坑である。平面形状は隅丸長方形を呈し、主軸方位 N-35°-W、検出面の標高は約 35.5 m である。長辺約 1.5 m、短辺約 1.0 m、深さ約 0.3 m を測る。断面形状は方形である。

埋土は2層に分層でき、上層が地山ブロック土を含む灰黄褐細砂、下層が黒褐極細砂～シルトである。

須恵器高杯(17)が出土した。図示した遺物の他に、須恵器高杯片、土師器高杯片が出土した。出土遺物の年代から、古墳時代後期後半～末、TK43～209 併行期と考えられる。

2-S K 56 (図 21)

第2調査区の北側で検出した土坑である。平面形状は不整形で、主軸方位 N-20°-E、検出面の標高は約 35.5 m である。長軸約 1.8 m、短軸約 0.8 m、深さ約 0.4 m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は2層に分層でき、上層が褐灰極細砂～シルト、下層が黄褐極細砂～シルトである。

遺物は土師器片が出土したが、細片であるため、時期は不明である。

2-S K 57 (図 21)

第2調査区の北側で検出した土坑である。平面形状は隅丸長方形を呈し、主軸方位 N-1°-E、検出面の標高は約 35.55 m である。長辺約 0.7 m、短辺約 0.5 m、深さ約 0.3 m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は2層に分層でき、上層が褐灰極細砂～シルト、下層が暗灰黄極細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

2-SK 27 (図 22)

第2調査区の中央西側で検出した土坑である。平面形状は楕円形で、調査区外へ延びる。主軸方位 N-73°-W、検出面の標高は約 35.7m である。長径約 2.3m 以上、短径約 1.5m、深さ約 0.65m を測る。断面形状は碗状を呈する。

埋土は3層に分層でき、上層が灰黄褐極細砂～シルト、中層が褐灰極細砂ブロックを含む灰黄褐極細砂～シルト、下層が灰黄褐極細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

2-SK 26 (図 22)

第2調査区の中央で検出した浅い落込み状の遺構である。平面形状は不整形で、主軸方位 N-29°-W、検出面の標高は約 35.7m である。長軸約 2.3m、短軸約 2.3m、深さ約 0.2m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、オリブ褐極細砂～シルトである。

遺物は製塩土器片、土師器片が出土したが、いずれも細片のため、時期は不明である。

2-SK 101 (図 22)

第2調査区第2面、北側で検出した土坑である。平面形状は不整形で、調査区外へと延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-2°-E、検出面の標高は約 35.3m である。長軸約 2.2m 以上、短軸約 1.6m、深さ約 0.3m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は2層に分層でき、上層が黒褐シルト、下層が黒褐シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

第15調査区(図 24)

(1) 竪穴建物

15-竪穴 10 (図 25・26)

第15調査区北西側で検出した竪穴建物である。15-掘立2、28-竪穴3と掘乱に切られる。平面形状は方形を呈すると考えられる。主軸方位 N-90°-W、検出面の標高は約 36.6m である。長辺約 5.0m、短辺約 4.5m 以上、深さ約 0.4m を測る。

埋土の掘削後、貼床面で遺構の検出を行い、支柱穴（S P 4・6）、周壁溝の一部を検出した。

埋土は、炭化物を多量に含む黒褐シルトである。遺物は埋土から須恵器杯蓋（19）・有蓋高杯蓋（20）、土師器甕（23・24・25・26）・甕（27）・高杯（21・22）が出土した。弥生土器甕（28）・底部（29）は混入資料である。その他、図示できなかったが、須恵器杯蓋片・杯身片・高杯片、土師器甕片・甕片・高杯片、製塩土器片が出土した。

貼床はにぶい黄褐細砂～シルトと褐シルトで、遺物は貼床直上から土師器甕片が出土した。貼床から白玉（S2）、製塩土器片が出土した。

周壁溝は、北側の一部では貼床直上で検出し、掘削を行った。しかし竪穴建物の南側では断面で確認したのみである。幅約 0.16m、深さ約 0.16m を測る。埋土は灰黄褐細砂～シルトである。

支柱穴は2基確認できた。S P 4は隅丸方形を呈する。検出面の標高は約 36.4m、長辺約 0.62m、短辺約 0.35m、深さ約 0.12m を測る。断面形状は方形に段落ちである。埋土はにぶい黄褐シルトである。

S P 6は隅丸方形を呈する。検出面の標高は約 36.42m、長辺約 0.5m、短辺約 0.36m、深さ約 0.14m を測る。断面形状は逆台形を呈する。埋土は上層が暗褐シルト、下層が褐細砂～シルトである。

出土遺物と遺構の切合い関係から、古墳時代中期中葉～後半と考えられる。

15-竪穴 20 (図 27・28)

第15調査区中央東側で検出した竪穴建物である。掘乱に切れ、調査区外へ延びるため全体の形状は不明であるが、やや歪な長方形を呈すると考えられる。主軸方位 N-22°-W、検出面の標高は約 36.6m である。長辺約 3.2m 以上、短辺約 3.0m、深さ約 0.4m を測る。

埋土の掘削後、貼床面で遺構の検出を行い、周壁溝と支柱穴3基（S P 1・2・80）、ビット（S P

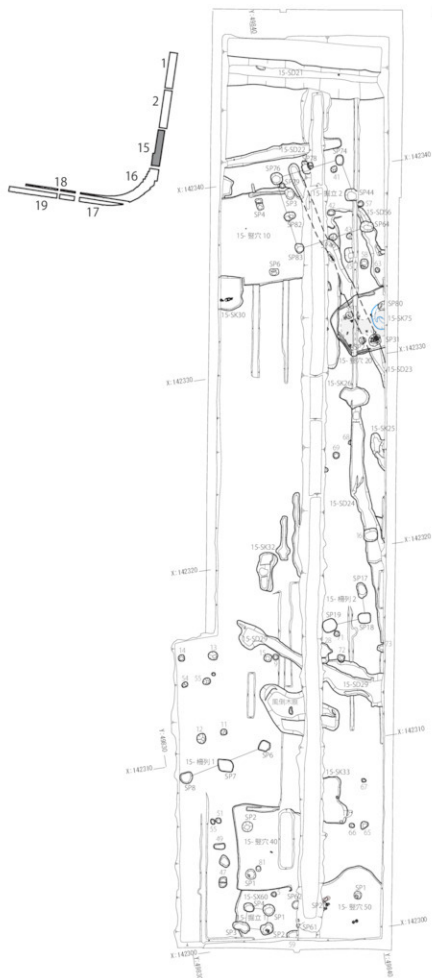


図 24 第 15 調査区 平面図 (S=1/200)

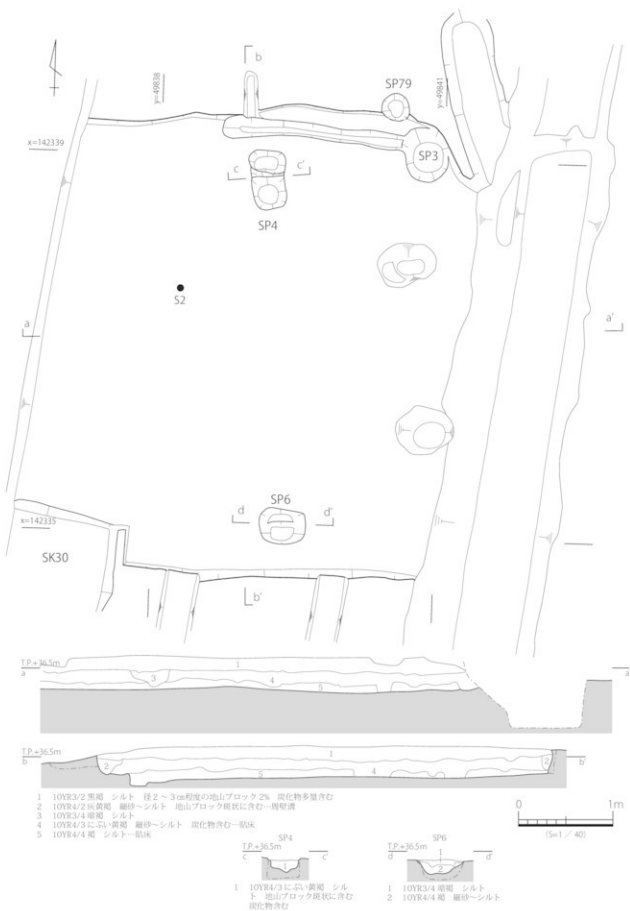


図 25 15- 竪穴 10 平・断面図

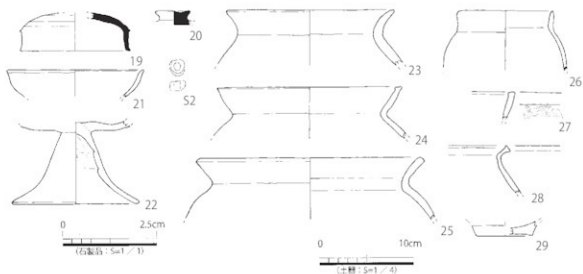


図 26 15- 竪穴 10 出土遺物実測図

31) を検出した。

埋土は褐細砂～シルトである。遺物は埋土から土師器高杯 (31)・壺 (41)、図示できなかったが須恵器杯蓋片・土師器甕片・高杯片・製塩土器片、サヌカイト剥片が出土した。

貼床は暗褐シルトで、貼床から土師器甕 (34・36・37・38)・甕 (40・42)・高杯 (32)・杯 (30) が出土した。

周壁溝は、一部で確認でき、幅約 0.2 m、深さ約 0.09 m を測る。埋土は暗褐シルトである。

支柱穴は 3 基確認できた。S P 1 は竪穴建物北西側で検出した円形の支柱穴である。検出面の標高は約 36.36m、長径約 0.36m、短径約 0.34m、深さ約 0.18m を測る。断面形は逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕がにぶい黄褐シルトと褐細砂～シルト、掘形が褐シルトと暗褐シルト、にぶい黄褐シルトである。

S P 2 は竪穴建物南西隅で検出した不整形の主柱穴である。検出面の標高は約 36.32m、長径約 0.38m、短径約 0.36m、深さ約 0.18m を測る。断面形は逆台形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘形がにぶい黄褐細砂～シルト、暗褐細砂～シルト、暗褐シルトである。

S P 80 は竪穴建物北東隅で検出した楕円形的主柱穴である。検出面の標高は約 36.42m、長径約 0.4m 以上、短径約 0.42m、深さ約 0.22 m を測る。断面形は方形を呈する。埋土は単層で暗褐シルトである。

S P 31 は竪穴建物中央南側で検出した不整形円形

の柱穴である。検出面の標高は約 36.2m、長径約 0.62m、短径約 0.6m、深さ約 0.14m を測る。断面形は方形の段落ちである。埋土は上層が炭化物を多量に含む暗褐細砂～シルト、下層が褐細砂～シルトである。遺物は土師器甕 (33・39) が出土した。(39) は底部に穿孔があるので、甕転用甕と考えられる。

貼床掘削後、下層から炭化物と焼土層、S K 75 を検出した。埋土は炭化物を多量含む暗褐細砂～シルトと炭化物を少量含むにぶい黄褐細砂～シルトである。遺物の出土状況から、生活面が 2 面存在した可能性が考えられる。

S K 75 は 15- 竪穴 20 の下層で検出した土坑である。調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-3°-W、検出面の標高は約 36.2m である。長軸約 1.3m、短軸約 0.7m 以上、深さ 0.3m を測る。断面形状は逆台形で段落ちを有する。埋土は 4 層に分层でき、上層が黒褐シルト～粘土と黒褐シルト、中層が黒褐シルト～粘土、下層が暗褐シルト～粘土である。遺物は土師器甕 (35) が出土した。

出土遺物の年代から、古墳時代中期後半と考えられる。

15- 竪穴 40 (図 29・30)

第 15 調査区南側で検出した竪穴建物である。掘削に切られるため、全体の形状は不明であるが、方形を呈すると考えられる。主軸方位 N-5°-E、検出面の標高は約 36.65m である。長辺約 4.4m、短辺

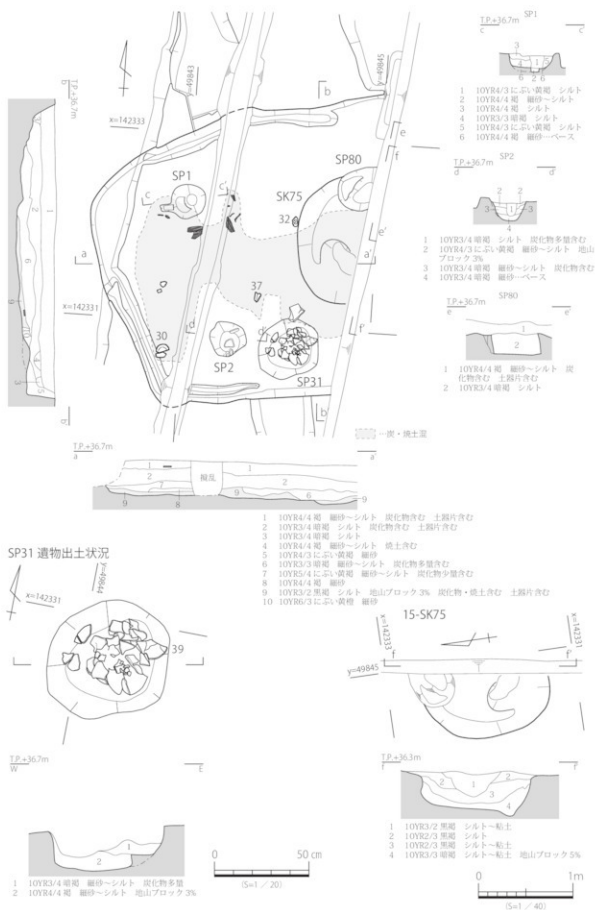


図 27 15- 竪穴 20 平・断面図

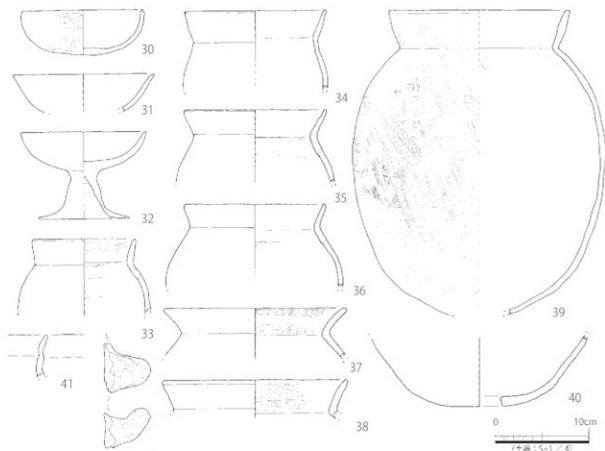


図 28 15- 竪穴 20 出土遺物実測図

約 3.2m 以上、深さ約 0.1m を測る。

埋土が浅く、調査段階で一段落として貼床面に達した。貼床面で遺構の検出を行い、周壁溝と支柱穴 2 基 (S P 1・2)、ピット (S P 81) を検出した。このうち周壁溝の深度が浅かったため、平面で検出ができず、断面でその存在を確認した。

埋土は黒褐シルトと褐細礫混じり細砂、灰黄褐礫混じりシルト、灰黄褐砂礫である。遺物は土師器甕 (45)・高杯 (44)、図示できなかったが須恵器杯身片・土師器高杯片が出土した。

貼床にはぶい黄褐細礫混じり細砂である。貼床から土師器鉢 (43)、打製石斧 (S3)、図示できなかったが土師器高杯片が出土した。

周壁溝は幅約 0.2～0.3m、深さ約 0.06m を測る。埋土は褐細砂である。

支柱穴は 2 基確認できた。S P 1 は竪穴建物南西隅で検出した円形の主柱穴である。検出面の標高は約 36.54m、直径約 0.54m、深さ約 0.17m を測る。断面形は方形に段落ちである。埋土は単層で、褐細砂である。

S P 2 は竪穴建物北西隅で検出した円形の主柱穴である。検出面の標高は約 36.54m、直径約 0.56m、深さ約 0.08m を測る。断面形は浅い皿状である。埋土は単層で、にぶい黄褐細礫混じり細砂である。

出土遺物の年代から、古墳時代中期後半と考えられる。

15- 竪穴 50 (図 30・31)

第 15 調査区南東端で検出した竪穴建物と考えられる遺構である。攪乱に切られ、調査区外に延びるため全体の形状は不明であるが、不整形な形状を呈している。主軸方位 N-123°-W 検出した標高は約 36.65m である。規模は、長軸約 3.7m 以上、短軸約 3.4m 以上、深さ約 0.15m を測る。

埋土の掘削を行い、貼床面で遺構の検出を行った結果、西側攪乱際にカマドを確認した。

埋土は暗褐細礫混じりシルトである。遺物は図示できなかったが須恵器杯身片、製塩土器片が出土した。

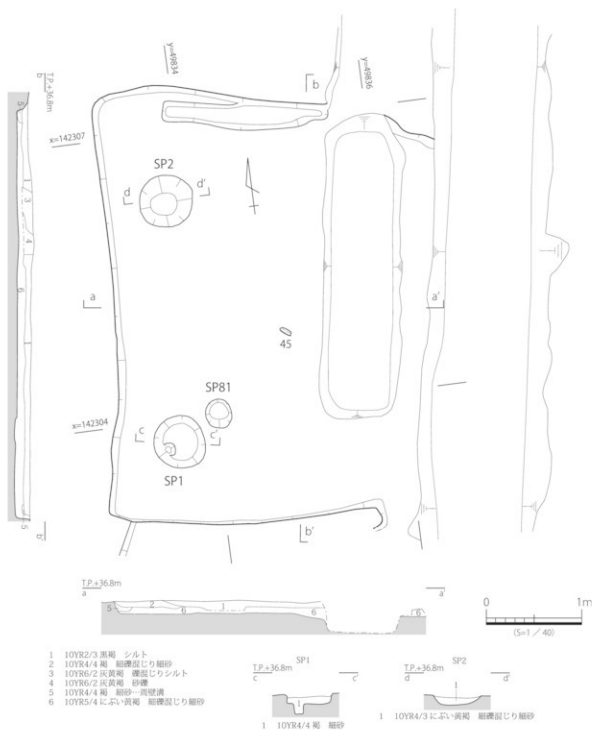


図 29 15- 竪穴 40 平・断面図

貼床は暗褐砂礫である。貼床掘削後、支柱穴と考えられるSP1とSP2を検出した。遺物は、床面直上から須恵器杯身(47・48)・有蓋高杯蓋(46)が並んで出土した。そのうち杯身(47)の上に有蓋高杯蓋(46)が載った状態で重なって原位置をとどめていた。

カマドは西側に作り付けられ、北側の袖と南側

袖の一部を確認した。カマド内部中央には土師器甕(49)が出土した。カマド構築材が褐灰細礫混じりシルトである。カマド内部の堆積は炭化物を含む褐細礫混じり細砂である。

支柱穴は1基確認できた。SP1は竪穴建物北東隅で検出した円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.56m、直径約0.20m、深さ約0.16mを測る。

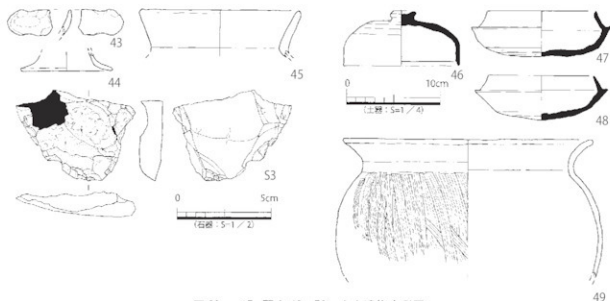


図30 15- 竪穴40・50 出土遺物実測図

断面形はU字形を呈する。埋土は暗褐細礫混じり細砂である。

S P 2は竪穴建物北西隅で検出した半円形のビットである。検出面の標高は約36.56m、長軸約0.56m、短軸約0.16m、深さ約0.2mを測る。断面形は椀状に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐シルト～中粒砂、掘形が褐シルト～細砂である。後述するS X 60に伴うビットの可能性もある。

竪穴建物の平面プランが不整形であり、貼床面まで砂礫の持ち上がりが確認できることから、地震の影響が考えられる。

出土遺物の年代から、古墳時代後期前半～中頃、TK47～10併行期と考えられる。

(2) 性格不明遺構・ビット

15-S X 60 (図32)

第15調査区南側で検出した性格不明遺構である。地震の影響を受けた竪穴建物の可能性も考えられる。

15-竪穴40と15-掘立1、掘乱に切れ、調査区外に延びる。平面形状は不整形である。主軸方位N-7°-E、検出面の標高は36.7mである。長軸約3.2m以上、短軸約2.5m以上、深さ約0.2mを測る。

埋土は3層に分層でき、にぶい黄褐砂礫混じり細砂と暗褐砂礫混じり細砂、褐砂礫混じり細砂である。

遺物は図示できなかったが須恵器杯身片、土師器

細片のため、詳細な時期は不明である。

S P 61はS X 60下層で検出したビットである。掘乱に切られるため、平面形は不明である。検出面の標高は36.56m、長軸約0.2m、短軸約0.06m、深さ約0.14を測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は暗褐シルトである。

15-S P 62 (図32)

S P 62はS X 60上層で検出したビットである。掘乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、楕円形を呈すると思われる。検出面の標高は約36.54m、長軸約0.46m、短軸約0.3m、深さ約0.1mを測る。断面形は椀状である。

埋土は2層に分層でき、褐細砂～シルトと暗褐シルトである。

遺物は土師質土器杯(50)が出土した。出土遺物と遺構の埋土の状況から、古代～中世と考えられる。

(3) 掘立柱建物

15-掘立2 (図33・35)

第15調査区の中央北側で検出した掘立柱建物である。2×2間の側柱建物で、S P 44・46・64・74・76・78・82・83の8基で構成する。柱穴の一部は掘乱に切られる。主軸方位はN-10°-W、検出面の標高36.5mである。梁行総長約3.7m、桁行総長約3.9m、床面積は約14.4㎡を占める。芯芯間距離は約1.6～2.2mである。

S P 44は一部を掘乱に切られるが円形を呈する

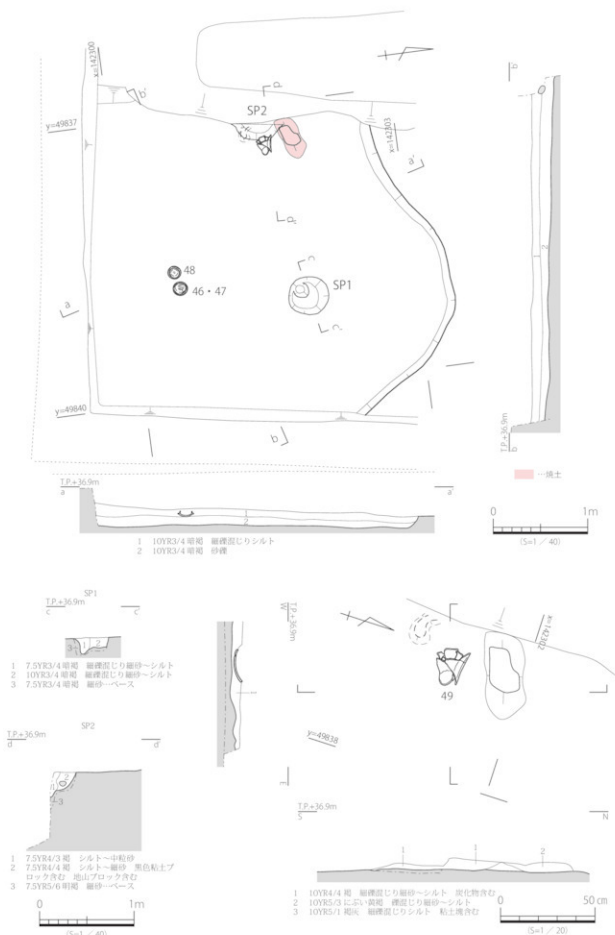


図 31 15- 竪穴 50 平・断面図

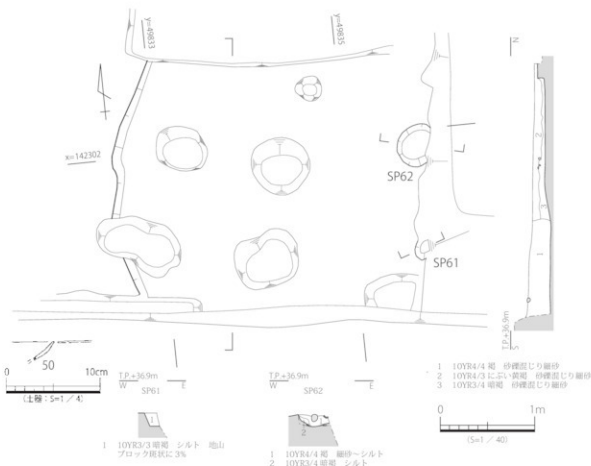


図 32 15-SX60 平・断面図及び SP62 出土遺物実測図

と考えられる。直径約 0.64 m、深さ約 0.36 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は 2 層に分層でき、上層が褐シルト、下層が暗褐シルトである。

S P 46 はやや歪な円形を呈し、長径約 0.41 m、短径約 0.36 m、深さ約 0.28 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は単層で、暗褐細砂～シルトである。

S P 64 は不整形な楕円形を呈し、長径約 0.72 m、短径約 0.57 m、深さ約 0.44 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は 2 層に分層でき、上層が褐シルト、下層が暗褐シルトである。

S P 74 は不整形な円形を呈し、直径約 0.54 m、深さ約 0.36 m を呈する。断面形状は方形を呈する。埋土は 5 層に分層でき、上層が褐灰シルトとにぶい黄褐シルト、中層が灰黄褐細砂～シルトとにぶい黄褐細砂、下層が灰黄褐細砂である。

S P 76 は円形を呈し、直径約 0.64 m、深さ約 0.47 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は 3 層に分層でき、黒褐細砂～シルトと地山ブロック

土を含む暗褐細砂～シルト、暗褐細砂～シルトである。

S P 78 は視岳に切られるため不整形な形状を呈する。直軸約 0.72 m、短軸約 0.32 m、深さ約 0.51 m を測る。断面形状は筒型である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘形にぶい黄褐細砂～シルトと黒褐シルト、暗褐細砂～シルトである。

S P 82 はやや歪な楕円形を呈し、長径約 0.61 m、短径約 0.44 m、深さ約 0.34 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は 3 層に分層でき、地山ブロック土を含む暗褐シルトと暗褐シルト、黒褐シルトである。

S P 83 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.52 m、深さ約 0.43 m を測る。断面形状は方形に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルトと褐シルト、掘形が暗褐シルトと黒褐シルトである。

遺物は主に S P 46 から須恵器高杯片、S P 64 から土師器高杯片、製塩土器片、S P 76 から土師器甕 (54) が出土した。

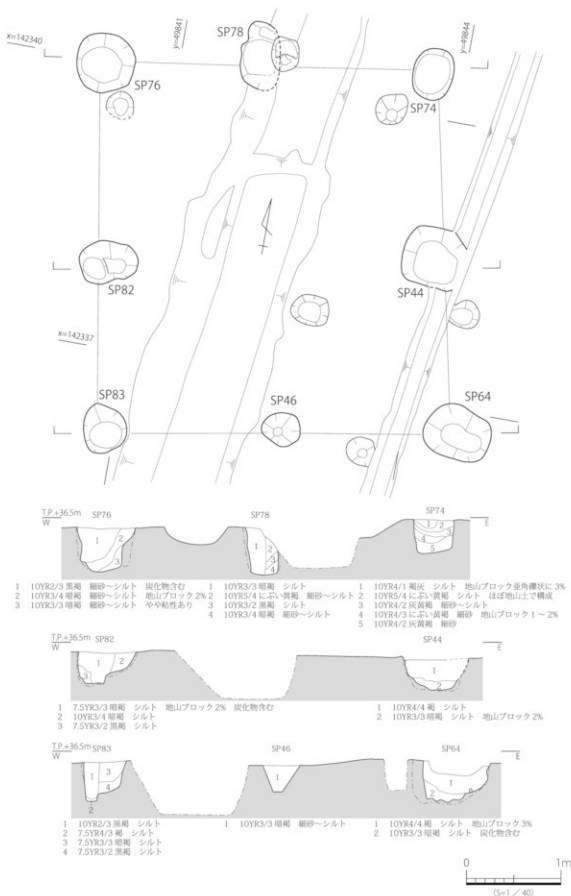


図 33 15-掘立2 平・断面図

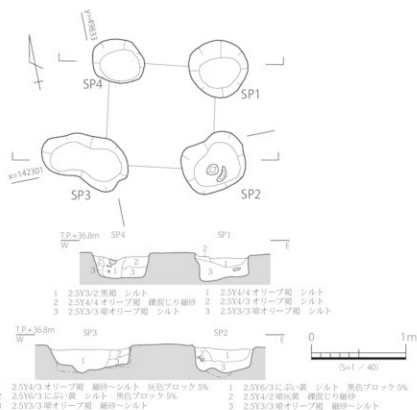


図 34 15-掘立1 平・断面図

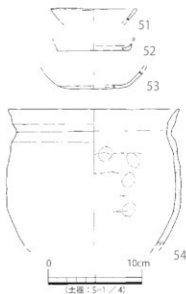


図 35 15-掘立1・2 出土遺物実測図

出土遺物の年代から古墳時代後期後半と考えられる。

15-掘立1 (図34・35)

第15調査区の南側で検出した掘立柱建物である。S X 60を切る。1×1間の側柱建物で、S P 1～4で構成する。主軸方位はN-75°-W、検出面の標高は約36.7mである。梁行総長約1.1m、桁行総長約1.2m、床面積は約1.32㎡を占める。

S P 1は円形を呈し、直径約0.63m、深さ約0.29mを測る。断面形状は方形である。埋土は上層がオリブ褐シルト、下層が暗オリブ褐シルトである。

S P 2はやや歪な隅丸方形を呈し、長辺約0.67m、短辺約0.58m、深さ約0.3mを測る。断面形状は方形である。埋土は上層がにぶい黄シルトと暗灰黄礫混じり細砂、下層が暗オリブ褐細砂～シルトである。

S P 3は不整形な楕円形を呈し、長径約0.94m、短径約0.53m、深さ約0.29mを測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は3層に分類でき、オリブ褐細砂～シルトとにぶい黄シルト、暗オリブ褐細砂～シルトである。

S P 4は楕円形を呈し、長径約0.56m、短径約0.46m、深さ約0.28mを測る。埋土は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形がオリ

ープ褐礫混じり細砂と暗オリーブ褐シルトである。

遺物はSP1より土師質土器杯(51)、SP2より杯(52)、SP3の掘形から杯(53)出土した。

出土遺物と埋土の状況から、平安時代以降と考えられる。

（4）柵列

15-柵列2（図36）

第15調査区の中央で検出した柵列と考えられる遺構である。1間×1間で、SP17～19の3基で構成する。主軸方位はN-85°-E、検出面の標高は約36.6mである。総長約3.5m、芯芯間距離は約1.8mを測る。

SP17は楕円形を呈し、長径約0.82m、短径約0.49m、深さ約0.27mを測る。断面形状は方形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルトと暗褐細砂、掘形が暗褐細砂～シルトである。

SP18は隅丸方形を呈し、長辺約0.68m、短辺約0.54m、深さ約0.40mを測る。断面形状は方形に段落ちである。埋土は上層が暗褐細砂～シルト、下層が暗褐シルトである。

SP19は隅丸方形を呈し、長辺約0.76m、短辺約0.67m、深さ約0.31mである。断面形状は方形に段落ちである。埋土は上層が褐細砂、下層が暗褐細砂である。

遺物はSP18から須恵器杯身(55)、土師器甕(56)が出土したほか、図示できなかったが、須恵器杯蓋片・高杯片、土師器高杯片など、古墳時代後半期の遺物が出土している。

15-柵列1（図36）

第15調査区の南側で検出した柵列と考えられる遺構である。SP6～8の3基で構成する。主軸方位はN-76°-E、検出面の標高は約36.65mである。総長約4.6m、芯芯間距離は約2.3mを測る。

SP6は歪な隅丸方形を呈し、長辺約0.59m、短辺約0.57m、深さ約0.28mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は単層で、暗褐礫混じり細砂である。

SP7はやや歪な隅丸方形を呈し、長辺約0.82m、短辺約0.64m、深さ約0.11mを測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は単層で、暗褐シルト～細砂である。

SP8は円形を呈し、直径約0.6m、深さ約0.22mを測る。断面形状は方形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘形が暗褐細砂～シルトと暗褐粗砂～細砂である。

遺物はわずかながらSP7・8から土師器片が出土しているが、細片であるため、時期は不明である。

（5）土坑

15-SK25（図38）

第15調査区の中央東側で検出した土坑である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-14°-W、検出面の標高は約36.55mである。長軸約2.0m以上、短軸約0.7m以上、深さ約0.25mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、極暗褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

15-SK26（図38）

第15調査区の中央東側で検出した不整形な形状の土坑である。15-SD24を切り、一部を攪乱に切られる。主軸方位N-70°-W、検出面の標高は約36.5mである。長軸約1.55m、短軸約0.9m、深さ約0.1mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、褐シルトである。

遺物は製塩土器片、土師器片が出土したが、細片のため、詳細な時期は不明である。

15-SK33（図38）

第15調査区の中央南側で検出した不整形な形状の土坑である。攪乱に切られる。主軸方位N-5°-E、検出面の標高は約36.65mである。長軸約2.45m、短軸約1.3m以上、深さ約0.15mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、暗褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

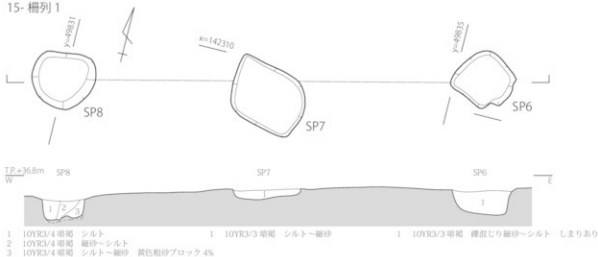
15-SK32（図38）

第15調査区の中央で検出した不整形な形状の土坑である。主軸方位N-15°-E、検出面の標高は約36.6mである。長軸2.0m、短軸1.0m、深さ0.25mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は2層に分層でき、上層が暗褐シルト、下層が黒褐シルトである。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため、詳細

15- 柵列 1



15- 柵列 2

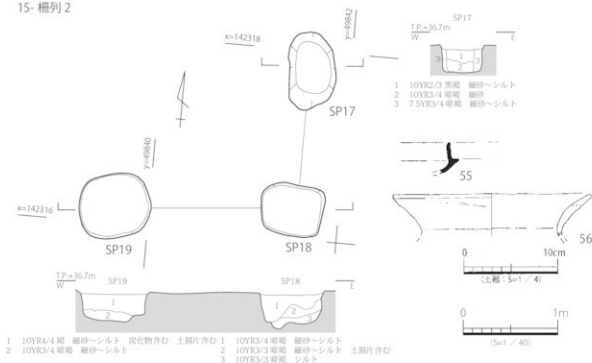


図 36 15-柵列 1・2 平・断面図及び出土遺物実測図

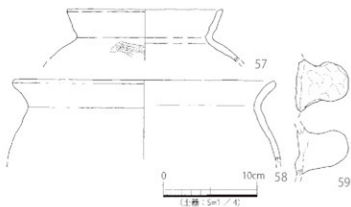


図 37 15-SK30 出土遺物実測図

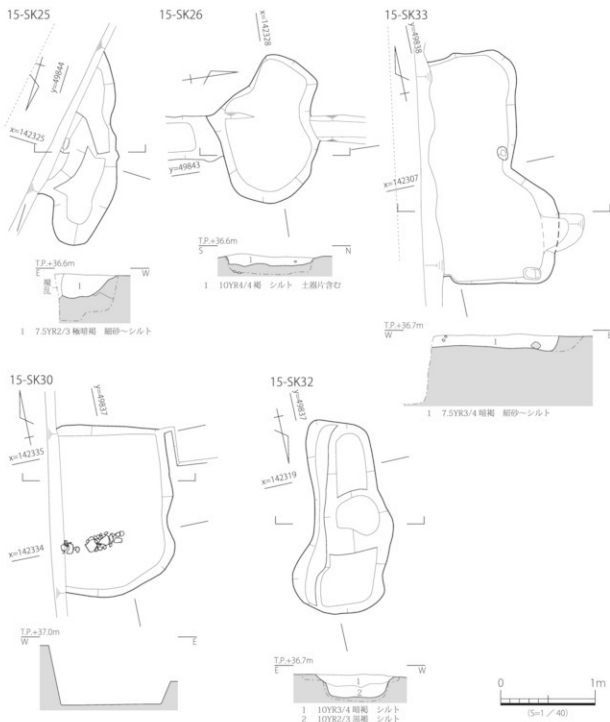


図 38 15-SK25・26・30・32・33 平・断面図

な時期は不明である。

15-SK30 (図 37・38)

第15調査区北西端で検出した方形の土坑である。28-堅穴3の一部と考えられる。検出面の標高は約36.5mである。長辺約1.8m、短辺約1.2m以上、深さ約0.2mを測り、断面形状は逆台形である。

遺物は土師器裏(57)・鍋(58)・甕把手(59)が出土した。

(6) 溝

15-S-D22 (図 39・42)

第15調査区の北側で検出した東西方向の溝である。28-S-D22と同一の溝である。28-S-D22とあわせて、溝の長さは約16.8mとなる。一部を攪乱に切られる。主軸方位N-88°-E、検出面の標高は約36.4mである。第15調査区では、長さ約6.3mを検出し、幅約0.6m、深さ約0.2mを測る。断面形状は逆台形である。

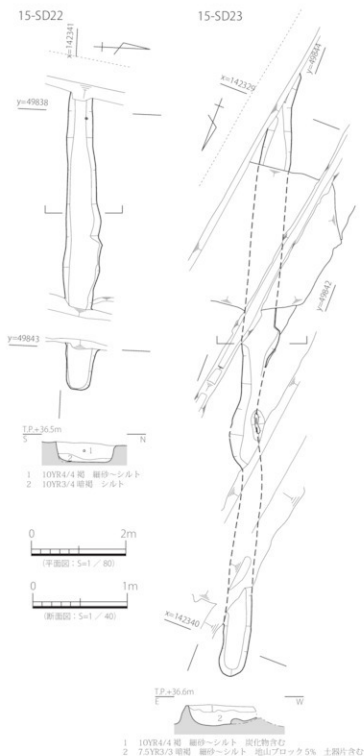


図39 15-SD22・23 平・断面図

埋土は2層に分層でき、上層が褐細砂～シルト、下層が暗褐シルトである。

遺物は土師器甕(63)が出土した。図示した遺物の他に、須恵器杯身片、土師器甕把手・高杯片が出土した。出土遺物と他の調査区の成果から、古墳時代後半期と考えられる。

15-SD23 (図39・42)

第15調査区の北東側で検出した南北方向の溝である。溝の南側が調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-15°-W、検出面の標高は約36.5mである。長さ約12.8mを検出し、幅約0.7m、深さ約0.2mを測る。断面形状は不整形である。

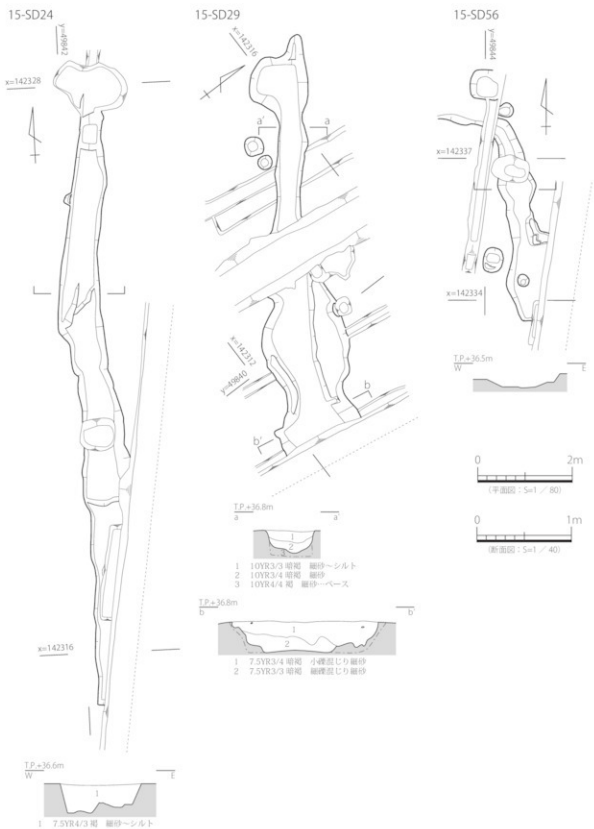


図 40 15-SD24・29・56 平・断面図

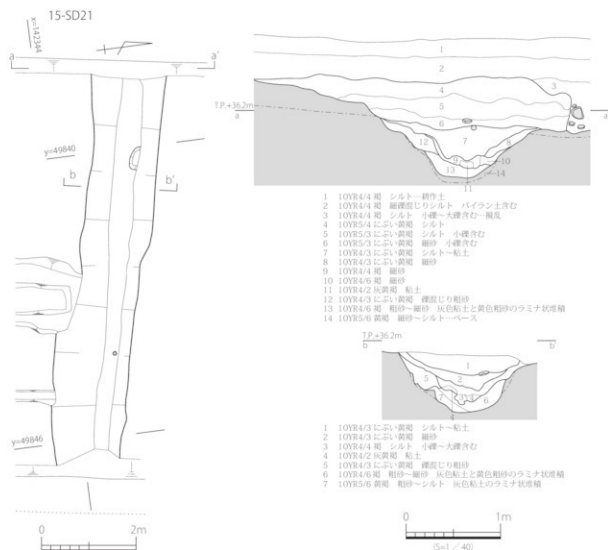


図 41 15-SD21 平・断面図

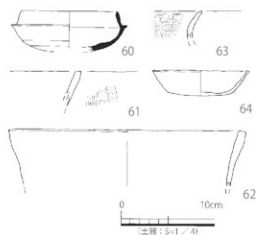


図 42 15-SD 出土遺物実測図

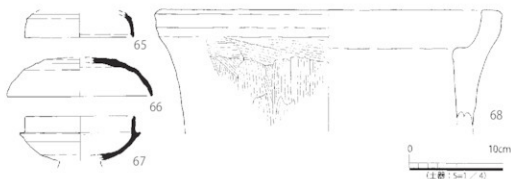


図43 第15調査区 出土遺物実測図

埋土は2層に分層でき、上層が褐細砂～シルト、下層が暗褐細砂～シルトである。

遺物は土師器甕（61）が出土した。図示した遺物の他に製塩土器片が出土したが、遺物が細片のため、詳細な時期は不明である。

15－S D 24（図40・42）

第15調査区の中央で検出した南北方向の溝である。主軸方位N-0°-Wで、南北にやや蛇行する。溝の南側が調査区外へと延びるため、全体の形状は不明である。検出面の標高は約36.45～36.6mである。長さ約13.0mを検出し、幅は約0.9m、深さ約0.45mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層で、褐細砂である。

遺物は須恵器杯身（60）が出土した。図示した遺物の他に、石器剥片（サヌカイト）が出土した。出土遺物の年代から、古墳時代中期後半～後期初頭、TK23～MT15形式併行期と考えられる。

15－S D 29（図40）

第15調査区の中央で検出した東西方向の溝である。東側が調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-55°-Wで東西にやや蛇行する。検出面の標高は約36.6～36.65mである。長さ約8.9mを検出し、幅約0.5～1.8m、深さ約0.3mを測る。断面形状はU字形から逆台形である。

埋土は2層に分層でき、a断面で上層が暗褐細砂～シルト、下層が暗褐細砂、b断面で上層が暗褐小礫混じり細砂、下層が暗褐細礫混じり細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

15－S D 56（図40・42）

第15調査区の北側で検出した南北方向の溝である。溝の東側は調査区外へ延びるため、全体の形状

は不明である。15-掘立2と攪乱に切られる。15-S D 23に平行し、主軸方位N-8°-Wで南北にやや蛇行する。検出した標高は約36.4mである。長さ約5.5mを検出し、幅約0.75m、深さ約0.15mを測る。断面形状は逆台形である。

遺物は土師器甕（62）が出土した。図示した遺物の他に、土師器高杯片、粘土塊が出土した。

15－S D 21（図41）

第15調査区の北側で検出した、東西方向の溝である。14-S D 39・31-S D 1・29-S D 39と同一の遺構である。主軸方位N-79°-W、検出面の標高は約36.0mである。幅約1.4～1.6m、深さ約0.6～1.1mを測る。断面形状はU字形である。

埋土はa断面の最上層が、にぶい黄褐シルトとにぶい黄褐細砂、上層がにぶい黄褐シルト～粘土、中層がにぶい黄褐細砂と褐細砂、灰黄褐粘土、にぶい黄褐礫混じり粗砂である。下層が灰色粘土と黄色粗砂のラミナ構造をもつ褐細砂～細砂である。

b断面では上層がにぶい黄褐シルト～粘土、中層がにぶい黄褐細砂、小礫～大礫を含む褐シルト、灰黄褐粘土、にぶい黄褐礫混じり粗砂である。下層が灰色粘土と黄色粗砂のラミナ構造をもつ黄褐細砂～シルトである。

遺物は土師質土器杯（64）が出土した。図示した遺物の他に、土師器碗、製塩土器片、土師質土器片、粘土塊が出土した。出土遺物と周辺の調査成果から、溝の埋設時期は13世紀後半～14世紀前半と判断できる。

第16調査区(図44・45)

(1) 竪穴建物

16-竪穴1(図46~48)

第16調査区の北側で検出した竪穴建物である。主軸方位N-37°-W、検出面の標高は約36.95mである。平面形状は方形を呈する。長辺約4.0m、短辺約3.8m、深さ約0.3mを測る。

遺構の検出段階で、北側にカマドが確認できた。埋土の掘削を行い、貼床面で周壁溝と支柱穴(S P 1~4)を、貼床の掘削後にビット(S P 5・6)を検出した。

埋土は黒褐シルトと暗褐シルトである。遺物は埋土から須恵器杯身(77・78・80・81・82・83)・杯蓋(69・71・72・73・74)・高杯(86)・有蓋高杯蓋(75・76)・壺(87)・甕(89)・土師器甕(90・91)・甕(96・98・99)・土錘(95)が出土した。その他図示できなかったが須恵器杯身片・壺片・甕片などが出土した。

貼床は地山ブロックを含む暗褐シルトである。床面直上から須恵器高杯(84)・長頸壺(88)・土師器甕(93・94)・白玉(54)・図示できなかったが土師器甕片が出土した。これら埋土や床面直上から出土した遺物は、建物中央やや東よりの土器集中箇所から出土した。

周壁溝は一部で確認でき、幅約0.18m、深さ約0.06mを測る。

カマドは竪穴建物の北側中央に作り付けられ、煙道が延びる。残存規模は長さ約0.85m、幅約0.9m、煙道部の長さは約0.74mである。カマド内中央には、土師器甕(92)を用いた支脚が検出されている。カマド袖は褐砂礫混じりシルトを突き固めて構築される。カマド内部へ煙道の土層にぶい黄褐細砂〜シルトで、カマド上部構造の崩落に伴い須恵器杯蓋(70)や土師器甕把手(97)などの土器破片が出土した。支脚周辺には炭化物和焼土粒を多く含む暗褐シルト(以下、炭層)が確認でき、カマド使用時の機能面と考えられる。カマドの支脚南側では炭層を除去した段階で、被熱を受けた火床を検出した。カマドの基底面は支脚より南側は貼床を充填し、北側は5~10cm大の礫を含む基盤面を平坦に整地している。焚口付近からは、正位で須恵器杯身(79)・逆位で高杯(85)が出土した。

支柱穴は4基確認できた。S P 1は竪穴建物北東隅で検出した円形の支柱穴である。検出面の標高

は約36.74m、直径約0.47m、深さ約0.28mを測る。断面形状は方形である。埋土は2層に分層でき、上層が暗褐中礫混じりシルト、下層がにぶい黄褐細砂〜シルトである。

S P 2は竪穴建物南東隅で検出した楕円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.74m、長径約0.43m、短径約0.35m、深さ約0.2mを測る。断面形状はゆるいV字形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘形が地山ブロック斑状を含む暗褐シルトと褐シルトである。

S P 3は竪穴建物南西隅で検出した円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.72m、長径約0.48m、短径約0.45m、深さ約0.26mを測る。断面形状はやや歪なU字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘形が地山ブロック土を含む暗褐シルトと黒褐シルトである。

S P 4は竪穴建物北西隅で検出した楕円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.72m、長径約0.6m、短径約0.56m、深さ約0.3mを測る。断面形状は方形である。埋土は2層確認でき、上層が暗褐中礫混じりシルト、下層がにぶい黄褐細砂〜シルトである。

S P 5は貼床掘削後に検出したやや歪な円形のビットである。検出面の標高は約36.64m、直径約0.38m、深さ約0.09mを測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は単層で、黒褐細砂である。

S P 6は貼床掘削後に検出した円形のビットである。検出面の標高は約36.64m、直径約0.32m、深さ約0.12mを測る。断面形状は浅い皿状に段落ちである。埋土は上層が暗褐シルト、下層が褐シルトである。

出土遺物の年代から、古墳時代中期後半、TK23~47併行期と考えられる。

16-竪穴3(図49・50・55)

第16調査区北西側で検出した竪穴建物である。西側は調査区外に延び、南側は農業試験場の排水用側溝に大多数を切られた状態で検出したため、全体の形状は不明である。主軸方位N-82°-W、検出面の標高は約37.0mである。長軸約5.0m以上、短軸約4.8m以上、深さ約0.2mを測る。

攪乱のため、竪穴建物の南側は検出段階で貼床面であり、北側のみ埋土が残っていた。埋土の掘削後、カマドと支柱穴(S P 1・4・15・16)を検

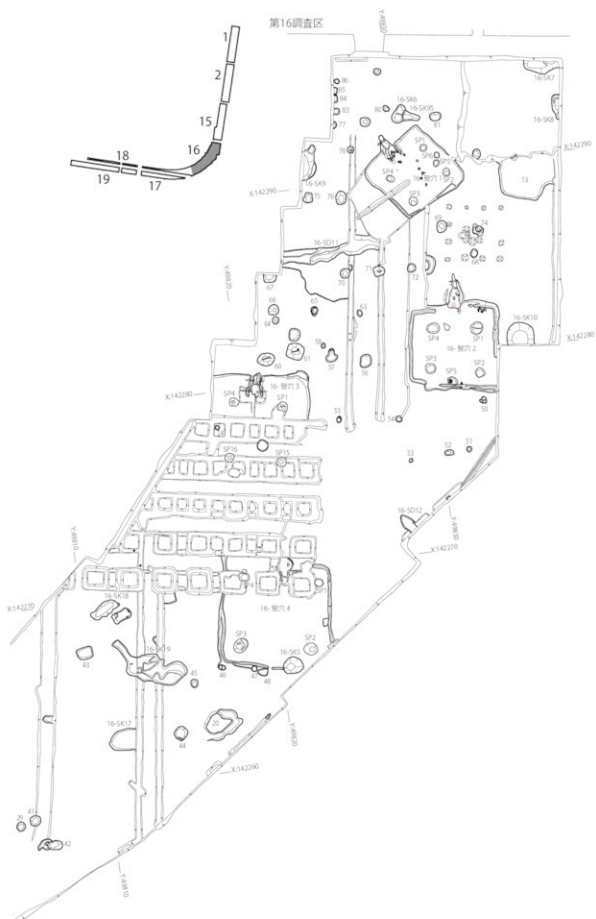


図44 第16調査区 平面図① (S=1/200)

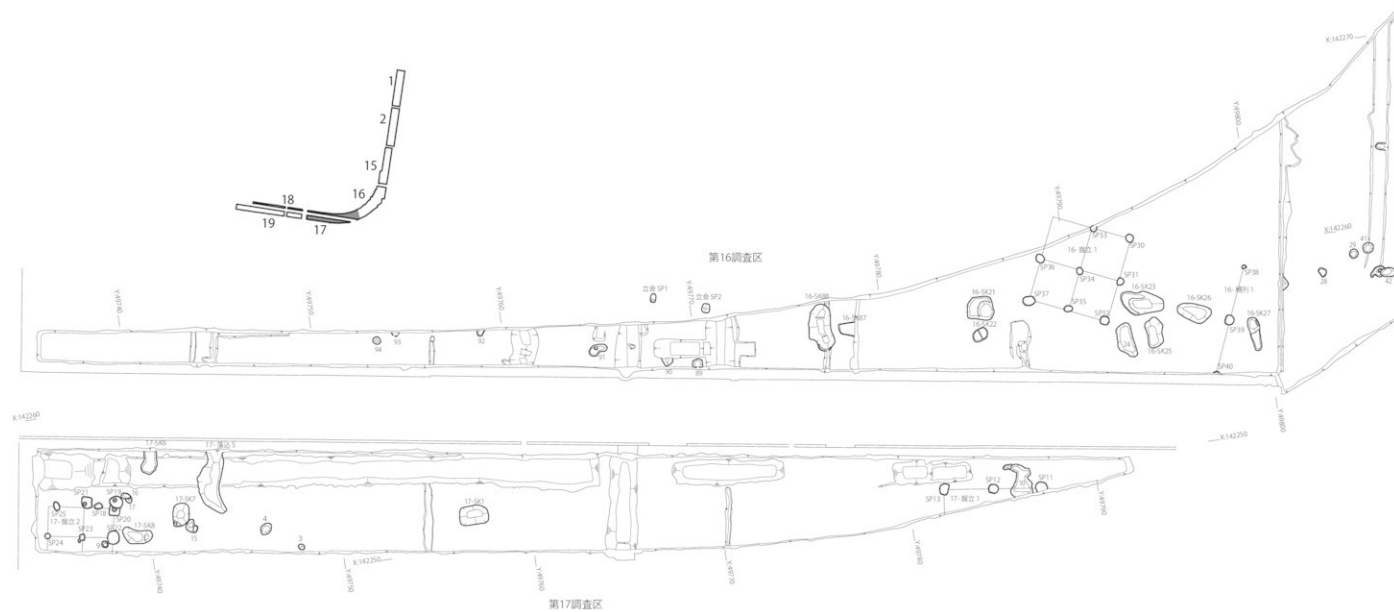


図45 第16・17調査区 平面図② (S=1/200)

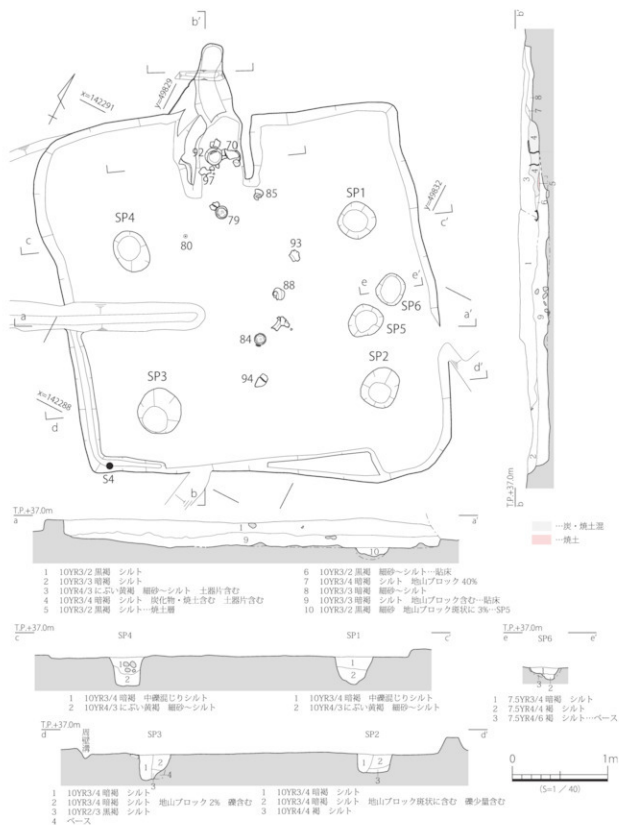


図 46 16- 竪穴 1 平・断面図

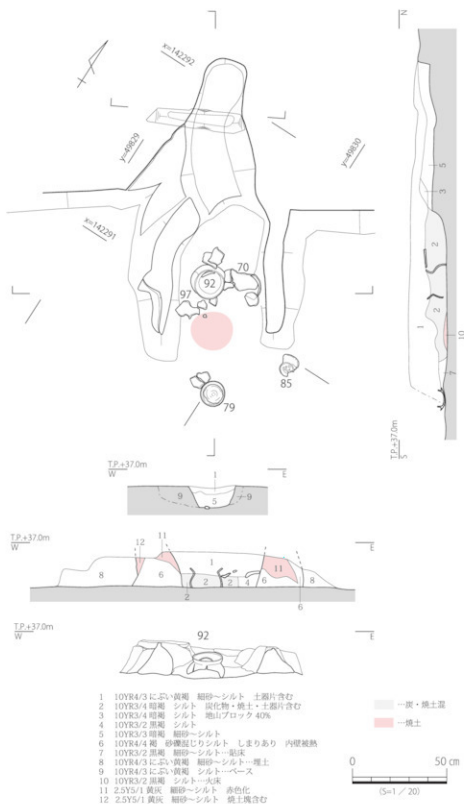


図 47 16- 竪穴 1 カマド 平・断面図

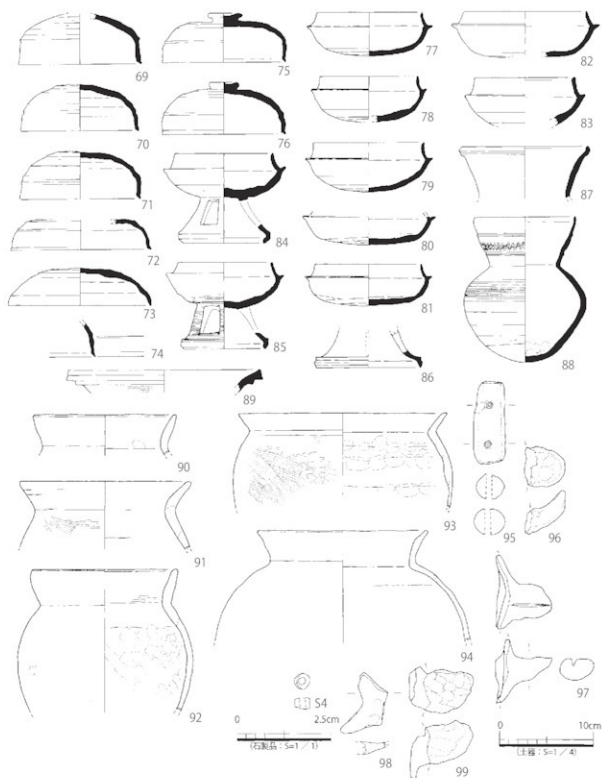


図 48 16-竪穴1 出土遺物実測図

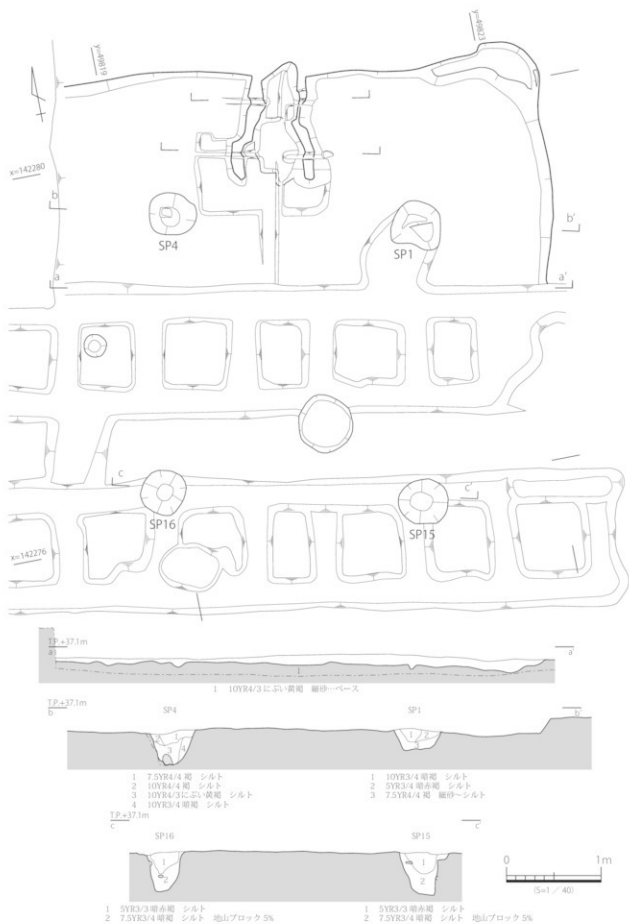


図 49 16- 竪穴3 平・断面図

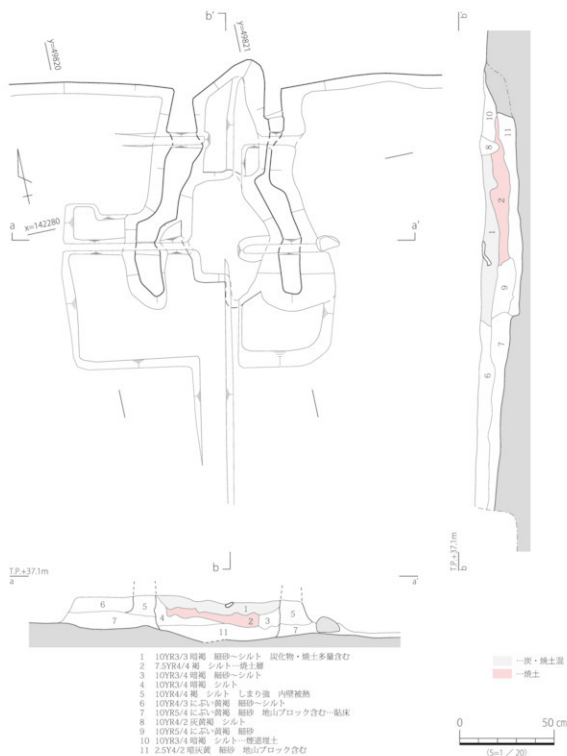


図 50 16- 竪穴 3 カマド 平・断面図

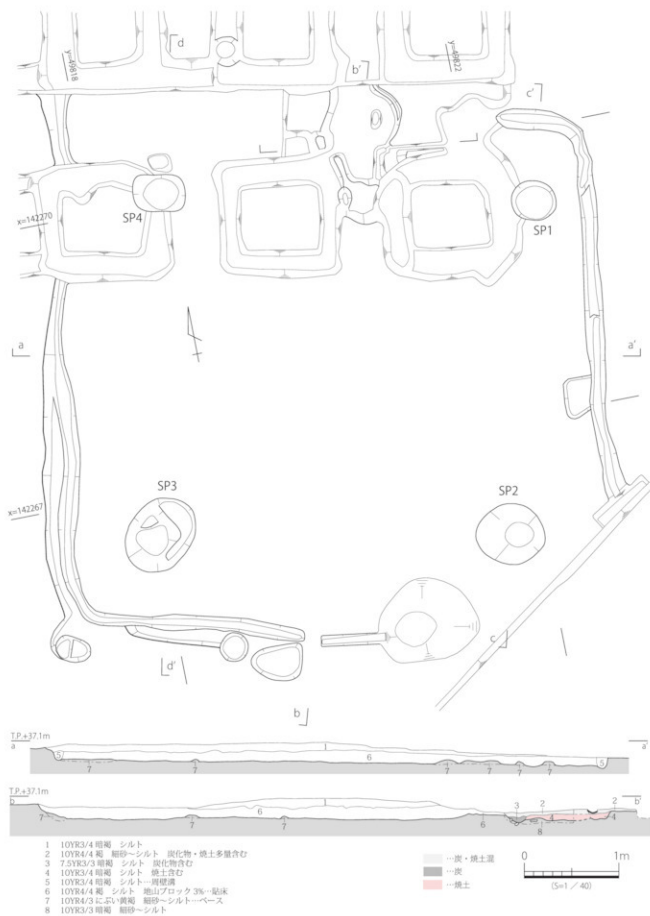


図 51 16- 竪穴 4 平・断面図

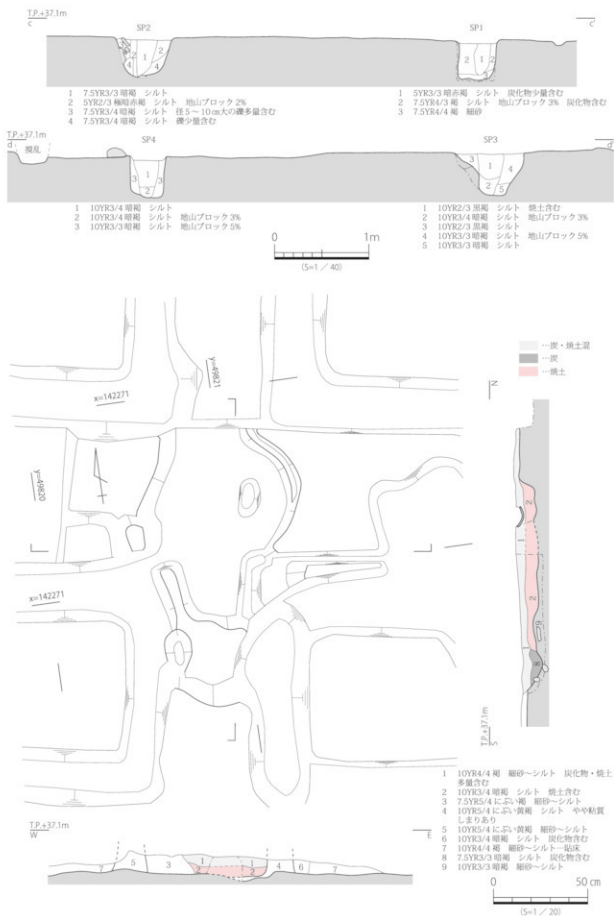


図 52 16- 竪穴 4 カマド 平・断面図

出した。

埋土は暗褐色細砂～シルトとにぶい黄褐色細砂～シルトである。遺物は埋土から土師器甕(113・114)・鍋(115)、図示できなかったが土師器高杯片、製塩土器片が出土した。

貼床は地山ブロック土を含むにぶい黄褐色細砂である。床面直上から須恵器杯蓋(108)が出土した。

カマドは竪穴建物北側中央に作り付けられる。煙道は延びない。カマド袖は褐色シルトで構築し、内壁に被熱が認められる。カマド内部には、カマドの上部構造の崩落土と考えられる炭化物と焼土を多量に含む暗褐色細砂～シルト(以下、炭層)の堆積を確認した。カマドの機能面は地山ブロック土を含む暗灰黄褐色細砂の上面と考えられる。カマド内外から土師器高杯(110)・甕(116～118)、煙道部から土師器杯(109)・鉢(112)が出土した。

支柱穴は4基確認できた。SP1は竪穴建物北東隅で検出した不整形形の支柱穴である。検出面の標高は約36.88m、長径約0.6m、短径約0.56m、深さ約0.24mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色シルト、掘形が暗赤褐色シルトと褐色細砂～シルトである。

SP15は竪穴建物南東隅で検出した楕円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.76m、長径約0.52m、短径約0.46m、深さ約0.42mを測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が暗赤褐色シルト、暗褐色シルトである。

SP16は竪穴建物南西隅で検出した円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.76m、長径約0.46m、短径約0.45m、深さ約0.41mを測る。断面形状は筒型である。埋土は上層が暗赤褐色シルト、下層が暗褐色シルトである。遺物はSP16から土師器高杯(111)が出土した。

SP4は竪穴建物北西隅で検出した楕円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.82m、長径約0.58m、短径約0.5m、深さ約0.34mを測る。断面形状はU字形である。埋土は上層が褐色シルト、下層がにぶい黄褐色シルトと暗褐色シルトである。

出土遺物の年代から、古墳時代中期後半、TK47併行期と考えられる。

16-竪穴4(図51・55)

第16調査区中央で検出した竪穴建物である。掘乱に切られ、調査区外に延びるため、全体の形状

は不明であるが、残存形状から方形を呈すると考えられる。主軸方位N-10°-E、検出面の標高は約37.1mである。長辺約5.9m、短辺約5.7m、深さ約0.2mを測る。

一部に埋土が残っており、埋土の掘削後、貼床面で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴(SP1～4)を検出した。

埋土は暗褐色シルトである。遺物は埋土から鉄製品(M1・M2)、図示できなかったが土師器甕片が出土した。

貼床は地山ブロック土を含む褐色シルトである。貼床から製塩土器(120)、白玉(S6)が出土した。

周壁溝は一部で確認でき、幅約0.16m、深さ約0.12mを測る。埋土は暗褐色シルトである。

カマドは竪穴建物北側中央やや東寄りに作り付けられるが、掘乱の影響により、残存状態は良くない。カマド袖はにぶい黄褐色シルトとにぶい黄褐色細砂～シルトで構築する。カマド内部には炭化物と焼土を多量に含む褐色細砂～シルトが確認でき、カマドの上部構造の崩落土と考えられる。その下層に焼土を含む暗褐色シルトと炭化物を含む暗褐色シルトが堆積しており、カマドの機能面と考えられる。カマドから土師器高杯(119)が出土した。

支柱穴は4基確認できた。SP1は竪穴建物北東隅で検出した円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.83m、長径約0.54m、短径約0.5m、深さ約0.38mを測る。断面形状は筒型である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗赤褐色シルト、掘形が褐色シルトと褐色細砂である。

SP2は竪穴建物南東隅で検出した楕円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.86m、長径約0.72m、短径約0.64m、深さ約0.38mを測る。断面形状はU字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色シルト、掘形上層が暗赤褐色シルトと径5～10cm大の礫を多量含む暗褐色シルト、掘形下層が暗褐色シルトである。

SP3は竪穴建物南西隅で検出した楕円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.94m、長径約0.84m、短径約0.66m、深さ約0.44mを測る。断面形状は不整形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が焼土を含む黒褐色シルトと暗褐色シルト、黒褐色シルトと暗褐色シルトである。

SP4は竪穴建物北西隅で検出した円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.88m、長径約

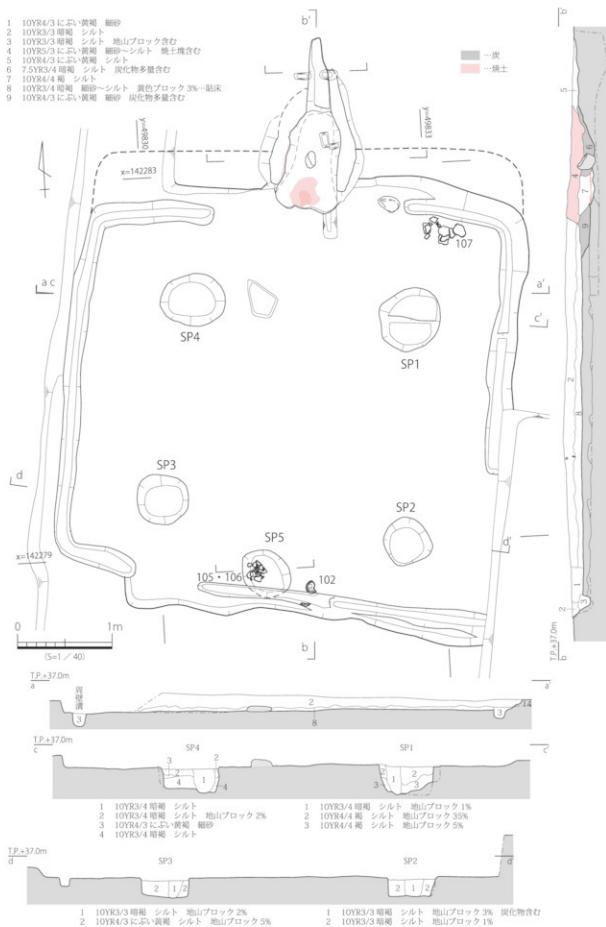


図 53 16- 竪穴 2 平・断面図

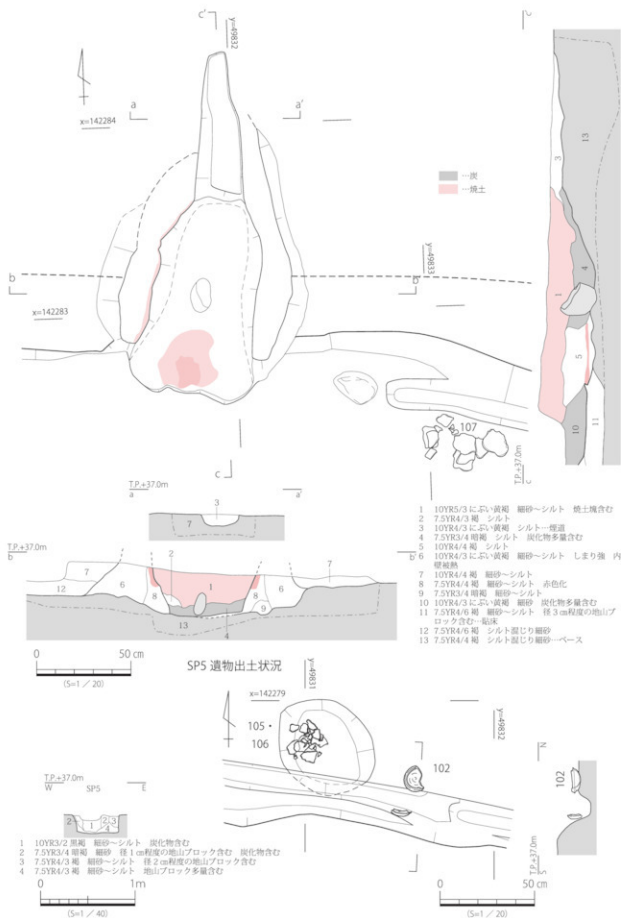


図54 16- 竪穴2カマド 平・断面図及びSP5 遺物出土状況

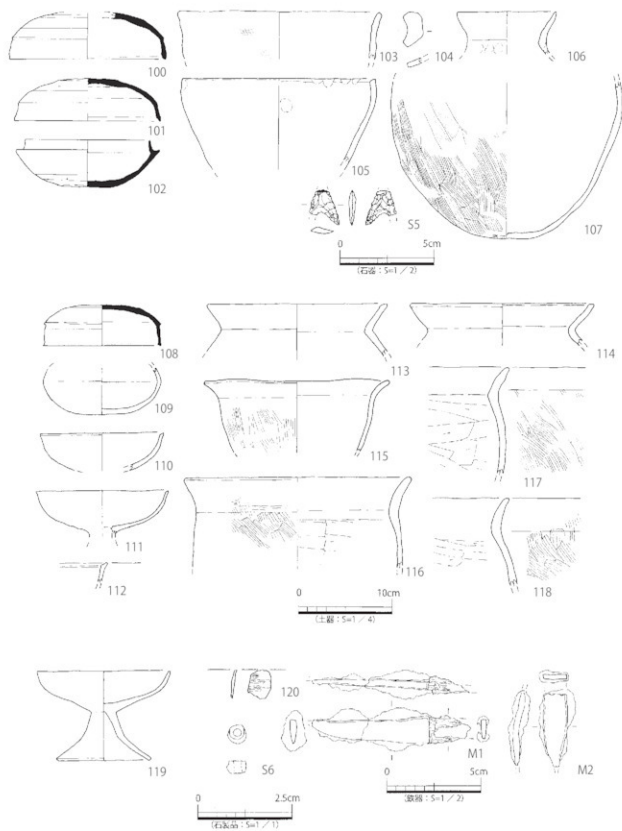


図 55 16- 竪穴 2・3・4 出土遺物実測図

0.8m、短径約0.78m、深さ約0.38mを測る。断面形状は筒型である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色シルト、掘形が地山ブロック土を含む暗褐色シルトである。

出土遺物の年代から、古墳時代中期中葉と考えられる。

16-1 竪穴2（図53・55）

第16調査区北側で検出した竪穴建物である。南東隅が調査区外に延びるが、平面形状は正方形を呈すると考えられる。主軸方位N-7°-E、検出面の標高は約36.9mである。長辺約4.7m、短辺約4.7m、深さ約0.15mを測る。

埋土の掘削を行い、貼床面で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴（SP1～4）、貼床除去後にピット（SP5）を検出した。

埋土はにぶい黄褐色細砂と暗褐色シルトである。遺物は埋土から土師器甕（104）が出土した。

貼床は地山ブロック土を含む暗褐色細砂～シルトである。床面直上から須恵器杯身（102）、土師器甕（107）、貼床から須恵器杯蓋（100・101）、図示できなかったが須恵器杯身片、土師器把手などが出土した。

周壁溝はほぼ全体で確認でき、幅約0.23m、深さ0.13mを測る。埋土は地山ブロック土を含む暗褐色シルトである。

カマドは竪穴建物北側中央に作り付けられる。カマド内のカマド上部構造の崩落土を除去すると、炭化物を多量に含む暗褐色シルト（以下、炭層）が堆積していた。中央には被熱を受けた支脚石が原位置を保ったまま検出した。この支脚石の南側では炭層を除去すると被熱を受けた火床を検出した。カマドから土師器甕（103）、甕片が出土した。カマド除去中から石鏝（S5）が出土した。

支柱穴は4基確認できた。SP1は竪穴建物北東隅で検出した不整形の支柱穴である。検出面の標高は約36.77m、長径約0.8m、短径約0.8m、深さ約0.3mを測る。断面形状は不整形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色シルト、掘形が褐色シルトである。

SP2は竪穴建物南東隅で検出した隅丸方形の支柱穴である。検出面の標高は約36.75m、長辺約0.52m、短辺約0.52m、深さ約0.18mを測る。断面形状は方形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕

が炭化物を含む暗褐色シルト、掘形が暗褐色シルトである。

SP3は竪穴建物南西隅で検出した隅丸方形の支柱穴である。検出面の標高は約36.74m、長辺約0.53m、短辺約0.5m、深さ約0.18mを測る。断面形状は方形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色シルト、掘形がにぶい黄褐色シルトである。

SP4は竪穴建物北西隅で検出した楕円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.76m、長径約0.68m、短径約0.56m、深さ約0.25mを測る。断面形状は方形に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色シルト、掘形上層が地山ブロック土を含む暗褐色シルトとにぶい黄褐色細砂、掘形下層が暗褐色シルトである。

SP5は竪穴建物中央南側で貼床除去後に検出した楕円形の支柱穴である。検出面の標高は約36.66m、長径約0.56m、短径約0.46m、深さ約0.13mを測る。断面形状は楕円形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐色細砂～シルト、掘形が暗褐色細砂と褐色細砂～シルトである。SP5から土師器甕（106）・鉢（105）が出土した。

出土遺物の年代から、古墳時代後期前半、TK10～MT85併行期と判断できる。

（2）掘立柱建物

16-1 掘立1（図56）

第16調査区の中央で検出した掘立柱建物である。SP30～37の8基で構成する。2×2間の総柱建物で、北西隅柱は調査区外になるため検出できなかった。主軸方位はN-24°-E、検出面の標高は約37.3mである。梁行総長約4.3m、桁行総長約4.55m、床面積は約19.6㎡を測る。芯芯間距離は約2.15～2.3mである。

SP30は円形を呈し、直径約0.45m、深さ約0.16mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色粘質シルト、掘形が地山ブロック土を含む暗褐色粘質シルトである。

SP31はやや歪な円形を呈し直径約0.42m、深さ約0.15mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色粘土混じり細砂、掘形がにぶい黄褐色粘土混じりシルトと灰黄褐色細砂である。

SP32は円形を呈し、直径約0.49m、深さ約0.23mを測る。断面形状は方形を呈する。埋土は

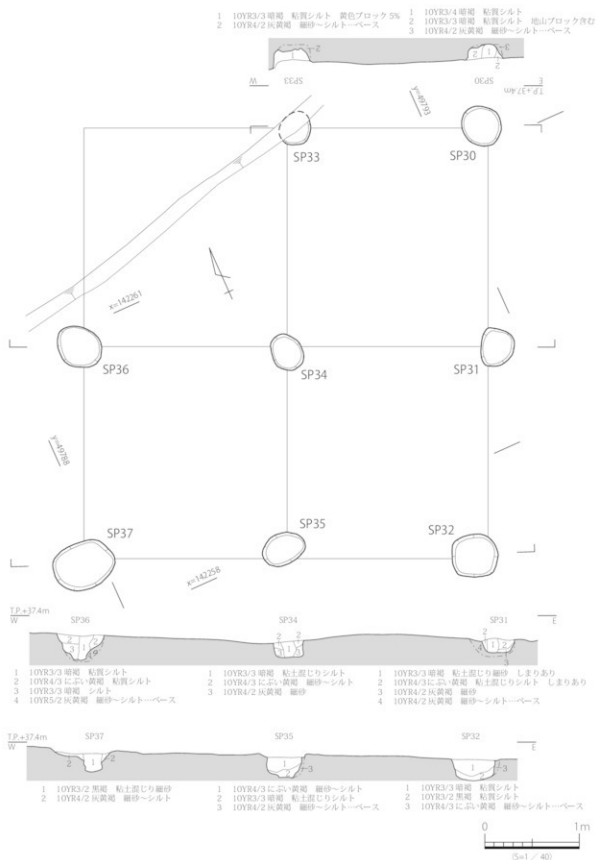


図 56 16-掘立1 平・断面図

上層が暗褐粘質シルト、下層が黒褐粘質シルトである。

S P 33 は調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。検出径約 0.36 m、深さ約 0.22 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は暗褐粘質シルトである。

S P 34 は楕円形を呈し、長径約 0.4 m、短径約 0.33 m、深さ約 0.18 m を測る。断面形状は方形を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐粘土混じりシルト、掘形がにぶい黄褐細砂～シルトと灰黄褐細砂である。

S P 35 は楕円形を呈し、長径約 0.47 m、短径約 0.33 m、深さ約 0.25 m を測る。断面形状は楕状に段落ちである。埋土は上層がにぶい黄褐細砂～シルト、下層が暗褐粘土混じりシルトである。

S P 36 は楕円形を呈し、長径約 0.51 m、短径約 0.43 m、深さ約 0.28 m を測る。断面形状は不整形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐粘質シルト、掘形がにぶい黄褐粘質シルトと暗褐シルトである。

S P 37 は楕円形を呈し、長径約 0.64 m、短径約 0.5 m、深さ約 0.21 m を測る。断面形状は浅い皿状に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐粘土混じり細砂、掘形が灰黄褐細砂～シルトである。

いずれのピットからも遺物が出土していないため、時期は不明である。

（3）櫛列

16－櫛列Ⅰ（図 57）

第 16 調査区の中央で検出した南北方向の櫛列である。S P 38～40 の 3 基の柱穴を検出したが、南側が調査区外に延びるため、総延長は不明である。主軸方位は N-23°-E、検出面の標高は約 37.35 m 桁行総長約 5.8 m 以上、芯間距離は約 2.9 m を測る。

S P 38 は不整形楕円形を呈し、長径約 0.24 m、短径約 0.19 m、深さ約 0.05 m を測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は単層で、灰黄褐細砂～シルトである。

S P 39 は円形を呈し、直径約 0.53 m、深さ約 0.14 m を測る。断面形状は浅い皿状に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が灰黄褐細砂～シルト、掘形がほぼ地山土で構成する灰黄褐細砂～

シルトである。

S P 40 は調査区外へ延びるため、形状は不明である。検出径約 0.32 m、深さ約 0.17 m を測る。断面形状は楕状である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘形が黒褐細砂～シルトと褐灰粘質微細砂である。

いずれのピットからも遺物が出土していないため、時期は不明である。

（4）土坑

16－S K 5（図 58・62）

第 16 調査区の中央で検出した土坑である。16- 竪穴 4 を切る。主軸方位 N-79°-W、検出面の標高は約 36.9 m である。平面形状は楕円形を呈し、長径約 1.1 m、短径約 0.8 m、深さ約 0.35 m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は炭化物和焼土を含む極暗赤褐シルトと黒褐シルト、暗褐シルトである。

遺物は須恵器高杯（124）、土師器高杯（125・126）・甕（127・128・129）が出土した。出土遺物の年代から、古墳時代中期中葉～後半、T K 208～23 併行期と考えられる。

16－S K 6（図 58）

第 16 調査区の北側で検出した土坑である。主軸方位 N-33°-E、検出面の標高は約 36.85 m である。平面形状は楕円形で、長径約 1.0 m、短径約 0.6 m、深さ 0.24 m を測る。断面形状は「へ」の字形である。

埋土は単層で、黒褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16－S K 7（図 58）

第 16 調査区の北端で検出した土坑である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-40°-W、検出面の標高は約 36.7 m である。長軸約 1.9 m 以上、短軸約 0.7 m 以上、深さ 0.58 m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層が暗褐細砂と黒褐細砂～シルト、中層が暗褐細砂～シルト、下層が黒褐細砂～シルトである。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため、詳細な時期は不明である。

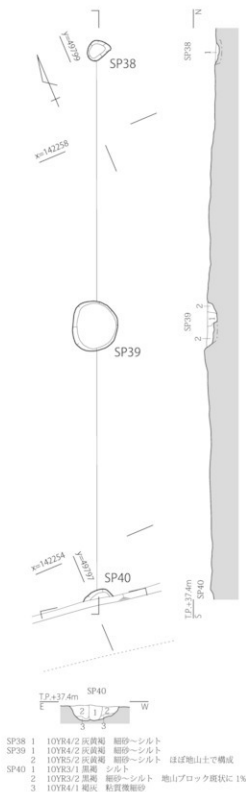


図57 16-標列1 平・断面図

16-SK8 (図58)

第16調査区の北東端で検出した土坑である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位 $N-8^{\circ}-E$ 、検出面の標高は約 36.7m である。平面形状は不整形で、長軸 1.3m、短軸 0.35m 以上、深さ 0.20m を測る。断面形状は「へ」の字形である。

埋土は単層で、黒褐細砂-シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16-SK9 (図58)

第16調査区の北西側で検出した土坑である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、不整形な形状を呈している。主軸方位 $N-28^{\circ}-E$ 、検出面の標高は約 37.0m である。長軸約 2.0m、短軸約 0.8m 以上、深さ 0.43m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は2層に分層でき、上層が黒褐シルト、下層が暗褐である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16-SK19 (図58)

第16調査区の中央で検出した土坑である。主軸方位 $N-66.5^{\circ}-W$ 、検出面の標高は約 37.05m である。平面形状は不整形で、長軸約 4.1m、短軸約 1.5m、深さ約 0.3m を測る。断面形状は浅い皿状で段落ちを有する部分がある。

埋土は4層に分層でき、灰黄褐細砂と灰黄褐シルト、黒褐シルト、黒褐細砂である。

平面形状や堆積状況から、風倒木痕の可能性が高い。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16-SK21 (図59)

第16調査区の南側で検出した不整形な土坑である。主軸方位 $N-83^{\circ}-W$ 、検出面の標高は約 37.4m である。長軸約 1.35m、短軸約 1.2m、深さ約 0.1m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層で、黒褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16-SK27 (図59)

第16調査区の南側で検出した長楕円形の土坑である。主軸方位 $N-5^{\circ}-W$ 、検出面の標高は約 37.15m である。長径約 1.8m、短径約 0.6m、深さ

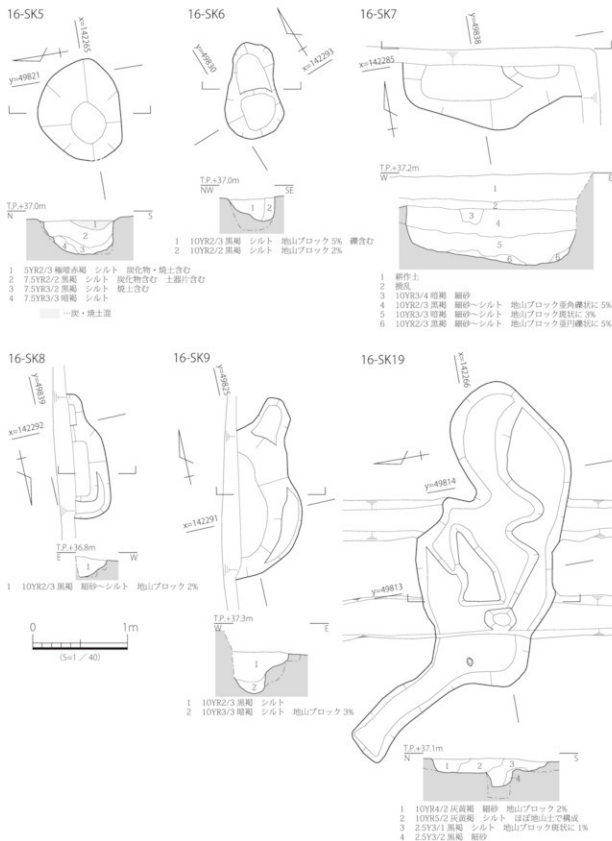


図 58 16-SK 5・6・7・8・9・19 平・断面図

約0.15mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は2層に分層でき、上層が黒褐シルト、下層が暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16-S K 95 (図59)

第16調査区の北側で検出した不整形な土坑である。16-S K 6に切られる。主軸方位N-72°-W、検出面の標高は約36.9mである。長軸約0.9m以上、短軸約0.6m、深さ約0.28mを測る。断面形状は逆台形に段落ちを有する。

埋土は3層に分層でき、上層が暗褐シルト、下層が黒褐シルトと礫を多量に含む暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16-S K 10 (図59・62)

第16調査区の北側で検出した土坑である。遺構の南側が調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-83°-W、検出面の標高は約36.9mである。長軸約1.4m、短軸約1.2m以上、深さ約0.33mを検出した。断面形状は桃状である。

埋土は3層に分層でき、上層が黒褐シルト、中層が暗褐シルト、下層が暗褐細砂である。

遺物は須恵器無蓋高杯(121)、土師器高杯(122)・甕(123)、図示できなかったが製塩土器片・粘土塊が出土した。出土遺物の年代から、古墳時代中期後半と考えられる。

16-S K 88 (図59)

第16調査区の南側で検出した不整形な土坑である。主軸方位N-2°-E、検出面の標高は約37.35mである。長軸約2.5m、短軸約1.1m、深さ約0.35mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は暗褐細砂～シルトと褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16-S K 17 (図60)

第16調査区の中央で検出した土坑である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-86°-W、検出面の標高は約37.05mである。長軸約1.4m以上、短軸約1.1m、深さ約0.13mを測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、黒褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16-S K 18 (図60)

第18調査区の中央で検出した不整形な形状の土坑である。主軸方位N-61°-E、検出面の標高は約37.0mである。長軸約1.5m、短軸約0.7m、深さ約0.35mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、黒褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16-S K 22 (図60)

第16調査区の南側で検出した楕円形を呈する土坑である。主軸方位N-71°-E、検出面の標高は約37.4mである。長径約0.8m、短径約0.6m、深さ約0.25mを測る。断面形状は逆台形に段落ちを有する。

埋土は単層で、褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16-S K 25 (図60)

第16調査区の南側で検出した不整形な形状の土坑である。主軸方位N-1°-E、検出面の標高は約37.3mである。長軸約1.6m、短軸約0.9m、深さ約0.32mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16-S K 23 (図60)

第16調査区の南側で検出した不整形な形状の土坑である。主軸方位はN-66°-W、検出面の標高は約37.3mである。長軸約2.3m、短軸約1.3m、深さ約0.35mを測る。断面形状は浅い皿状で段落ちを有する。

埋土は単層で、にぶい黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

16-S K 26 (図60)

第16調査区の南側で検出した楕円形を呈する土坑である。主軸方位N-61°-W、検出面の標高は約37.3mである。長径約1.7m、短径約0.95m、深さ約0.4mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、にぶい黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

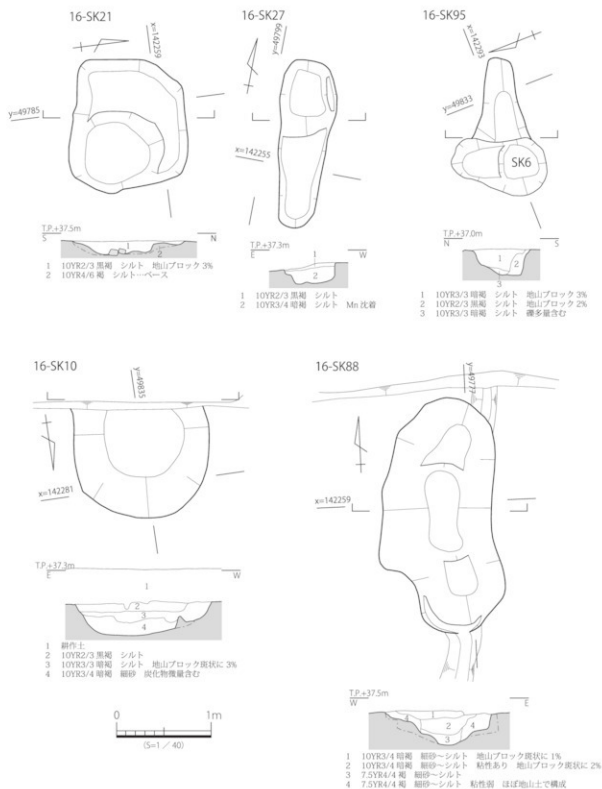


図 59 16-SK10・21・27・95・88 平・断面図

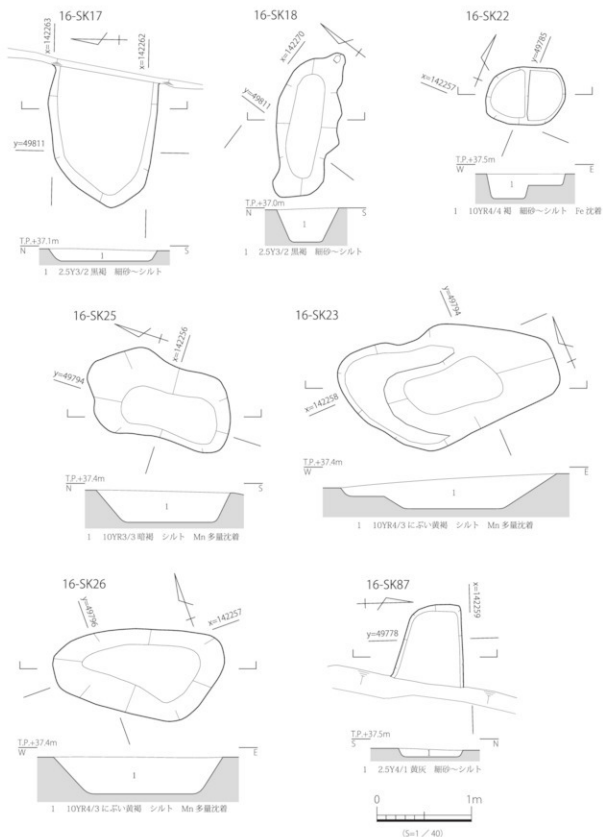


図 60 16-SK17・18・22・23・25・26・87 平・断面図

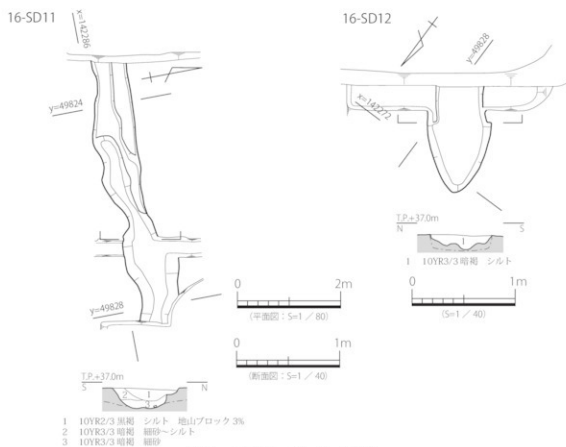


図 61 16-SD11・12 平・断面図

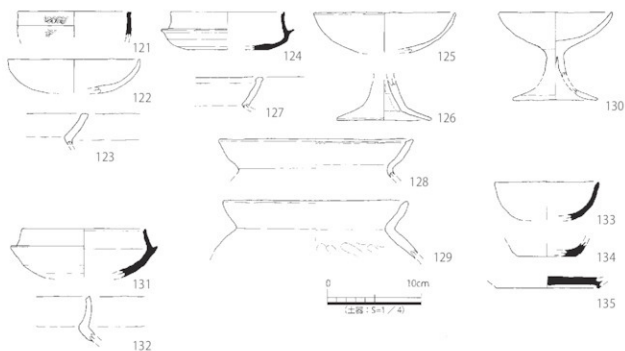


図 62 16・17-SK・SD・その他 出土遺物実測図

16-S K 87 (図 60)

第 16 調査区の南側で検出した土坑である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-79°-W、検出面の標高は約 37.4m である。長軸約 0.8m 以上、短軸約 0.7m、深さ約 0.1m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、黄灰細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

(5) 溝

16-S D 11 (図 61・62)

第 16 調査区の北側で検出した東西方向の溝である。西側は調査区外に延び、東側は攪乱に切られる。主軸方位 N-90°-W、検出面の標高は約 36.95m である。長さ約 5.1m を検出し、幅約 0.84 m、深さ約 0.2m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は上層が黒褐シルトと暗褐細砂～シルト、下層が暗褐細砂である。

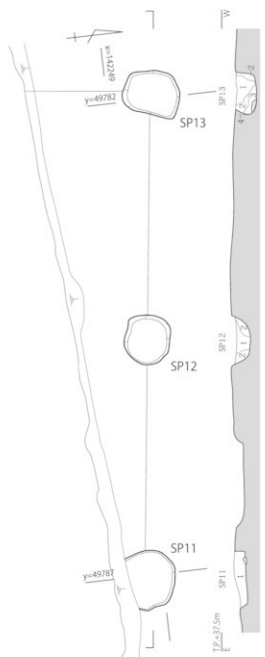
遺物は土師器高杯 (130) が出土した。出土遺物の年代から、古墳時代中期中葉と考えらえる。

16-S D 12 (図 61)

第 16 調査区の中央南端で検出した南北方向の溝である。南側は調査区外に延びる。主軸方位 N-35°-W、検出面の標高は約 36.9m である。長さ約 1.2 m を検出し、幅約 0.6m、深さ約 0.13 m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層で、暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。



SP11 1	10YR3/3 暗褐	シルト	地山ブロック 5%
SP12 1	10YR4/2 灰黄褐	シルト	地山ブロック 5%
2	10YR4/4 褐	細砂～シルト	
SP13 1	10YR4/3 に近い黄褐	シルト	地山ブロック 5%
2	10YR4/4 褐	細砂～シルト	
3	10YR4/2 灰黄褐	シルト	地山ブロック 2%
4	10YR4/3 に近い黄褐	細砂～ベース	

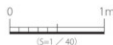
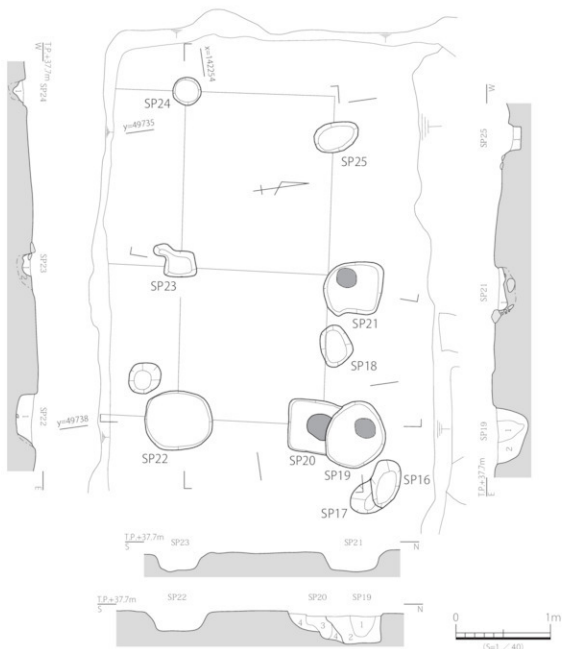


図 63 17- 掘立 1 平・断面図



- SP19
1 10YR3/4 暗褐色 シルト
2 10YR4/4 暗褐色 シルト
- SP20
3 7.5YR3/4 暗褐色 シルト
4 10YR3/4 暗褐色 シルト
- SP21
1 10YR4/4 暗褐色 粘質シルト

- SP22
1 10YR4/4 暗褐色 シルト 地山ブロック 5%
- SP23
1 10YR4/4 暗褐色 粘質シルト
2 10YR4/6 暗褐色 粘質シルト
- SP24
1 10YR3/4 暗褐色 粘質シルト

- SP25
1 10YR4/6 暗褐色 粘質シルト

図 64 17-掘立2 平・断面図

第17調査区（図45）

（1）掘立柱建物

17-掘立1（図63）

第17調査区の東側で検出した掘立柱建物と考えられる柱列である。SP11～13の3基で構成し、南北いずれかの方向に延びると考えられる。主軸方位はN-83°-W、検出面の標高は約37.4mである。

桁行総長約5.2m、芯芯間距離は約2.6mである。

SP11は一部が調査区外に延びるが、円形を呈すると考えられる。直径約0.64m、深さ約0.14mを測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は単層で、暗褐色シルトである。

SP12は円形を呈し、直径約0.53m、深さ約0.21mを測る。断面形状は碗状を呈する。柱痕が

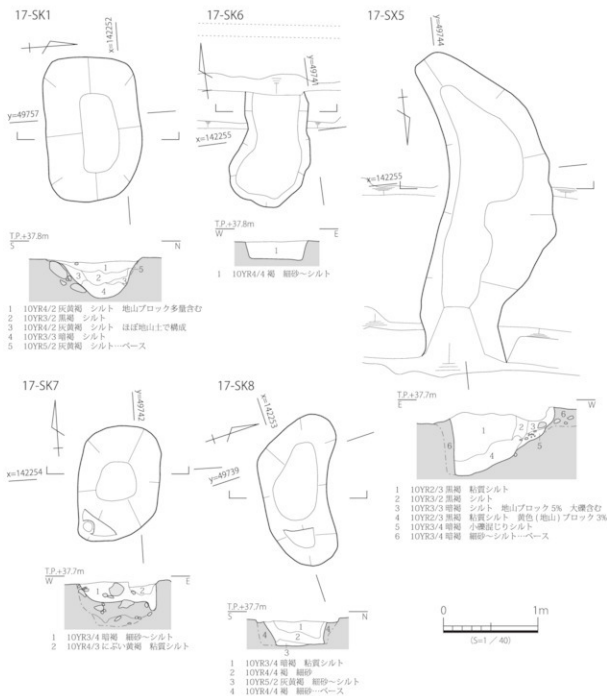


図 65 17-SK 1・6・7・8・SX 5 平・断面図

確認でき、埋土は柱痕が灰黄褐シルト、掘形が褐細砂〜シルトである。

S P 13は隅丸方形を呈し、長辺約0.6 m、短辺約0.46 m、深さ約0.23 mを測る。断面形状は袋状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕がにぶい黄褐シルト、掘形が褐細砂〜シルトと灰黄褐シルトである。

いずれのピットからも遺物が出土していないため、時期は不明である。

17-掘立2 (図64)

第17調査区の西側で検出した掘立柱建物である。1×2間以上の総柱建物跡で南側は調査区外に延びると考えられる。S P 19～25の6基で構成する。主軸方位はN-81°-W、検出面の標高は約37.6 mである。梁行総長約1.6 m、桁行総長約3.1～3.5 m、床面積は約6.1 m²以上を占める。芯芯間距離は約1.5～2.0 mである。

S P 19は円形を呈し、直径約0.74 m、深さ約

0.34 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘形が褐細砂～シルトである。

S P 20 は隅丸方形を呈し、S P 19 に切られる。長辺約 0.58 m、短辺約 0.5 m 以上、深さ約 0.3 m を測る。断面形状は不整形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘形が暗褐細砂～シルトである。

S P 21 はやや歪な隅丸方形を呈し、長辺約 0.62 m、短辺約 0.55 m、深さ約 0.13 m を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は褐粘質シルトである。

S P 22 は円形を呈し、直径約 0.71 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は単層で、褐シルトである。

S P 23 は不整形な形状で、長軸約 0.74 m、短軸約 0.41 m、深さ約 0.1 m を測る。断面形状は碗状を呈する。埋土は単層で、褐粘質シルトである。

S P 24 は円形を呈し、直径約 0.3 m、深さ約 0.15 m を測る。断面形状はV字形を呈する。埋土は単層で、暗褐粘質シルトである。

S P 25 は楕円形を呈し、長径約 0.48 m、短径約 0.32 m、深さ約 0.19 m を測る。断面形状は方形を呈する。埋土は単層で、褐細砂である。

いずれのピットからも遺物が出土していないため、時期は不明である。

(2) 土坑

17-S K 1 (図 65)

第 17 調査区の中央で検出した隅丸方形の土坑である。主軸方位 N-87°-W、検出面の標高は約 37.6 m である。長辺約 1.5 m、短辺約 1.0 m、深さ約 0.4 m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は 4 層に分層でき、上層が灰黄褐シルトと黒褐シルト、中層が灰黄褐シルト、下層が暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

17-S K 6 (図 65)

第 17 調査区の北西側で検出した不整形な形状の土坑である。北側は調査区外へ延びる。主軸方位 N-13°-E、検出面の標高は約 37.65 m である。長軸約 1.2 m 以上、短軸約 0.8 m、深さ約 0.15 m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

17-S K 7 (図 65)

第 17 調査区の西側で検出した楕円形を呈する土坑である。主軸方位 N-5°-E、検出面の標高は約 37.6 m である。長径約 1.2 m、短径約 0.9 m、深さ約 0.25 m を測る。断面形状は逆台形で段落ちを有する。

埋土は 2 層に分層でき、上層が暗褐細砂～シルト、下層がにぶい黄褐粘質シルトである。

図示できなかったが鉄片が出土したが、時期が判明する遺物は出土しなかった。

17-S K 8 (図 62・65)

第 17 調査区の西側で検出した不整形な形状の土坑である。主軸方位 N-71°-W、検出面の標高は約 37.6 m である。長軸約 1.6 m、短軸約 1.0 m、深さ約 0.25 m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は 3 層に分層でき、上層が暗褐粘質シルト、中層が褐細砂、下層が灰黄褐細砂～シルトである。

遺物は須恵器底部 (134) が出土したが、詳細な時期は不明である。

(3) 性格不明遺構

17-S X 5 (図 65)

第 17 調査区の北西側で検出した不整形な形状の土坑である。北側は調査区外に延びる。主軸方位 N-10°-E、検出面の標高は約 37.65 m である。長軸約 3.0 m 以上、短軸約 1.1 m、深さ約 0.75 m を測る。断面形状は「へ」の字形である。

埋土は 6 層に分かれ、上層が黒褐粘質シルトと黒褐シルト、暗褐シルト、下層が黒褐粘質シルトと暗褐小礫混じりシルトである。

平面形状と堆積状況から風倒木痕の可能性が考えられる。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

第18・19調査区(図66)

(1) 竪穴建物

19-竪穴20(図67～69)

第19調査区東端で検出した竪穴建物である。北側は調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。一部攪乱に切られる。主軸方位N-84°-W、検出面の標高は約38.0mである。長辺約6.2m、短辺約3.7m以上、深さ約0.4mを測る。

埋土の掘削後、ビット(S P 41～43)を検出した。また、断面観察ではあるが、周壁溝を確認した。

埋土は暗褐シルトとにぶい黄褐シルトである。遺物は土師器高杯(141)・甕(144)・杯(143)・甕(138)、図示できなかったが須恵器杯蓋片・壺片、製塩土器片、剥片などが出土した。

周壁溝の埋土は褐シルトとにぶい黄褐粘質シルト、暗褐粘質シルトである。

貼床はにぶい黄褐細砂～シルトである。貼床から須恵器壺(137)が出土した。

S P 41は竪穴建物南東隅で検出した不整形のビットである。検出面の標高は37.76m、長辺約1.22m、短辺約0.92m、深さ約0.55mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は4層に分層でき、1・3層が褐砂礫混じり細砂～シルト、2・4層が灰褐砂礫混じり粘質土である。遺物は須恵器杯蓋(136)他図示できなかったが、杯蓋片、土師器高杯片が出土した。

S P 42は竪穴建物南西隅で検出した楕円形の支柱穴と考えられるビットである。検出面の標高は約37.7m、長径約0.72m、短径約0.66m、深さ約0.44mを測る。断面形状はレ字形。埋土は上層がにぶい黄褐粗砂混じり細砂～シルト、中層が炭化物と焼土を含む褐細砂～シルトである。土器は主に中層から出土しており、土師器高杯(139)が出土した。下層は暗褐粗砂混じり粘質土と灰褐粗砂混じり粘質土である。

S P 43は竪穴建物中央東側で、貼床除去後に検出した楕円形のビットである。検出面の標高は37.5m、長径約1.0m、短径約0.6m、深さ約0.12mを測る。断面形状は逆台形である。遺物は土師器高杯(140)・甕(142)が出土した。

出土遺物の年代から、古墳時代中期後半と考えられる。

19-竪穴60(図70)

第19調査区中央南側で検出した竪穴建物である。遺構の大半は南側の調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-82°-W、検出面の標高は約38.2mである。長軸約4.8m、短軸約0.3m以上、深さ約0.38mを測る。

調査当初、竪穴建物と認識せずに掘削を行ったため、断面観察でカマドと周壁溝を確認し、竪穴建物との認識に至った。

埋土は暗褐粘質シルトである。

貼床は地山ブロック土を含む暗褐粘質シルトである。

周壁溝は幅約0.14m、深さ約0.2mを測る。埋土は2層に分層でき、上層が褐細砂～シルト、下層が暗褐細砂～シルトである。

カマドは北側中央やや西寄りに作り付けられる。カマド袖の構築材はにぶい黄褐粘質シルトである。カマド内部には炭化物と焼土を含む暗褐シルトと暗褐細砂～シルトが堆積していた。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

19-竪穴40(図71・72)

第19調査区中央南側で検出した竪穴建物である。南側は調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、方形を呈すると考えられる。主軸方位N-85°-W、検出面の標高は約38.2mである。長辺約3.2m、短辺約2.3m以上、深さ約0.28mを測る。

遺構検出段階で、貼床面であり、南壁で埋土と周壁溝を確認し、カマドと支柱穴(S P 1～4)を検出した。

埋土は暗褐シルト混じり細砂と褐シルトである。

貼床は褐シルト混じり細砂である。

周壁溝は、幅約0.2m、深さ約0.12mを測る。埋土は暗褐シルトである。

カマドは西側中央に作り付けられる。カマド袖は確認できず、焼土塊と煙道を検出した。煙道の長さは約0.75m、幅約0.14m、深さ約0.05mを測る。埋土は炭化物を少量含む褐シルトである。

支柱穴は4基確認できた。S P 1は竪穴建物南西隅で検出した支柱穴である。南側は調査区外へ延びるため、全体の形状は不明である。検出面の標高は約38.1m、長軸約0.42m、短軸約0.2m以上、深さ約0.12mを測る。断面形状はV字形である。埋土は単層で、灰黄褐シルト混じり細砂である。

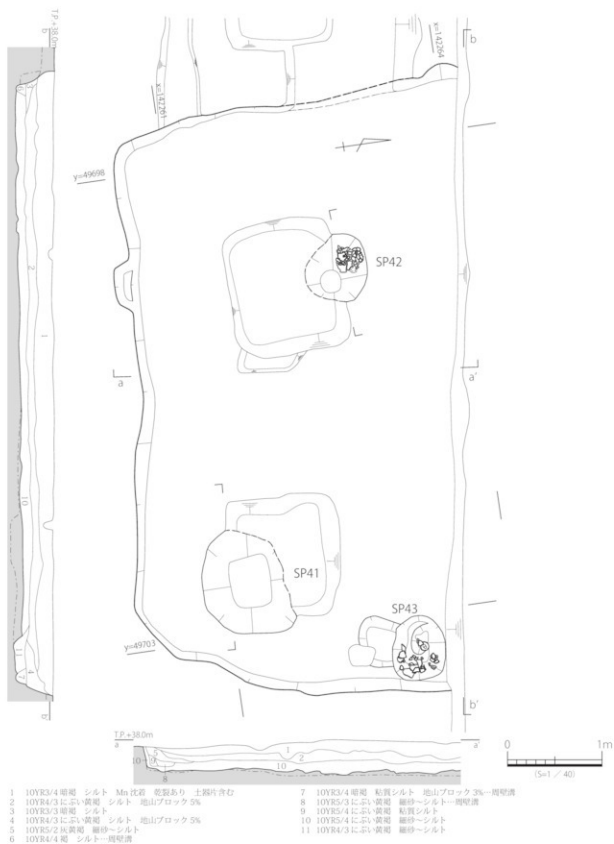


図 67 19- 竪穴 20 平・断面図

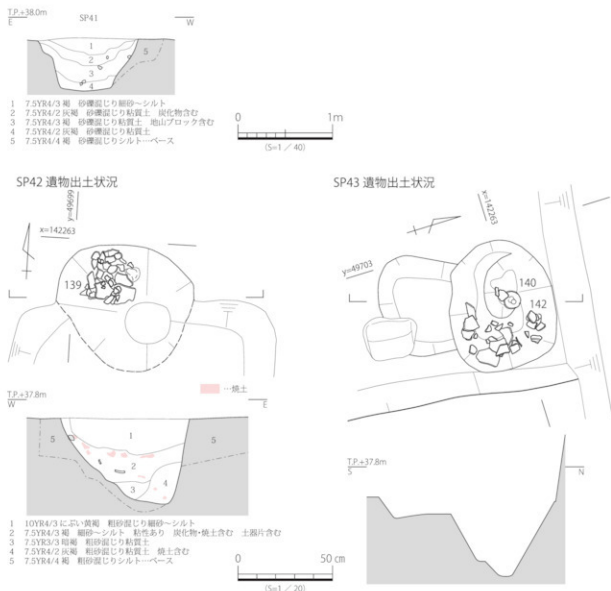


図 68 19- 竪穴 20 平・断面図

S P 2 は竪穴建物北西隅で検出した楕円形の主柱穴である。検出面の標高は約 38.06m、長径約 0.44m、短径約 0.38m、深さ約 0.05m を測る。断面形状は不整形である。埋土は単層で、暗褐礫混じり細砂である。

S P 3 は竪穴建物北東隅で検出した円形の主柱穴である。検出面の標高は約 38.02m、長径約 0.42m、短径約 0.4m、深さ約 0.04m を測る。断面形状は不整形である。埋土は単層で、褐礫混じり細砂である。

S P 4 は竪穴建物南東隅で検出した主柱穴である。南側は調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。検出面の標高は約 38.08m、長径約 0.54m、短径約 0.26m 以上、深さ約 0.25m を測る。

断面形状は方形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘形が褐シルトとにふい黄褐シルト混じり細砂、暗褐シルト混じり細砂である。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

(2) 柱穴群

19-柱穴群 (図 73)

第 19 調査区東端で検出した柱穴群である。掘立柱建物の可能性を考えたが、主軸は安定しない。検出面の標高は約 37.7 m である。

S P 11 は滴型を呈し、一部を攪乱に切られる。長軸約 0.62 m、短軸約 0.4 m、深さ約 0.17 m である。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は褐細砂〜シル

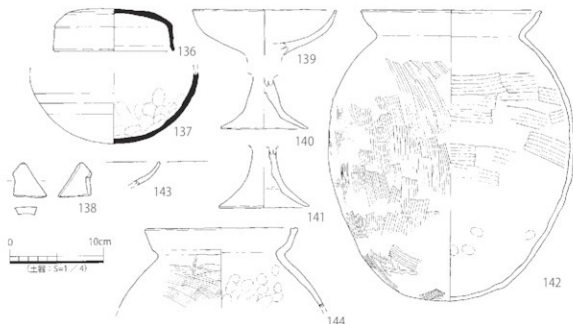


図 69 19- 竪穴 20 出土遺物実測図

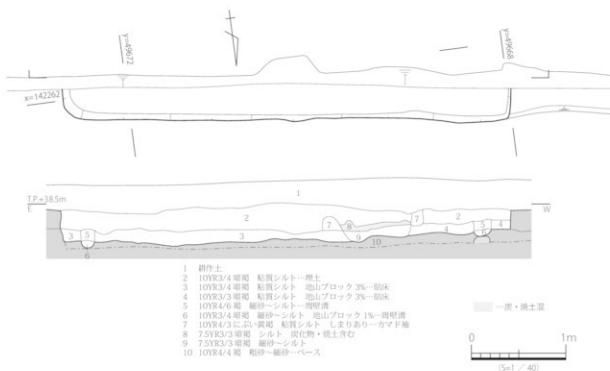


図 70 19- 竪穴 60 平・断面図

トとにぶい黄褐砂礫混じりシルトである。

S P 12 は東側に調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。長軸約 0.73 m 以上、短軸約 0.22m 以上、深さ約 0.33 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は上層が褐細砂～シルト、下層が褐細砂と褐細砂～シルトである。

S P 13 は円形を呈し、直径約 0.56m、深さ約

0.19m を測る。断面形状は不整形で、礫が確認できる。埋土は上層が褐粗砂混じりシルト、下層が褐粗砂混じり粘質土である。

S P 14 は円形を呈し、直径約 0.48m、深さ約 0.21 m を測る。断面形状は桶状を呈する。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐粘質土、掘形が暗褐粗砂混じり粘質土と灰褐細砂～シルトである。

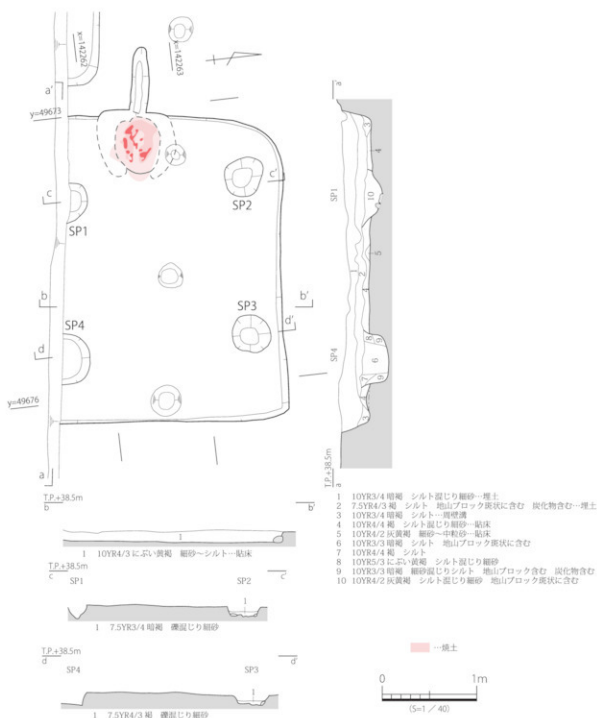


図 71 19- 竪穴 40 平・断面図

S P 15 は不整形形を呈し、直径約 0.67 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は碗状を呈する。埋土は単層で、暗褐色礫混じりシルトである。

S P 16 は東側が調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。長軸約 0.47 m、短軸約 0.17 m、深さ 0.32 m である。断面形状は逆台形である。埋土は上層が褐細砂→シルト、下層が暗褐色シルトと褐細砂→シルトである。

S P 17 は楕円形を呈し、一部を攪乱に切られる。長径約 0.52 m、短径約 0.45 m、深さ約 0.15 m を測る。断面形状は逆台形を呈する。

S P 18 は楕円形を呈し、一部を攪乱に切られる。長径約 0.43 m、短径約 0.41 m、深さ約 0.13 m を測る。断面形状は浅い皿状を呈する。

S P 19 は円形を呈し、直径約 0.57 m、短径約 0.52 m、深さ約 0.26 m を測る。断面形状は不整形



図 72 19- 竪穴 40 カマド 平・断面図

である。

いずれのビットからも遺物が出土していないため、時期は不明である。

(3) 土坑

18-SK8 (図 74)

第 18 調査区東側で検出した土坑である。一部を攪乱に切られ、南側は調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。検出面の標高は約 37.6m、主軸方位 N-82°-E である。長軸約 0.9m、短軸約 0.4m 以上、深さ約 0.2m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は、上層が暗褐粘質土とにぶい黄褐シルト混じり礫、下層が暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

19-SK8 (図 74)

第 19 調査区東側で検出した隅丸方形を呈する土坑である。主軸方位 N-7°-E、検出面の標高は約 37.7m である。長辺約 1.1m、短辺約 0.5m、深さ約 0.2m を測る。断面形状は方形である。

埋土は単層で、灰黄褐細砂〜シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

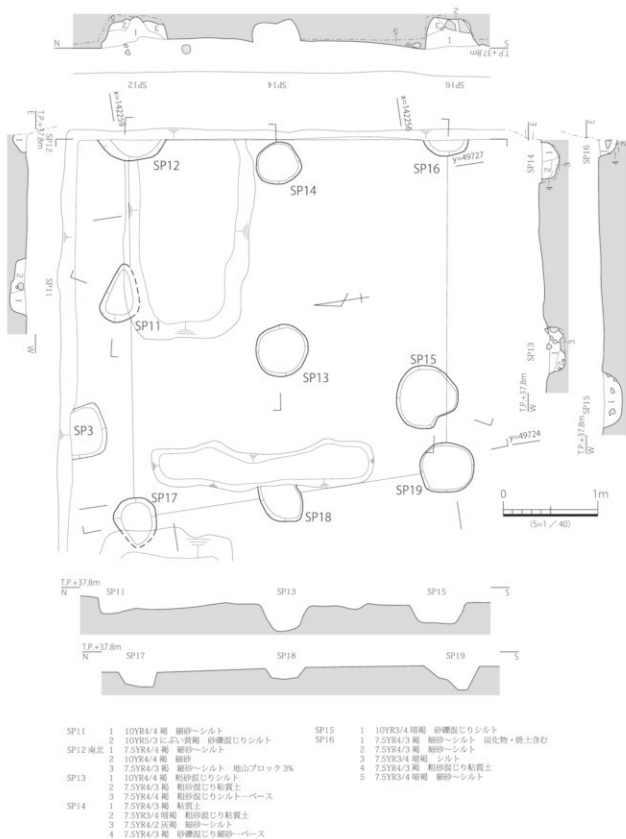


図 73 19-ピット群 平・断面図

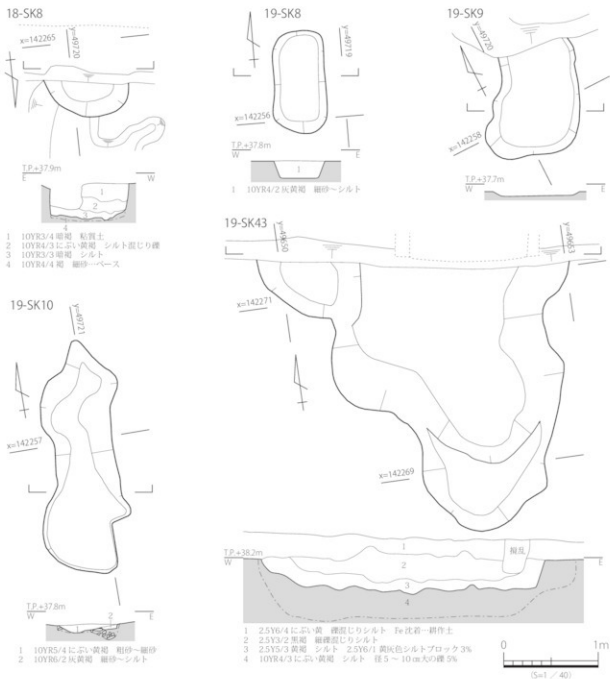


図 74 18-SK 8・19-SK 8・9・10・43 平・断面図

19-SK 9 (図 74)

第 19 調査区東側検出した土坑である。一部を攪乱に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-27°-E、検出面の標高は約 37.6m である。長軸約 1.2m 以上、短軸約 1.0m、深さ約 0.05m を測る。断面形状は浅い皿状である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

19-SK 10 (図 74)

第 19 調査区東側で検出した不整形な形状の土坑である。主軸方位 N-8°-E、検出面の標高は約 37.65m である。長軸約 2.4m、短軸約 0.7m、深さ約 0.05m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は上層がにぶい黄褐粗砂～細砂、下層が灰黄褐粗砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

19-S K 43 (図74)

第19調査区西端で検出した不整形な形状の土坑である。調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-8°-W、検出面の標高は約38.2mである。長軸約3.0m、短軸約2.8m以上、深さ約0.3mを測る。断面形状は不整形である。

埋土は上層が黒褐細礫混じりシルト、下層が黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

(4) 性格不明遺構

19-S X 50 (図75・76)

第19調査区西端で検出した不整形な落込み状の遺構である。南側は調査区外に延びるため、全体の形状は不明である。19-S D 45を切る。主軸方位N-9°-W、検出面の標高は約38.2mである。長軸約5.0m以上、短軸約4.2m、深さ約0.6mを測る。断面形状は浅い皿状に段落ちである。

埋土は段落ち部分が黒褐シルトと暗褐シルト混じり細砂、灰黄褐シルト混じり細砂、浅い皿状の部分で灰黄褐細砂混じりシルトである。

遺物は須恵器杯蓋(145)、杯身(146)、甕(147～149)、土師器甕(150・151)、鉄器(M3)が出土した。出土遺物の年代から、古墳時代後期中葉と考えられる。

(5) 溝

19-S D 45 (図77)

第19調査区西側で検出した不整形な溝である。南側は調査区外に延び、西側はS X 50に切られる。主軸方位は東N-40°-Eから北西N-88°-Wへ幅を広げながら湾曲する。検出面の標高は約37.2mである。長さ約10.6mを検出し、幅約1.0～2.0m以上で、断面形状は浅い皿状に段落ちを有する部分がある。検出面からの深さは約0.1mを測る。

埋土は上層が褐細砂～シルト、下層が褐シルトである。

遺物は須恵器杯蓋(152～155)が出土した。出土遺物と遺構の切合い関係から、TK 10～MT 85併行期、古墳時代後期前半と判断できる。

19-S D 44 (図77)

第19調査区西側で検出した溝である。19-S D 45に切られ、調査区外に延びるため、全体の規模

は不明である。主軸方位N-27°-W、検出面の標高は約37.2mである。長さ約3.3mを検出し、幅約0.6m、深さ約0.25mを測る。断面形状は逆台形に段落ちを有する部分がある。

埋土は上層がにぶい黄褐細砂～シルト、下層が褐粘質シルトである。

遺物は須恵器杯蓋(156)が出土した。出土遺物と遺構の切合い関係から、古墳時代後期前半と想定できる。

18・19-S D 5 (図78)

第18・19調査区中央で検出した南北方向の溝である。9-S D 205・11-S D 2・32-S D 20・36-S D 10と同一の溝である。確認できている溝の総延長は約276mである。

主軸方位N-9°-E、検出面の標高は約37.9～38.0mである。第18・19調査区合わせて、長さ約7.6mを検出し、幅約1.7～2.5m、深さ約0.9mを測る。断面形状はV字形である。

埋土はa断面で、上層が暗褐シルト混じり細砂と暗褐シルト混じり細砂、中層が暗褐細砂～中粒砂で流水堆積と考えられる。下層がにぶい黄褐シルト混じり細砂～中粒砂で、流水堆積が確認できる。

b断面では、上層がにぶい黄褐細礫混じりシルトと暗褐粘質シルト、中層が褐細砂と褐粗砂で、流水堆積が確認できる。下層がにぶい黄褐粗砂混じり粘質シルトとにぶい黄褐細礫、褐粘質シルトで流水堆積と考えられる。

遺物は、上層の下部溝の西肩から須恵器高杯(158)、土師器杯(161)が出土した。

最下層からは須恵器高杯(159)、土師器甕(162)・甕(163)が出土した。このうち土師器甕(163)は完形で伏せ置き状態で出土している。

その他層位不明で須恵器杯身(157)、土師器脚部(160)が出土した。図示した遺物の他に、須恵器壺片・高杯片、土師器高杯片・高杯片・甕片・移動式カマド片、石器剥片(サヌカイト)が出土した。

出土遺物の年代と、周辺の調査成果から、飛鳥時代と判断できる。

18・19-S D 1 (図79～81)

第18・19調査区東側で検出した南北方向の溝である。33-S D 2と同一の溝である。調査区外に延びるが、北側の第9・36調査区では確認できな

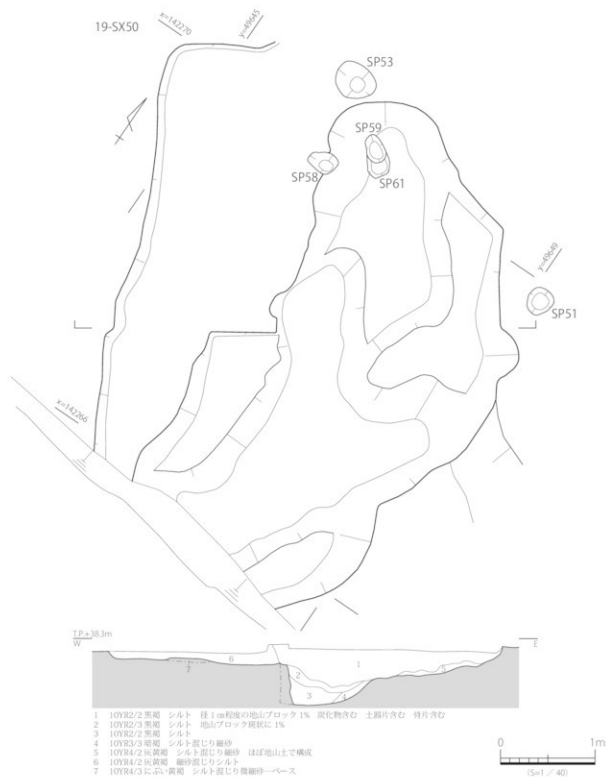


図 75 19-SX50 平・断面図

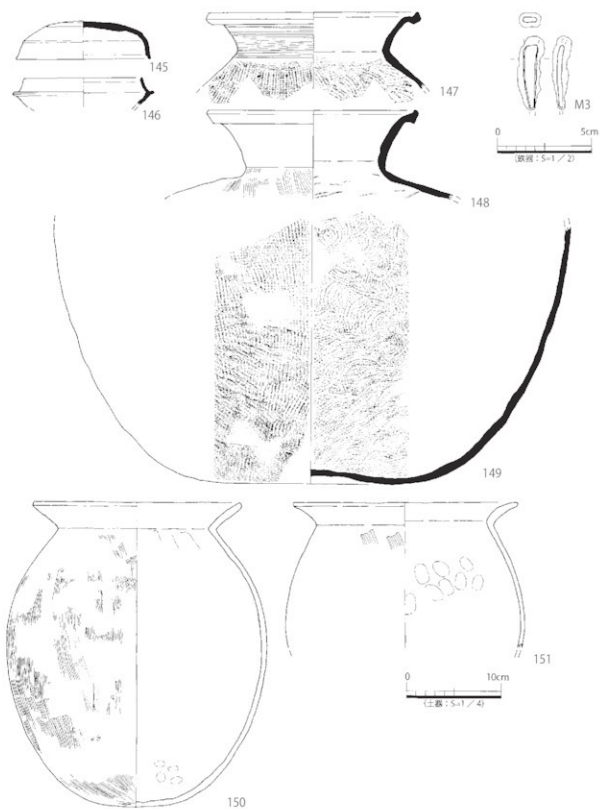


図 76 19-SX50 出土遺物実測図

った。確認できている溝の総延長は、約66mである。

主軸方位 N-4°-W、検出面の標高は約 37.55 ～ 37.7m である。第 18・19 調査区合わせて、長さ約 7.5 m を検出し、幅約 2.9 ～ 4.0m、深さ約 0.75m を測る。断面形状は逆台形で段落ちを有する部分がある。

埋土は a 断面で上層がにぶい黄褐シルト混じり細砂、中層が灰黄褐細砂～中粒砂と灰黄褐シルト混じり細砂～中粒砂で流水堆積と考えられる。下層がにぶい黄褐微細砂とにぶい黄褐シルトブロック混じり微細砂～細砂、最下層がにぶい黄褐細砂～細砂と暗灰黄シルト混じり微細砂、暗灰黄シルト～粘土で、ラミナが確認でき、流水堆積と考えられる。

d 断面では、上層が灰黄褐細砂～シルトと灰黄褐細砂～粗砂、にぶい黄褐シルトである。中層が灰黄褐粗砂～細砂で、ラミナが確認でき流水堆積と考えられる。下層が灰黄褐粘質シルトで流水堆積が確認できる。最下層が灰黄褐小礫～大礫混じり粗砂と灰黄褐粘質シルトで、ラミナが確認でき流水堆積と考えられる。

遺物は、堆積の単位ごとに上層から最下層に分けて取り上げを行った。上層から須恵器皿 (164)・杯 B (165)・甕 (167)、土師器杯 (166)、移動式カマド (168) 出土した。

中層から須恵器蓋 (169～175)、杯 A (176～179)、杯 B (180～182・184～189)、壺 (191・192・195・197～199)、長頸壺 (194・196)、平瓶 (193)、鉢 (190)、土師器杯 (183・200・202)、皿 (201・203)、甕 (204)、器種不明体部片 (205) が出土した。

下層から須恵器杯底部 (206) が出土した。

最下層から須恵器蓋 (207)・杯 B (208・209)・壺 (211)、土師器小型甕 (210)・長胴甕 (212) が出土した。

その他図示した遺物の他に、須恵器高杯片・杯 A 片・杯蓋片・杯身片・蓋片・壺片、土師器甕片・高杯片・甕片・銅 (把手) 片・移動式カマド片、石器剥片 (サヌカイト)、鹿骨が出土した。

出土遺物の年代から、奈良時代 (平城Ⅱ) と判断できる。

18・19-S D 7 (図 79・81)

第 18・19 調査区東側で検出した南北方向の溝である。確認できている溝の総延長は約 16.5 m であ

る。直線的に主軸方位 N-2°-E で南北方向に調査区外まで延びる。検出面の標高は約 37.6 ～ 37.7m である。長さ約 7.2 m を検出し、幅は約 0.4m、深さ約 0.25m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は b 断面で上層が黒褐粘質シルト、下層が灰黄褐細砂である。c 断面で上層がにぶい黄褐細砂～シルト、下層が灰黄褐粗砂である。

遺物は須恵器杯 (214)・杯 B (215)・蓋 (213)・壺 (218)、土師器皿 (216)・椀 (217) が出土した。

図示した遺物の他に、須恵器壺片、土師器甕片が出土した。

出土遺物の年代から、奈良時代 (平城Ⅱ) と判断できる。

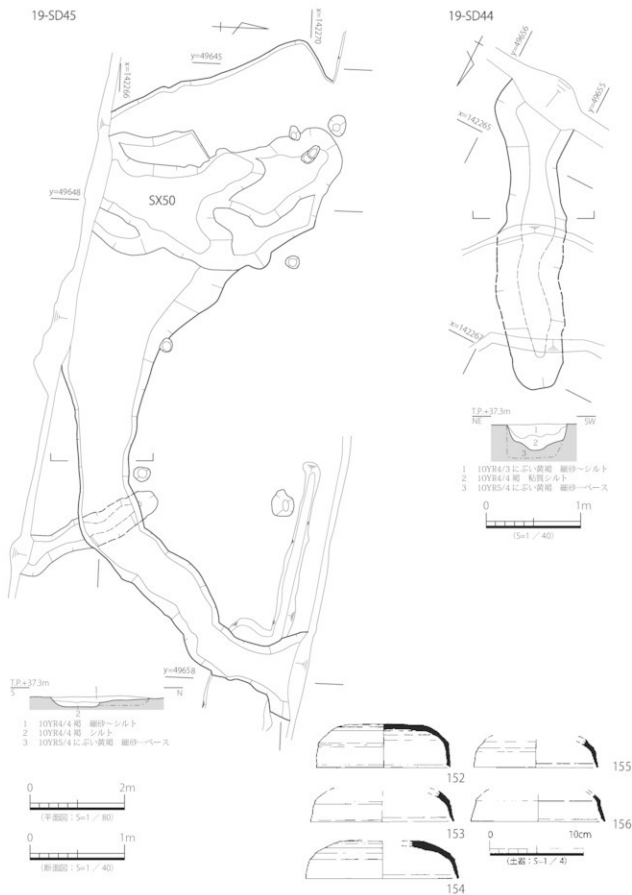


図 77 18・19-SD44・45 平・断面図及び出土遺物実測図

18・19-SD5

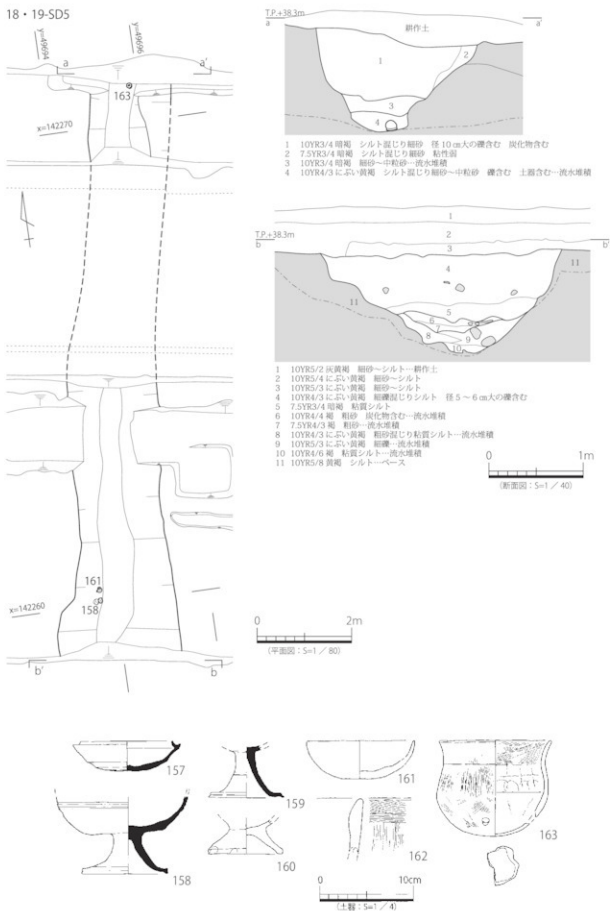


図 78 18・19-SD 5 平・断面図及び出土遺物実測図

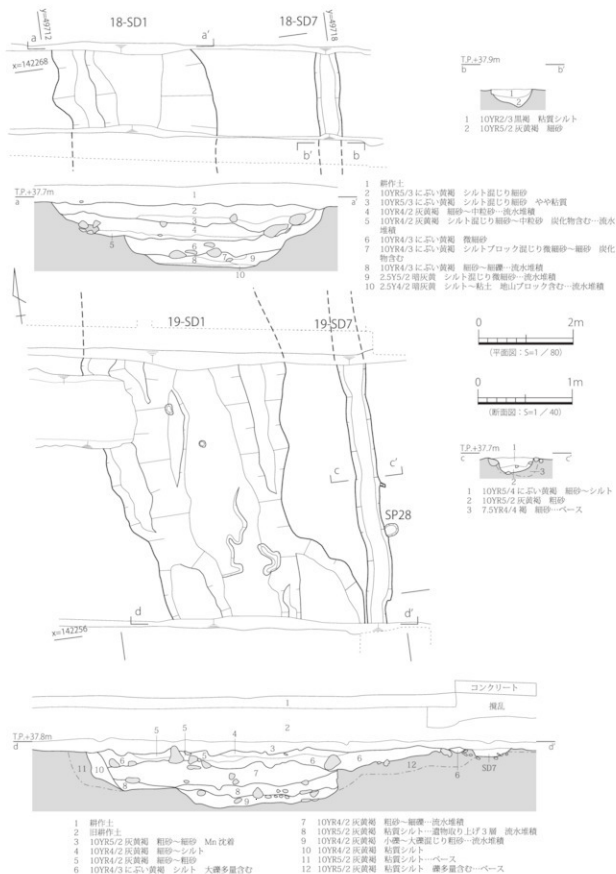


図 79 18・19-SD 1・7 平・断面図

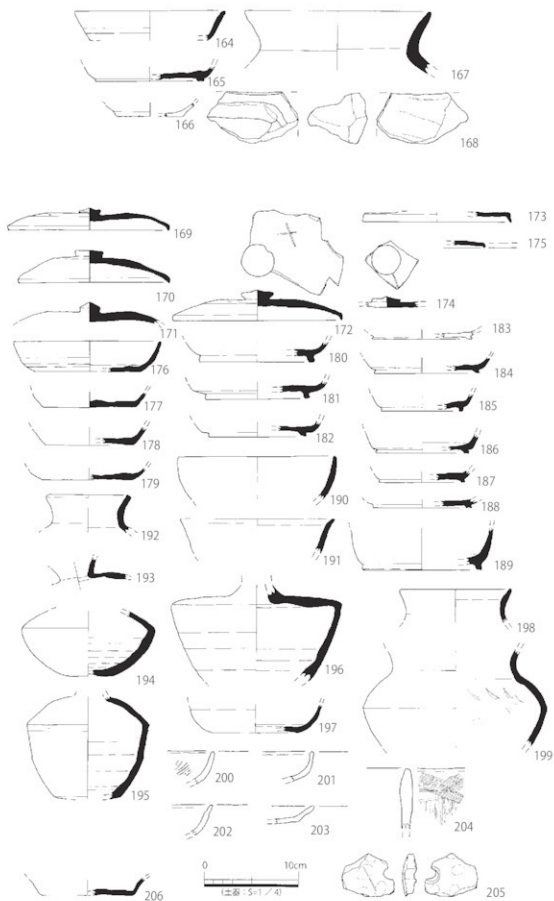


図 80 19-SD 1 出土遺物実測図

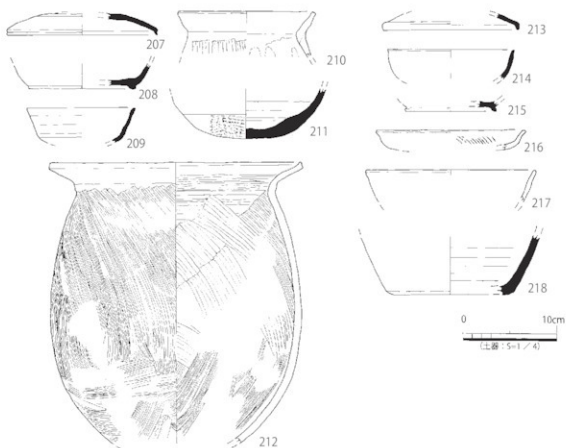


図 81 18・19-SD 1・7 出土遺物実測図

第三章 まとめ

第1節 萩前・一本木遺跡の集落の変遷

1 はじめに

今回の萩前・一本木遺跡の調査では、竪穴建物14棟、掘立柱建物11棟を検出した。このほか集落に付属する柵列や溝、土坑、柱穴などを確認した。これまでの調査で明らかになった竪穴建物の数は108棟、掘立柱建物は45棟におよぶ。

調査成果により古墳時代中期～飛鳥時代までの約200年間は連続して、飛鳥時代以降14世紀前半までは断続的に、人間の営みが行われてきたことが判明している。

2 時期区分と集落の変遷

発掘調査成果をもとに、萩前・一本木遺跡の集落変遷を7時期に区分する。Ⅰ期：古墳時代中期中葉～後半（須恵器出現以前～TK208）、Ⅱ期：古墳時代中期後半～末（TK23～TK47）、Ⅲ期：古墳時代後期初頭～後期前半（MT15～MT85）、Ⅳ期：古墳時代後期中葉～後期末（TK43～TK209）、Ⅴ期：飛鳥時代（TK217～TK46）、Ⅵ期：古代、Ⅶ期：中世である。

【Ⅰ期：古墳時代中期中葉～後半】（図82）

Ⅰ期は、萩前・一本木遺跡の集落の開始期に相当する。

今回の調査では、竪穴建物3棟、溝1条を確認した。調査成果を合わせると、竪穴建物10棟、掘立柱建物2棟、溝2条、土坑1基となる。

またこの時期の竪穴建物は、前回の調査成果と同様に、散発的に確認できる傾向にある。

【Ⅱ期：古墳時代中期後半～末】（図82）

Ⅱ期は、萩前・一本木遺跡の拡大期に相当する。

今回の調査では、竪穴建物5棟、土坑2基、溝1条を確認した。調査成果を合わせると、竪穴建物24棟、掘立柱建物1棟、土坑6基、溝2条となる。

この時期の竪穴建物は、Ⅰ期に比べ建物間の距離が近く、集住する傾向を示し始める。また南側に居住域の範囲が広がることが判明した。

【Ⅲ期：古墳時代後期初頭～後期前半】（図83）

Ⅲ期は、萩前・一本木遺跡の最盛期に相当する。

今回の調査では、竪穴建物2棟、溝2条を確認した。調査成果を合わせると、竪穴建物30棟、掘立柱建物7棟、溝4条となる。

今回の調査で確認できた建物は2棟と減少する。逆に遺跡の北西側では増加し、密集する傾向を示すことから、集落の集住がさらに進んだ可能性が考えられる。

【Ⅳ期：古墳時代後期中葉～末】（図83）

Ⅳ期は、萩前・一本木遺跡の衰退期に相当する。

今回の調査では、竪穴建物2棟、掘立柱建物1棟、柵列1列、土坑2基、溝1条、性格不明遺構1基を確認した。調査成果を合わせると、竪穴建物23棟、掘立柱建物7棟、土坑14基、溝8条、性格不明遺構1基となる。

この時期の遺構は、ほとんどが遺跡の北側・北西側で確認できた。集落の区画を意図としたような溝も掘削されており、土地利用が限定されていく傾向がうかがえる。

【Ⅴ期：飛鳥時代】（図84）

今回の調査では、前回の調査で確認した溝の一部を検出したのみである。

【Ⅵ期：古代】（図84）

今回の調査では、前回の調査で確認した溝の北側の延長を検出したのみである。

【Ⅶ期：中世】（図85）

今回の調査では、前回の調査で確認した溝の一部を検出したほか、掘立柱建物1棟を確認した。掘立柱建物は1間×1間の建物であり、居住のための建物とは想定し難い。

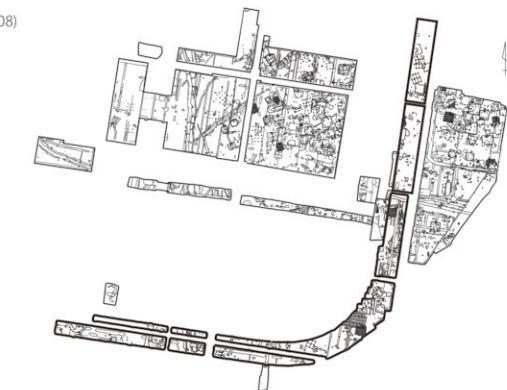
3 まとめ

以上、萩前・一本木遺跡の調査成果をみてきた。

古墳時代中期から飛鳥時代までの約200年間の変遷を見ていくと、Ⅰ期は散発的に居住を開始。Ⅱ期は集落域全体が拡大。Ⅲ期は集住化。Ⅳ期は集落の境界の明確化と集住、いう変遷が見えてくる。

首長居館を造営するだけの勢力をもった萩前・一本木遺跡の集落の広がりや変遷が、今後周辺の調査成果が蓄積されることによって判明すると思われる。今後の調査成果に期待したい。

古墳中期中葉 (～TK208)



古墳中期後半～末 (TK23～TK47)

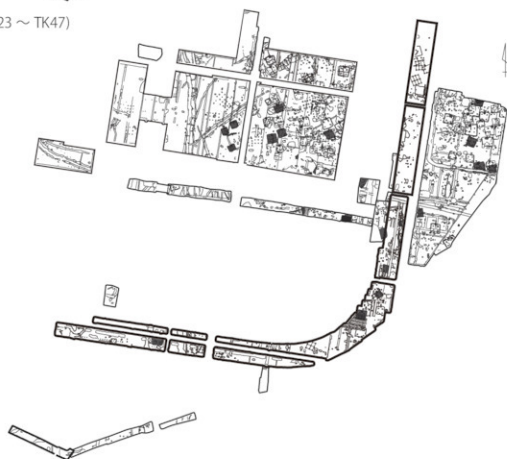
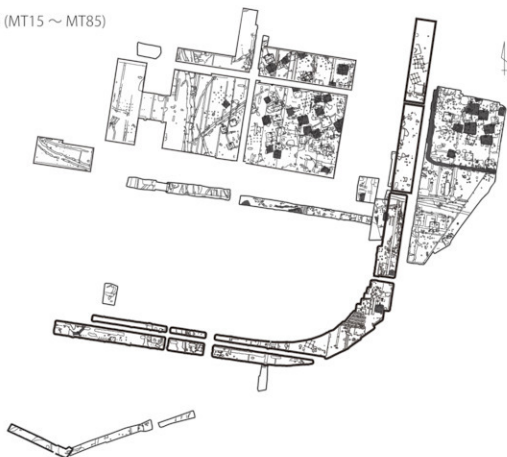


図 82 時代変遷図 (古墳時代中期)

古墳後期初～後期前半 (MT15 ～ MT85)



古墳後期中葉～後期末 (TK43 ～ TK209)

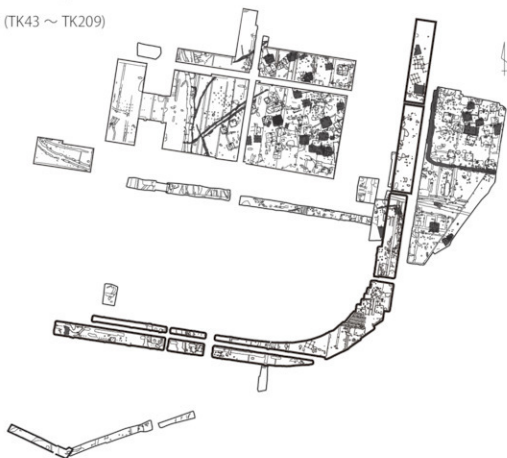
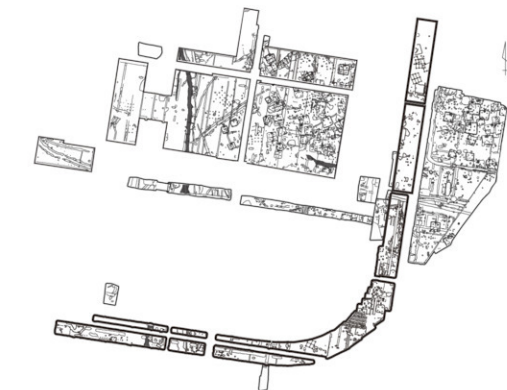


図 83 時代変遷図（古墳時代後期）

飛鳥時代 (TK217 ~)



古代

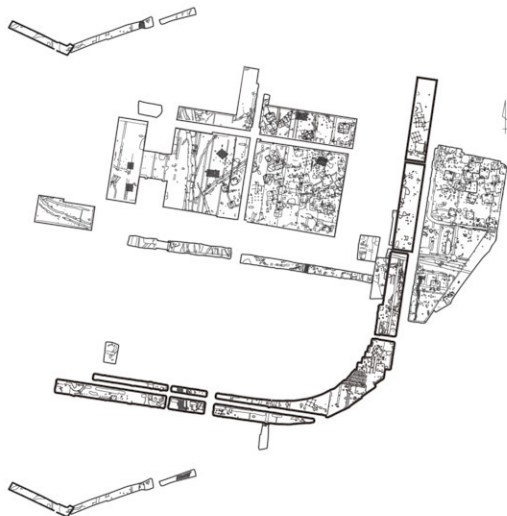


図 84 時代変遷図 (飛鳥～古代)

中世

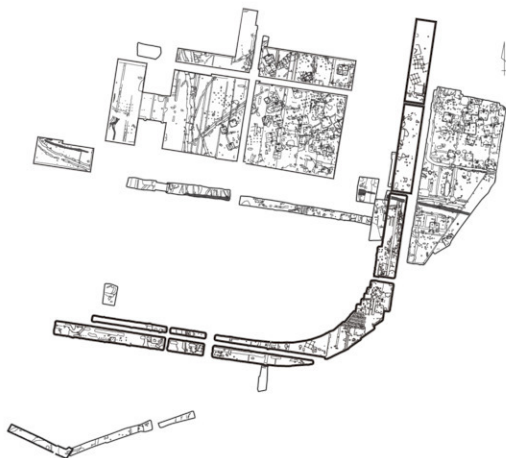


図 85 時代変遷図（中世）

表 3 遺構一覧表

堅穴建物	時期
2-堅穴51	古墳時代中期中葉
16-堅穴4	古墳時代中期中葉
15-堅穴10	古墳時代中期中葉～後半
15-堅穴20	古墳時代中期後半
15-堅穴40	古墳時代中期後半
19-堅穴20	古墳時代中期後半
16-堅穴1	TK23～47
16-堅穴3	TK47
15-堅穴50	TK47～10
16-堅穴2	TK10～MT85
1-堅穴1	TK209
1-堅穴40	TK209～217

掘立柱建物・棚列	時期
15-棚列2	古墳時代後期
15-掘立2	古墳時代後期後半
15-掘立1	平安

土坑	時期
16-SK 5	TK208～23
16-SK10	古墳時代中期後半
1-SK10	古墳時代後期後半
2-SK54	TK43～209

溝	時期
16-SD11	古墳時代中期中葉
15-SD24	TK23～MT15
19-SD44	古墳時代後期前半
19-SD45	TK10～MT85
15-SD22	古墳時代後期
18・19-SD 5	飛鳥
18・19-SD 1	奈良時代
18・19-SD 7	奈良時代
15-SD21	中世

その他	時期
19-SX50	古墳時代後期中葉

表4 土器観察表①

国産番号	邦国番号	英文番号	造形部位	種類 器種 (部位)	口縁 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎成	備考
15	4	1	1-壺穴1 SF26	壺器 杯蓋	(13.2) [2.9]	口縁部と天井部の境は丸くならで、内端部は丸く収める。 [外]同軸付 [内]同軸付	[外]灰白/1 [内]灰白/1 青・3mm以下の緑紋 具	
15	4	2	1-壺穴1 SF26	壺器 杯蓋	(12.0) [2.4]	口縁部と天井部の境は丸くならで、内端部は内側に収まる。 [外]同軸付 [内]同軸付	[外]灰白/7 [内]灰白/7 青・3mm以下の緑紋 具	
15	4	3	1-壺穴1 埋土	壺器 杯蓋	(12.0) [2.4]	口縁部と天井部の境は鋭く屈曲し、端部は凹面をなす。 [外]同軸付 [内]同軸付	[外]黄灰2.596/1 [内]灰白/2 青・3mm以下の緑紋 具	
15	4	4	1-壺穴1 埋土	壺器 杯蓋	(12.8) [2.9]	口縁部と天井部の境は鋭く収まり、内端部は段を有する。 [外]同軸付 [内]同軸付	[外]灰白/6 [内]灰白/7 青・3mm以下の緑紋 具	
15	4	5	1-壺穴1 埋土	壺器 腰 (口縁)	- [4.05]	口縁部は外反し、端部は有稜凹端面を持つ。外面に突刺状の筋があり、その下に縦線状文を配する。 [外]同軸付・筋状文 [内]同軸付	[外]灰白/6 [内]灰白/5/1 青・3mm以下の右黄・長石・黒色紋 具	
15	4	6	1-壺穴1 埋土	土師器 甕 (把手)	長さ[5.75] 幅[3.7] 厚み[3.6]	把手は反りが強く、上面はナツを施す。把手接合技法は差込込み。 [外]同軸付・凹面圧痕 [内]ナツ	[外]黄灰396/6 [内]黄灰395/8 青・1mm以下の右黄・赤色・赤色紋 具	
15	4	7	1-壺穴40	壺器 杯蓋	(12.8) [3.0]	口縁部は屈曲し、端部は丸く収める。 [外]同軸付・同軸凹削り [内]同軸付	[外]灰白/5 [内]灰白/5 青・2mm以下の緑紋 具	
15	4	8	1-壺穴40	壺器 杯蓋	- [3.0]	口縁部と天井部の境は丸くならで、端部は丸く収める。 [外]同軸付 [内]同軸付	[外]灰白/6 [内]灰白/7 青・1mm以下の緑紋 具	
15	4	9	1-壺穴40	壺器 杯身	(13.6) [2.2]	口縁部の立ち上がりは短く内傾し、端部は丸く収める。 [外]同軸付 [内]同軸付	[外]灰白/6 [内]灰白/6 青・1mm以下の緑紋 具	
15	4	10	1-壺穴40	壺器 杯身	(13.6) [2.1]	口縁部の立ち上がりは短く内傾し、端部は丸く収める。立ち上がりの筋付有り。 [外]同軸付 [内]同軸付	[外]灰白/7 [内]灰白/7 青・1mm以下の緑紋 具	
15	4	11	1-壺穴40	土師器 甕 (口縁)	(13.8) 1.1 口縁[5.4] 底面[5.4]	粗製の小型甕である。 [外]ナツ [内]ナツ	[外]灰白・赤黄395/4 [内]黄灰395/1 青・3mm以下の右黄・長石 不具	
15	4	12	1-SK10	土師器 甕	- [14.5]	口縁部は両面・外反する。 [外]ナツ [内]ナツ	[外]黄2.596/6 [内]黄2.596/6 青・2mm以下の右黄・長石 不具	
4	13	1-清桶中	壺器 杯身	(11.8) [2.45]	口縁部の立ち上がりは短く内傾し、端部は丸く収める。 [外]同軸付 [内]同軸付	[外]灰白/6 [内]灰白/6 青・1mm以下の緑紋 具		
4	14	1-東壺清桶中	壺器 杯身	- [3.0]	口縁部の立ち上がりは短く内傾し、端部は丸く収める。 [外]同軸付 [内]同軸付	[外]灰白1098/2 [内]灰白1098/2 青・1mm以下の緑紋 不具		
4	15	1-東壺断面	壺器 腰 (口縁部)	21.6 [5.5]	口縁部は外反し、端部は凹面をもつ。端部外面に突刺状の筋がある。 [外]同軸付 [内]同軸付	[外]灰白/5 [内]灰白/5 青・2mm以下の緑紋 具		
15	23	16	2-壺穴51	土師器 甕 (口縁部)	(19.4) [4.4]	口縁部はくの字状に屈曲し、端部は内傾する面をもち内側に肥厚する。 [外]ナツ [内]ナツ	[外]同軸付395/6 [内]黄灰1095/6 青・3mm以下の右黄・長石・金雲母 不具	希望系
15	23	17	2-SK54	壺器 高杯 (脚部)	- [10.9] [2.0]	脚部は下方に曲げて丸く収める。 [外]同軸付 [内]同軸付	[外]灰白7.597/1 [内]灰白7.597/1 青・1mm以下の緑紋 具	
15	23	18	2-重輪彫削	土師器 杯	(12.4) [2.9]	機甲を呈す。口縁は内湾し、端部は丸く収める。 [外]ナツ [内]ナツ	[外]黄2.597/6 [内]黄2.597/6 青・3mm以下の右黄・赤色・赤色紋 具	
18	26	19	15-壺穴10 埋土	壺器 杯蓋	(11.6) [4.0]	口縁部と天井部の境は強い突刺状の鋭い稜が走る。端部は外方に突出し、ほぼ垂直な面を持つ。天井部は鋭く平直。 [外]同軸付・同軸凹削り(天井部全面に及ぶ) [内]同軸付	[外]灰白/5 [内]灰白/5 青・1mm以下の緑紋・2mmの黒色紋 彫削	

表5 土器観察表②

図版番号	断面番号	経度番号	遺構層位	種類 器種 (部位)	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴〔外〕〔内〕	色調〔外〕〔内〕 胎土 焼成	備考
	20	20	15-型穴10 埋土	須恵器 甕 (つまみ)	3.5 0.9 (1.5)	つまみは扁平で少し窪み中央がわずかに盛り上がる。 〔外〕同軸付? 〔内〕同軸付?	〔外〕R36/ 〔内〕灰白/37? 普・2mm以下の黒粒 良	
	20	21	15-型穴10 埋土	土師器 高杯 (脚部)	(14.4) - (3.9)	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部はわずかに外反する。 〔外〕?/? 〔内〕?/?	〔外〕にぶい・紺7, 3387/6 〔内〕浅黄緑7, 3386/4 普・1mm以下の石英・長石 良	
	20	22	15-型穴10 埋土	土師器 高杯 (脚部)	- (13.5) (8.7)	脚柱部はやや大きく、端部にかけてラッパ状に大きく開く。 〔外〕?/?+化粧土 〔内〕粘土粒巻上げ痕・取り痕	〔外〕紺2, 3386/8 〔内〕紺2, 3386/8 普・1.5mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
18	20	23	15-型穴10 埋土	土師器 甕 (口縁)	(17.6) - (6.9)	口縁部は湾曲・外反し、端部は上方に端面を持つ。 〔外〕?/? 〔内〕?/?	〔外〕にぶい・黄緑 10Y87/3 〔内〕にぶい・黄緑 10Y87/3 普・3mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
18	20	24	15-型穴10 埋土	土師器 甕 (口縁)	(18.4) - (5.5)	口縁部はくの字状に湾曲・内湾気味に立ち上がる。端部は内側に肥厚し、上方に端面を持つ。 〔外〕?/? 〔内〕?/?	〔外〕にぶい・黄緑 10Y86/4 〔内〕にぶい・黄緑 10Y86/4 普・2mm以下の石英・長石・金雲母・赤色粒・黒色粒 良	
			15-型穴10 埋土	土師器 甕 (口縁)	(23.0) - (6.6)	口縁部は湾曲・外反し、端部は外方に面を持つ。 〔外〕?/? 〔内〕板付?	〔外〕灰白 10Y88/2 〔内〕にぶい・黄緑 10Y87/2・にぶい・黄緑 10Y87/3 普・3mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
18	20	26	15-型穴10 埋土	土師器 甕 (口縁)	19.9 - (6.3)	口縁部はほぼ直立し、端部は先鋭りしている。 〔外〕?/? 〔内〕?/?	〔外〕灰白 2, 338/2 〔内〕黒7, 332/1 紺・3mm以下の石英・赤色粒 良	
			15-型穴10 埋土	土師器 甕 (口縁)	- - (3.0)	口縁部は直口し、端部は上方に端面をもつ。 〔外〕?/? 〔内〕?/?	〔外〕明赤焼 3Y85/6 〔内〕にぶい・黄緑7, 3386/4 普・3mm以下の石英・長石 良	
20	28	15-型穴10 埋土	弥生土器 甕 (口縁)	- - (5.1)	端部は湾曲し、端部はわずかに上下に肥厚する。 〔外〕?/? 〔内〕?/?	〔外〕にぶい・紺7, 3386/4 〔内〕にぶい・紺7, 3386/4 普・1mm以下の石英・長石・角閃石 良		
20	29	15-型穴10 埋土	弥生土器 甕 (底面)	- - (1.3)	平底の底面である。 〔外〕指頭正痕 〔内〕-	〔外〕にぶい・黄緑 10Y85/3 〔内〕にぶい・黄緑 10Y86/4 紺・3mm以下の石英・長石 良		
18	28	30	15-型穴20 胎床	土師器 杯 -	12.5 - -	輪形を呈す。口縁部は内湾し、端部は先鋭りしている。 〔外〕?/?+?/?+化粧土・底面: 一方の平行付? 〔内〕?/?	〔外〕紺 3Y86/6 〔内〕灰白 10Y88/2 普・3mm以下の長石・石英・赤色粒 良	
	28	31	15-型穴20 埋土	土師器 高杯 (杯部)	(14.8) - (4.9)	外反赤線。杯部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや開く。端部は丸く収める。 〔外〕?/? 〔内〕?/?	〔外〕黒焼 10Y83/1 〔内〕浅黄緑 10Y83/3・黒灰 10Y84/1 紺・3mm以下の長石・石英 良	
18	28	32	15-型穴20 胎床	土師器 高杯 (胎床)	(13.2) (9.0) (9.2)	輪形高杯。口縁部はやや外側に端部は丸く収める。被熱により磨耗著しい。 〔外〕?/? 〔内〕?/?	〔外〕にぶい・紺7, 3387/4 〔内〕にぶい・紺7, 3387/4 紺・2mm以下の長石・石英・赤色粒 良	
16	28	33	15-型穴20 SF31	土師器 甕 -	(16.4) - (8.1)	小形甕。口縁部はやや外側に端部は丸く収める。被熱により磨耗著しい。 〔外〕?/? 〔内〕?/?+?/?付着	〔外〕にぶい・紺7, 3385/4 〔内〕黒焼7, 3383/1・紺7, 3384/6 紺・3mm以下の長石・石英 良	
	28	34	15-型穴20 胎床	土師器 甕 -	(14.6) - (8.3)	口縁部はゆるやかに湾曲・外傾し、端部は丸く収める。 〔外〕?/? 〔内〕中・指頭正痕	〔外〕明赤焼2, 3Y85/6 〔内〕紺 3Y86/6・明赤焼 3Y85/8 紺・3mm以下の石英・長石 良	
16	28	35	15-8K35	土師器 甕 -	(15.0) - (7.85)	口縁部は弱く湾曲・外傾し、端部は丸く収める。 〔外〕?/? 〔内〕?/?	〔外〕紺 3Y86/6 〔内〕紺 3Y86/6 普・1mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒 良	
	28	36	15-型穴20 胎床	土師器 甕 -	(14.6) - (9.9)	口縁部はゆるやかに湾曲・外傾し、端部は丸く収める。 〔外〕?/? 〔内〕中・指頭正痕	〔外〕明焼7, 3385/6・にぶい・黄緑 10Y87/2 〔内〕紺 3Y86/6 紺・3mm以下の石英・長石 良	
	28	37	15-型穴20 胎床	土師器 甕 -	(19.2) - (5.5)	口縁部は湾曲・外反し、端部は丸く収める。 〔外〕?/? 〔内〕?/?	〔外〕紺 3Y87/6 〔内〕紺 3Y86/6 紺・2mm以下の長石・石英・赤色粒 良	

表6 土器観察表③

図版番号	採掘番号	図文番号	遺構層位	種類・器種(部位)	口径・底径・器高	形態の特徴 手法の特徴(外)[内]	色調(外)[内] 胎土・焼成	備考
	28	38	15-型穴20 胎土	土師器 甕 (口縁)	(19.2) - [外]??・ [内]??・ [4.1]	口縁部は外傾し、端部は丸く収める。 [外]??・ [内]??・	[外]にぶい黄緑7.0YR7/4 [内]紺7.0YR6/6 骨:1mm以下の石英・長石 晶	
18	28	39	15-型穴20 SP31	土師器 甕 (口縁)	(19.0) - [外]前頭正直・ [内]??・ [32.3]	口縁部は唇曲・外傾し、端部は丸く収める。底部穿孔有り。 [外]前頭正直・ [内]??・	[外]にぶい黄緑10YR7/4 [内]浅黄褐色10YR6/2・紺7.0YR7/6 骨:2mm以下の石英・長石・赤色粒 晶	竈跡同層
	28	40	15-型穴20 胎土	土師器 甕 (底部)	- [7.3]	底面は丸底で側面・形状は不明だが穿孔あり。体部外面に装飾面を埋付置。 [外]工具による調子のちり [内]-	[外]明赤褐色10YR5/8・にぶい黄緑10YR6/3 [内]紺7.0YR6/6 骨:5mm以下の長石・石英 晶	
	28	41	15-型穴20 埋土	土師器 甕 (口縁)	- [4.2]	二重口縁部。口縁部中位が唇曲し、端部は丸く収める。 [外]同転?? [内]同転??	[外]紺7.0YR6/6 [内]紺7.0YR6/6 骨:3mm以下の石英・長石 晶	中部掘戸 内系
	28	42	15-型穴20 胎土	土師器 甕 (把手)	- [内]-	把手は短い棒状を呈す。 [外]前頭正直 [内]-	[外]浅黄緑7.0YR8/3 [内]紺7.0YR7/6 骨:1mm以下の石英・長石 晶	
16	30	43	15-型穴40 胎土	土師器 鉢 (口縁)	- [2.7]	口縁部は内傾し、端部を押圧している。 [外]?? [内]??	[外]にぶい黄緑7.0YR7/4 [内]にぶい黄緑10YR7/3 骨:0.5mm以下の細粒 晶	
16	30	44	15-型穴40 埋土	土師器 高杯 (脚部)	- [2.1]	高杯の脚部部である。 [外]?? [内]??	[外]にぶい黄緑7.0YR7/4 [内]紺7.0YR7/6 骨:1mm以下の長石・石英 晶	
16	30	45	15-型穴40 埋土	土師器 甕 (口縁)	(8.5) - [4.9]	口縁部は直線的に外傾し、端部は丸く収める。 [外]?? [内]??	[外]にぶい黄緑10YR7/4 [内]紺7.0YR6/6 骨:4mm以下の長石・石英 晶	
16	30	46	15-型穴50 床面直上	原形器 有蓋高杯蓋 5.8	12.3 5.8	口縁部と天井部の間はなだらかで、内端部は沈没状の段を有する。大蓋部中央にボタン状のつまみを嵌め付ける。 [外]同転??・同転?削り [内]同転??・静止??	[外]黄緑7.0YR7/4 [内]浅黄緑7.0YR6/3 骨:5mm以下の細粒 晶	
16	30	47	15-型穴50 床面直上	原形器 杯身	11.7 5.25	口縁部の立ち上がりは内傾し、端部は内傾する面を持つ。底部は浅く平坦である。受部に黒重ね焼き痕あり。 [外]同転??・同転?削り [内]同転??	[外]同転7.0YR7/1 [内]同転7.0YR7/6 骨:3mm以下の細粒 晶	
16	30	48	15-型穴50 床面直上	原形器 杯身	11.1 6.1 4.6	立ち上がりは深く内傾し、端部は丸く収める。受部に黒重ね焼き痕あり。 [外]同転??・同転?削り(一部未調整) [内]同転??	[外]青灰SP6/1 [内]青灰SP6/1 骨:3mm以下の細粒 晶	
16	30	49	15-型穴50 床面直上	土師器 甕 (口縁)	26 [14.6]	口縁部は外反し端部は面を持つ。頸部をなでる。 [外]?? [内]??	[外]にぶい黄緑7.0YR6/4・赤緑10YR6/8 [内]にぶい黄緑10YR7/3・赤緑10YR6/8 骨:4mm以下の石英・長石 晶	
17	32	50	15-5360 SP62	土師質土器 杯 (口縁)	- [2.2]	口縁部は内湾気味に立ち上がり、外端部がわずかに突出する。 [外]?? [内]??	[外]紺7.0YR7/6 [内]紺7.0YR7/6 骨:1mm以下の石英・長石・赤色粒 晶	
17	35	51	15-楕立1 SP2	土師質土器 杯 (口縁)	(8.9) - [1.4]	端部を丸く収める。 [外]同転?? [内]同転??	[外]明褐色7.0YR7/2 [内]灰白12.0Y7/1 骨:2mm以下の長石・石英 晶	
17	35	52	15-楕立1 SP1	土師質土器 杯 (底部)	7.6 [1.2]	[外]- [内]前頭正直	[外]紺7.0YR7/6 [内]紺7.0YR7/6 骨:2mm以下の赤色粒 晶	
17	35	53	15-楕立1 SP3 縦方	土師質土器 杯 (底部)	(8.0) [1.83]	[外]?? [内]??	[外]浅黄緑10YR8/3 [内]浅黄緑10YR8/3 骨:1.5mm以下の石英・長石 晶	
17	35	54	15-楕立2 SP16	土師器 甕 (口縁)	(18.0) - [14.6]	口縁部は直立気味に立ち上がり、体部は球形を呈す。粗雑な作りである。 [外]??・ [内]前頭正直・	[外]にぶい黄緑10YR5/4 [内]にぶい黄緑10YR5/3 骨:5mm以下の石英・長石 晶	
17	36	55	15-楕立2 SP18	原形器 杯身	- [3.35]	立ち上がりはほぼ直立し、端部は丸く収める。 [外]同転?? [内]同転??	[外]浅黄緑7.0YR7/6 [内]浅黄緑7.0YR7/6 骨:1mm以下の石英・長石 晶	
17	36	56	15-楕立2 SP18	土師器 甕 (口縁)	(20.8) [4.5]	口縁部は外反し、端部は丸く収める。 [外]??・粘土層結合 [内]??	[外]紺7.0YR7/6 [内]明赤褐色10YR5/6 骨:2mm以下の石英・長石 晶	

表7 土器観察表④

図版番号	断面番号	経文番号	遺構層位	種類・器種 (部位)	口径・底径・器高	形態の特徴 手法の特徴〔外〕〔内〕	色調〔外〕〔内〕 胎土・焼成	備考
17	37	57	15-SK30	土師器 甕	(16.4) - 〔5.5〕	口縁部は唇曲し内面気味に立ち上がる。端部は内傾した面をもつ。 〔外〕「+」 〔内〕「+」	〔外〕にぶい・紺7, 5386/4 〔内〕にぶい・黄緑10187/4 普・2mm以下の石英・長石・赤色粒 土	希留系
17	37	58	15-SK30	土師器 甕	(27.8) - 〔8.5〕	口縁部と体部片がある。口縁部は外反する。 〔外〕「+」 〔内〕「+」	〔外〕紺5386-6 〔内〕にぶい・黄緑10187/4 粗・2mm以下の石英・長石 土	
17	37	59	15-SK30	土師器 甕 (把手)	長さ5.0 幅4.1 厚み3.6	把手部は基部が大きく短い棒状である。 〔外〕「+」 〔内〕「+」	〔外〕にぶい・黄緑10187/3 〔内〕「+」 普・1mm以下の石英・長石・金雲母・赤色粒・黒色粒 土	
16	42	60	15-S224	灰土器 杯・盆	(16.1) - 〔4.3〕	口縁部の立ち上がりは内傾し、端部は丸く内側に沈みが通る。 〔外〕「+」 〔内〕「+」	〔外〕灰白57/ 〔内〕灰白58/ 普・2mm以下の細粒・黒色粒 土	
16	42	61	15-S223	土師器 甕 (口縁)	- 〔5.8〕	口縁部は直立し、端部は上方に面を持つ。 〔外〕「+」 〔内〕「+」	〔外〕明赤535/6 〔内〕にぶい・黄緑10186/4 普・1mm以下の石英・長石・角閃石・赤色粒・黒色粒 土	
16	42	62	15-S236	土師器 甕 (口縁)	(25.6) - 〔5.9〕	口縁部は直立し、ややに肥厚する。端部は上方に面を持つ。 〔外〕「+」 〔内〕「+」	〔外〕紺5386-6 〔内〕紺537/6 普・2mm以下の石英・長石 土	
16	42	63	15-S222	土師器 甕 (口縁)	- 〔5.0〕	口縁部は縁やかに外反し、端部は丸く収める。 〔外〕「+」 〔内〕「+」	〔外〕にぶい・紺7, 5387/4 〔内〕にぶい・紺7, 5387/4 普・2mm以下の石英・長石 土	
16	42	64	15-S221	土師器 土管	(10.0) 2.1 2.7	底体部は丸みをとおび、口縁部は外傾する。 〔外〕「+」 〔内〕「+」	〔外〕灰白10188/2 〔内〕灰白10188/2 普・2mm以下の石英・長石・赤色粒 土	
43	65	15-覆土	灰土器 杯・盆	(11.5) - 〔2.6〕	口縁部と天井部の境は割い縁が通り、内端部は斜面を有する。 〔外〕「+」 〔内〕「+」	〔外〕灰白57/ 〔内〕黄緑2, 536/3 普・2mm以下の細粒 土		
43	66	15-覆土	灰土器 杯・盆	(15.0) - 〔4.1〕	口縁部と天井部の境は丸くならで、内端部は丸く収める。 〔外〕「+」 〔内〕「+」	〔外〕灰白2, 537/1 〔内〕灰白57/1 普・2mm以下の細粒 土		
43	67	15-覆土	灰土器 盆・杯 (杯底)	(11.4) - 〔4.6〕	立ち上がりはほぼ直立し、内端部に段を有する。 〔外〕「+」 〔内〕「+」	〔外〕灰白57/ 〔内〕灰白57/ 普・2mm以下の細粒 土		
43	68	15-覆土	土師器 土管	(36.0) - 〔12.85〕	口縁部と天井部の境は強い縁が通り、内端部は斜面を有する。 〔外〕「+」 〔内〕「+」	〔外〕にぶい・紺7, 5386/4 〔内〕にぶい・紺7, 5387/4 普・2mm以下の石英・長石 土		
19	48	69	16-型穴1 埋土	灰土器 杯・盆	13.0 - 〔5.3〕	口縁部と天井部の境は強い縁が通り、内端部は斜面を有する。 〔外〕「+」 〔内〕「+」	〔外〕灰白57/ 〔内〕灰白57/ 普・2mm以下の細粒 土	
19	48	70	16-型穴1 カマド	灰土器 杯・盆	12.6 - 4.9	口縁部と天井部の境は内傾が通り、内端部は段を有する。 〔外〕「+」 〔内〕「+」	〔外〕灰白57/ 〔内〕灰白57/ 普・2mm以下の細粒 土	
19	48	71	16-型穴1 埋土	灰土器 杯・盆	12.6 - 3.1	口縁部と天井部の境は内傾が通り、内端部は段を有する。 〔外〕「+」 〔内〕「+」	〔外〕灰白57/ 〔内〕灰白57/ 普・2mm以下の細粒 土	
48	72	16-型穴1 埋土	灰土器 杯・盆	(14.9) - 〔3.2〕	口縁部と天井部の境は強い縁が通り、内端部は斜面を有する。 〔外〕「+」 〔内〕「+」	〔外〕灰白57/ 〔内〕灰白57/ 普・2mm以下の細粒 土		
19	48	73	16-型穴1 埋土	灰土器 杯・盆	15.9 - 4.9	口縁部と天井部の境は丸くならで、内端部は先細りしている。 〔外〕「+」 〔内〕「+」	〔外〕灰白57/ 〔内〕灰白57/ 普・2mm以下の細粒 土	
48	74	16-型穴1 埋土	灰土器 杯・盆	- - 〔2.5〕	口縁部と天井部の境は強い縁が通り、内端部は広い内傾面を有する。 〔外〕「+」 〔内〕「+」	〔外〕灰白57/ 〔内〕灰白57/ 普・2mm以下の細粒 土		

表 8 土器観察表⑤

図版 番号	標記 番号	経文 番号	遺構 層位	種類 器種 (部位)	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
19	48	75	16-型穴1 埋土	須恵器 有蓋高杯蓋	13.1 5.2	口縁部と天井部の境は明確が通り、端部は斜面を有す。天井部中央にボタン状の扁平なつまみを彫り付ける。 [外]同軸付・同軸3割り [内]同軸付	[外]灰緑N5/ [内]灰緑N5/ 普・2mm以下の細粒 良	
19	48	76	16-型穴1 埋土	須恵器 有蓋高杯蓋	13.0 - 3.5	口縁部と天井部の境は明確が通り、端部は斜面を有す。天井部中央にボタン状の扁平なつまみを彫り付ける。 [外]同軸付・同軸3割り [内]同軸付	[外]灰緑N6/ [内]灰緑N6/ 普・2mm以下の細粒 良	
19	48	77	16-型穴1 埋土	須恵器 杯身	11.2 - 4.65	立ち上がりはやや内傾し、内端部は斜面を有する。受部に重ね付き痕あり。 [外]同軸付・同軸3割り [内]同軸付・静止付	[外]灰白N7/ [内]灰白N7/ 普・1mm以下の細粒・黒色粒 良	
19	48	78	16-型穴1 土層部	須恵器 杯身	10.3 - [4.8]	口縁部の立ち上がりは緩曲気味に内傾し、端部は丸く収める。 [外]同軸付・同軸3割り [内]同軸付	[外]黄灰厚肌N1/ [内]黄灰厚肌N1/ 普・1mm以下の黒色粒 良	
19	48	79	16-型穴1 カマド 壁付付近 床面直上	須恵器 杯身	11.6 - 5.25	口縁部の立ち上がりは内傾し、端部は先細りしている。 [外]同軸付・同軸3割り [内]同軸付	[外]灰緑N6/ [内]灰白N7/ 普・2mm以下の細粒 良	
48	80		16-型穴1 カマド	須恵器 杯身	14.0 - 3.0	立ち上がりは欠損。底部は広く平坦である。 [外]同軸付・同軸3割り [内]同軸付	[外]灰緑N6/ [内]灰白N7/ 普・2mm以下の細粒 良	
48	81		16-型穴1 埋土	須恵器 杯身	11.1 2.4 4.4	立ち上がりはやや平直に緩曲気味に内傾し、端部は丸く収める。底面は広く平坦。 [外]同軸付・同軸3割り [内]同軸付	[外]灰緑N6/ [内]灰緑N5/ 普・2mm以下の細粒・黒色粒 良	
19	48	82	16-型穴1 土層部	須恵器 杯身	(12.9) (8.4) (8.4)	口縁部の立ち上がりは緩曲気味に内傾し、端部は先細りしている。 [外]同軸付・同軸3割り [内]同軸付	[外]灰白N7/ [内]灰緑N6/ 普・2mm以下の細粒 良	
48	83		16-型穴1 埋土	須恵器 杯身	(10.7) - [5.1]	口縁部の立ち上がりは内傾し、端部は丸く収める。 [外]同軸付・同軸3割り [内]同軸付	[外]灰白N7/ [内]黄灰2.576/1 普・2mm以下の細粒 良	
20	48	84	16-型穴1 床面直上	須恵器 蓋杯	10.2 8.4 9.5	立ち上がりは内傾し、端部は丸く収める。脚部は八の字状に開き、裾端部は下方に屈曲して丸く収める。 [外]同軸付・同軸3割り・3方向台形スカー [内]同軸付	[外]灰白N7/1 [内]灰白N7/1 普・1mm以下の細粒 良	
20	48	85	16-型穴1 カマド 壁付付近 床面直上	須恵器 蓋杯	9.8 8.6 9.2	立ち上がりは内傾し、端部は丸く収める。脚部は八の字状に開き、裾端部は下方に屈曲し、外端面をもつ。 [外]同軸付・同軸3割り・3方向台形スカー [内]同軸付	[外]灰緑N6/ [内]灰緑N6/ 普・2mm以下の細粒 良	
48	86		16-型穴1 埋土	須恵器 蓋杯 (脚部)	(11.0) - (4.0)	脚部に台形スカーを穿ち、脚部を下方に曲げて端部を持つ。 [外]同軸付・台形スカー(方向不明) [内]同軸付	[外]灰色2.578/1 [内]灰色2.578/2 普・2mm以下の細粒 不良	
48	87		16-型穴1 埋土	須恵器 蓋 (口縁)	(13.5) - [5.5]	口縁部は外反し、端部は上方に持ち上げ丸端面をもつ。 [外]同軸付 [内]同軸付	[外]灰白N7/1 [内]灰白N7/1 普 良	
19	48	88	16-型穴1 床面直上	須恵器 長頸蓋	(10.6) - 15.4	口縁部はゆるやかに開き、端部付近で、内角気味に角度を変える。口縁部に突如で区切られた縦線状文(14番1区)を配する。体部にはほぼ矩形を呈し、丸底である。 [外]同軸付・同軸カキ目・同軸ヘラ割り [内]同軸付・指頭正直	[外]灰白N7/ [内]灰・7区325/3 普・2.5mm以下の長石・石英・黒色粒 良	
48	89		16-型穴1 埋土	須恵器 蓋 (口縁)	(20.2) - [2.4]	口縁部は外反し、端部外面に突如で2条直る。頸部に縦線状文(15条)を配する。 [外]付・波状文 [内]付	[外]黄色2.576/1 [内]灰色2.577/1 普・2mm以下の細粒 良	
48	90		16-型穴1 埋土	土層部 蓋 (口縁)	15.0 - [4.3]	頸部は緩やかに屈曲し、端部は丸く収める。 [外]付 [内]指頭正直・マツ	[外]明赤緑2.5785/6 [内]にぶい・明7.5786/4 肌・2mm以下の長石・石英・赤色粒 良	
48	91		16-型穴1 埋土	土層部 蓋	18.2 - 9.2	口縁部は緩曲・外傾し、端部は丸く収める。 [外]付・土具痕 [内]土具痕	[外]明7.5786/6 [内]にぶい・明7.5786/4 肌・2mm以下の長石・石英 良	
20	48	92	16-型穴1 カマド	土層部 蓋	(15.3) [15.1]	中頸部。口縁部はやや受け口状に内傾し、端部は内傾する面を持つ。体部下半及び大前脚が打ち欠き等により欠損する。大前脚外面は後傾。 [外]付・指頭正直・肌い・8 [内]付・指頭正直・8 (横方向)	[外]にぶい・明7.5787/4 [内]にぶい・明7.5787/4 普・5mm以下の長石・石英 良	

表9 土器観察表⑥

図版番号	標記番号	記号番号	遺構層位	種類器種(部位)	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
20	48	93	16-型穴1 床面直上	土器器 底	22.0 - [10.1]	底部は屈曲し、口縁部は短く、底部は上方に面を持つ。 [外]中・黒褐色 [内]煎脂圧痕	[外]に灰・黄緑10YR7/4 [内]に灰・黄緑10YR6/3 骨・3mm以下の石質・長石・赤色焼 良	
20	48	94	16-型穴1 床面直上	土器器 底	(18.0) - [11.7]	口縁部は屈曲・外反し、底部は丸く収める。体部に縦付痕。 [外]中・黄褐色 [内]中・黄褐色	[外]に灰・黄緑7.5YR7/3 [内]に灰・黄緑7.5YR7/4 骨・5mm以下の石質・長石・赤色焼 良	
20	48	95	16-型穴1 埋土	土製品 土牌	長さ8.4 幅2.2 厚み3.0	長い棒状を呈し、2ヶ所孔を穿つ。 [外]中・煎脂圧痕 [内]中・	[外]に灰・黄緑10YR7/3 [内]中・ 骨・3mm以下の石質・長石・赤色焼 良	
	48	96	16-型穴1 土器部り	土器器 底 (把手)	- - [4.7]	把手の上面を「フ」により面をもち、断面平円形を呈する。 [外]煎脂圧痕 [内]中・	[外]に灰・黄7.5YR6/4 [内]中・ 骨・3mm以下の石質・長石・赤色焼 良	
20	48	97	16-型穴1 カマド	土器器 底 (把手)	- - -	把手は先端で断面平円形、上面に切り込みを刻む。貫通しない。 [外]煎脂圧痕 [内]中・	[外]黄緑7.5YR6/8 [内]中2.5YR6/6 骨・5mm以下の石質・赤色焼 良	
20	48	98	16-型穴1 土器部り	土器器 底 (底部)	- - [1.3]	底部片である。円形の透孔有り。 [外]中・ [内]中・	[外]に灰・黄緑10YR7/3 [内]灰黄緑10YR6/2 骨・1mm以下の石質・長石・赤色焼 良	
	48	99	16-型穴1 埋土	土器器 底 (把手)	- - [1.6]	把手は手捻りにより作出し、断面は大円形を呈する。 [外]煎脂圧痕 [内]中・	[外]に灰・黄緑10YR7/3 [内]中・ 骨・3mm以下の石質・長石・赤色焼 良	
21	55	100	16-型穴2 杯蓋	煎脂器 杯蓋	(16.4) - [4.9]	口縁部と天井部の境は強い稜が走り、底部は丸く収める。 [外]回転付・天井部回転・切り痕 [内]回転付・	[外]灰白7 [内]灰白3 骨・4mm以下の細粒 良	
21	55	101	16-型穴2 胎土	煎脂器 杯蓋	(15.4) - [4.5]	口縁部と天井部の境は強く屈曲し、内縁部は広い凹部面を有する。 [外]回転付・回転・切り痕 [内]回転付・当て見痕	[外]灰白3 [内]灰白3 骨・2mm以下の細粒 良	
21	55	102	16-型穴2 床面直上	煎脂器 杯蓋	13.2 - 5	立ち上がりはやや強く内傾し、底部は丸く収める。立ち上がりと受部の境には稜が走る。 [外]回転付・回転・切り痕 [内]回転付・当て見痕	[外]灰白3 [内]灰白3 骨・3mm以下の細粒 良	
	55	103	16-型穴2 カマド	土器器 底 (口縁)	(21) - [4]	口縁部はわずかに外に開く。 [外]煎脂圧痕・中・ [内]煎脂圧痕	[外]明赤焼5YR5.6 [内]中5YR6.6 骨・6mm以下の石質・長石・赤色焼 良	
	55	104	16-型穴2 埋土	土器器 底 (底部)	- - [0.95]	底部片である。透孔有り。 [外]中・ [内]中・	[外]中7.5YR7/6 [内]灰黄緑10YR6/4 骨・1mm以下の石質・長石・赤色焼 良	
21	55	105	16-型穴2 P5	土器器 鉢	(20.3) - [9.45]	口縁部はわずかに外に開く。 [外]煎脂圧痕・中・ [内]煎脂圧痕・中・	[外]明赤焼5YR5.6 [内]に灰・黄7.5YR5/4 骨・3mm以下の石質・長石・赤色焼 良	
	55	106	16-型穴2 P5	土器器 底 (口縁)	(18.4) - [4.5]	小笠型。放射状によるワザ。 [外]回転付・煎脂圧痕 [内]回転付・	[外]に灰・黄7YR6/4 [内]に灰・黄7YR6/4 骨・3mm以下の石質・長石・赤色焼 良	
21	55	107	16-型穴2 床面直上	土器器 底 (底部)	- - [16.6]	大笠型の体部である。底部は丸底。 [外]中・ [内]中・	[外]に灰・黄7.5YR5/3 [内]灰黄緑10YR6/2 骨・3mm以下の石質・長石・赤色焼 良	
21	55	108	16-型穴3 床面直上	煎脂器 杯蓋	12.4 4.3	口縁部と天井部の境は強い稜が走り、底部はほぼ接地する。 [外]回転付・回転・切り痕・天井部に自然付着 [内]回転付・	[外]灰白3 [内]灰白7 骨・2mm以下の細粒 良	
21	55	109	16-型穴3 カマド壁道	土器器 杯	(11.3) - [4.9]	底部は平底で、口縁部は内湾する。底部は欠損。 [外]中・ [内]中・	[外]明赤焼5YR5.6 [内]に灰・黄緑10YR7/2 骨・2mm以下の石質・長石・赤色焼 良	
	55	110	16-型穴3 カマド	土器器 蓋杯 (杯蓋)	13.0 - [5.9]	口縁部は内湾突起に立ち上がり、底部は上方に端面を持つ。 [外]中・ [内]中・	[外]中5YR6.6 [内]中5YR7.6 骨・1mm以下の石質・赤色焼 良	
21	55	111	16-型穴3 SP16	土器器 蓋杯 (杯蓋)	(13.8) - [4.9]	輪郭高杯。杯蓋はやや強く内湾して立ち上がり、底部はわずかに外反する。 [外]中・中・ [内]中・放射状線文・	[外]灰黄緑10YR6/4一部中2.5YR6/6 [内]灰黄緑10YR6/4一部中2.5YR6/6 骨・3mm以下の石質・長石・赤色焼 良	

表 10 土器観察表⑦

図版 番号	種類 番号	経文 番号	遺構 層位	種類 部種 (部位)	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
	55	112	16-型穴3 カマド溝道	土器器 鉢 (口縁)	— — [2.2]	粗製 [外]?? [内]??	[外]にぶい・紺7, 535/4 [内]にぶい・紺7, 536/4 骨・2mm以下の石質・長石・赤色粒 貝	
22	55	113	16-型穴3 埋土	土器器 壺 (口縁)	(16.8) — [5.6]	口縁部はくさの字状に屈曲し、端部は内傾させた面を持つ。 [外]?? [内]??	[外]にぶい・紺7, 535/4 [内]にぶい・紺7, 536/4 骨・2mm以下の石質・長石 貝	
22	55	114	16-型穴3 埋土	土器器 壺 (口縁)	19.4 — [4.4]	口縁部は屈曲し端部は内傾した面を持つ。 [外]?? [内]??	[外]にぶい・紺7, 536/4 [内]にぶい・紺7 1078/4 骨・2mm以下の石質・赤色粒 貝	
21	55	115	16-型穴3 埋土	土器器 鍋 (口縁)	(16.9) — [8.6]	口縁部は縁やかに外反し、端部は丸く収める。口縁部の のきみ著しい。体部外面に煤付着 [外]??+? [内]??	[外]にぶい・紺7 1078/3 [内]灰白 538/2 骨・1mm以下の石質・長石・黒色粒・赤 色粒 貝	
22	55	116	16-型穴3 カマド	土器器 壺 (口縁)	(23.6) — 9.6	口縁部は縁やかに外反し、端部は丸く収める。 [外]??+? [内]??+??	[外]浅黄緑2, 538/3 [内]灰白 1078/2 骨・1mm以下の石質・長石・赤色粒 貝	118と同一 個体か
22	55	117	16-型穴3 カマド	土器器 壺 (口縁)	— — [11.4]	口縁部は縁やかに外反し、端部は丸く収める。 [外]??+? [内]黒面正飯・削り	[外]灰白2, 538/2 [内]灰白2, 538/2 骨・2mm以下の石質・長石・黒色粒 貝	
	55	118	16-型穴3 カマド溝切	土器器 壺 (口縁)	— — [9.2]	口縁部は縁やかに外反し、端部は丸く収める。 [外]??+? [内]??+削り	[外]浅黄緑 1078/3 [内]灰白 1078/2 骨・2mm以下の石質・長石 貝	116と同一 個体か
22	55	119	16-型穴4 カマド	土器器 高杯 (口縁)	(14.0) (10.0) 9.45	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸く収める。 脚部は屈曲せず縁やかに開く。 [外]??+黒面正飯 [内]??	[外]明赤焼2, 535/6 [内]灰白 1078/2 骨・2mm以下の石質・長石・赤色粒 貝	
55	120		16-型穴4 灰床	土器器 製土器	— — [3.1]	口縁部は直立し、端部は丸く収めている。 [外]?? [内]??	[外]にぶい・紺7, 535/4 [内]紺7, 536/6 骨・2mm以下の石質・赤色粒 貝	編織V式
62	121		16-58.10	須恵器 器種不明	(12.0) — [2.7]	端部は上方に面を持つ。1条の凹溝により区切られ、 縦横直交文が1条ずつ配される。 [外]直交文 [内]凹輪付	[外]灰白55/ [内]灰白57/ 骨・2mm以下の細粒 貝	
17	62	122	16-58.10	土器器 高杯 (杯部)	(14.0) — [3.6]	体部は浅い・輪形を呈す。口縁部はやや内湾し、端部は わずかに外反する。 [外]丁字な??+化粧土 [内]横??	[外]明赤焼535/6 [内]灰白 1078/2 骨・1mm以下の石質・長石 貝	
62	123		16-58.10	土器器 高杯 (口縁)	— — [3.5]	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は上方に面を持つ。 [外]?? [内]??	[外]にぶい・紺7 1078/4 [内]にぶい・紺7, 538/4 骨・2mm以下の石質・長石・赤色粒 貝	
22	62	124	16-58.5	須恵器 高杯 (杯部)	12.0 — [4.0]	口縁部の立ち上がりはやや内湾したのち直立し、端部 は内傾する面を持つ。杯底部は浅く、1/3の範囲に凹 輪付を目を施す。受部に煮えね焼き痕あり。 [外]凹輪付+??目+削り [内]凹輪付	[外]535/5 [内]535/5 骨・2mm以下の石質・黒色粒 貝	
22	62	125	16-58.5	土器器 高杯 (杯部)	15.0 — [4.2]	杯部は浅く、端部は丸く収める。 [外]?? [内]??	[外]にぶい・紺7 1078/4 [内]浅黄緑 1078/3 骨・2mm以下の石質・赤色粒 貝	
22	62	126	16-58.5	土器器 高杯 (脚部)	— 10.0 [4.3]	底面、脚注部と脚部の境が明瞭に屈曲する。 [外]?? [内]横付+粘土粒管上げ痕	[外]紺536/6 [内]紺537/6 骨・2mm以下の石質・長石・赤色粒 貝	
62	127		16-58.5	土器器 壺 (口縁)	— — [3.3]	口縁内端部が内側に肥厚する。 [外]?? [内]??	[外]にぶい・紺7 1078/3 [内]にぶい・紺7, 536/4 骨・2.5mm以下の石質・長石・赤色粒 貝	
62	128		16-58.5	土器器 壺 (口縁)	20.4 — [4.0]	口縁部は内湾し、内端部は肥厚し内傾する面をもつ。 [外]?? [内]黒面正飯	[外]にぶい・紺7 1078/4 [内]にぶい・紺7 1078/4 骨・黒色粒 貝	希留系
22	62	129	16-58.5	土器器 壺 (口縁)	(18.4) — [6.1]	口縁部は強く屈曲・やや内湾し、内傾する面をもつ。 [外]?? [内]??	[外]紺2, 536/6 [内]にぶい・紺7 1078/4 骨・2mm以下の石質・長石・赤色粒 貝	

表 11 土器観察表⑧

図版 番号	標高 番号	観文 番号	遺構 層位	種類 器種 (部位)	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴〔外〕〔内〕	色調〔外〕〔内〕 胎土 焼成	備考	
17	62	130	16-S011	土師器 高杯	12.0 8.8 (9.3) (6.9)	碗形高杯、杯底は浅く、器底は先細りしている。器底の脚柱部に中央に突起を持った杯部を造込み、その後脚部から押正した痕跡がある。 〔外〕凹打 〔内〕凹打	〔外〕紺7.0306/6 〔内〕紺7.0307/6 肌1.5mm以下の石黄・赤色粒 貝		
62	131	16-重機掘削	築造器 杯身	(13.0) - 〔5.15〕	口縁部の立ち上がりはやや内傾し、器底は内傾する面を持つ。 〔外〕凹打・凹打・凹打 〔内〕凹打	〔外〕灰白N7/ 〔内〕灰白N7/ 精貝1.5mm以下の細粒 貝			
62	132	16-精査中	土師器 盃	(21.2) - 〔4.85〕	口縁部は内湾し、器底は内傾する面をもつ。 〔外〕凹打 〔内〕凹打	〔外〕に灰白・黄褐色10YR7/3 〔内〕に灰白・黄褐色10YR7/4 普1mm以下の石黄・長石・金雲母・赤色粒・黒色粒 貝	表面系		
22	62	133	17-S016	築造器 杯	(10.8) - 〔2.0〕	口縁は直線的に外傾し、器底は先細りしている。 〔外〕凹打 〔内〕凹打	〔外〕灰白N7/ 〔内〕灰白N7/ 普1.5mm以下の石黄・長石 不品		
22	62	134	17-S08	築造器 盃 (器底)	- (6.0) (3.4)	器底は平底。 〔外〕凹打 〔内〕凹打・凹打・凹打	〔外〕灰白N7/ 〔内〕灰白N7/～N8/ 精貝1.5mm以下の細粒 貝		
62	135	17-重機掘削	築造器 盃	- (11.0) 〔1.2〕	器底に底台を彫り付ける。 〔外〕凹打・凹打・凹打 〔内〕凹打・静止打	〔外〕灰白N8/ 〔内〕灰白N8/ 普1mm以下の石黄・長石 不品			
23	69	136	19-型穴20 SP41	築造器 杯蓋	- 12.8 4.5	口縁部と天井部の境は割い線が通り、内縁部は広い凹削面を有する。器底は平底。 〔外〕凹打 〔内〕凹打	〔外〕紺5YR6/6 〔内〕紺7.0306/6 普1.5mm以下の石黄・長石・赤色粒 不品		
23	69	137	19-型穴20 胎床	築造器 盃 (器底)	- - -	底面丸底。 〔外〕凹打・凹打・凹打・凹打 〔内〕凹打・凹打	〔外〕灰白N7/ 〔内〕灰白N7/ 普1.5mm以下の細粒 砂粒		
23	69	138	19-型穴20 埋土	土師器 碗 (器底)	- - -	器口よりあり。 〔外〕凹打 〔内〕凹打	〔外〕紺7.0307/6 〔内〕紺7.0307/6 普1.5mm以下の石黄・赤色粒 貝		
23	69	139	19-型穴20 SP42	土師器 高杯 (杯底)	(15.2) [4.8]	碗形高杯、口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、器底はわずかに反る。 〔外〕凹打 〔内〕凹打	〔外〕紺5YR6/6 〔内〕に灰白・紺7.0307/4 普1.5mm以下の石黄・赤色粒・黒色粒 貝		
25	69	140	19-型穴20 SP43	土師器 高杯 (器底)	- 9.2 (3.5)	低唇。脚柱部と腹縁の境が明瞭に屈曲する。脚部外面に煤化。 〔外〕凹打 〔内〕凹打・粘土線管上げ痕	〔外〕紺5YR7/6 〔内〕紺5YR6/6 普1.5mm以下の石黄・長石・赤色粒 貝		
23	69	141	19-型穴20 埋土	土師器 高杯 (器底)	- (9.5) (6.2)	脚部は屈曲せず緩やかに開く。 〔外〕凹打 〔内〕凹打	〔外〕紺5YR6/6 〔内〕紺5YR6/6 普1.5mm以下の石黄・長石・赤色粒 貝		
23	69	142	19-型穴20 SP43	土師器 盃	(18.8) 30.8	体部。口縁部外面に煤化。口部部は屈曲・内湾し、器底は内傾する面を持つ。体部は脚型を呈す。 〔外〕凹打・凹打 〔内〕凹打・凹打	〔外〕紺5YR7/6 〔内〕に灰白・紺5YR7/4 普1.5mm以下の石黄・長石・赤色粒・黒色粒 貝		
23	69	143	19-型穴20 付立包舎層	土師器 杯 (口縁)	- - 〔2.4〕	器底は丸く収める。 〔外〕凹打 〔内〕凹打	〔外〕紺5YR7/6 〔内〕に灰白・紺5YR7/4 普1.5mm以下の石黄・長石・赤色粒 貝		
23	69	144	19-型穴20 付立包舎層	土師器 盃	(16.1) [6.5]	口縁部は受け口状を呈し、器底が内側に肥厚し上方に屈曲を持つ。体部外面に一段欠けているが、ヘラ番号7/あり 〔外〕凹打・凹打 〔内〕凹打	〔外〕に灰白・黄褐色10YR5/3 〔内〕に灰白・黄褐色10YR5/4 普1.5mm以下の石黄・長石・金雲母 貝		
24	76	145	19-S330 下層	築造器 杯身	(14.2) - 4.0	口縁部と天井部の境は割く線が通り、内縁部は広い凹削面を有する。 〔外〕凹打・凹打・凹打 〔内〕凹打	〔外〕灰N6/ 〔内〕灰白N7/ 普1.5mm以下の砂粒 貝		
76	146	19-S330 上層	築造器 杯身	(12.2) [3.0]	口縁部の立ち上がりは内傾し、器底は丸く収める。 〔外〕凹打 〔内〕凹打	〔外〕灰白N7/ 〔内〕灰白N7/ 普1.5mm以下の長石・石黄 貝			
24	76	147	19-S330 下層	築造器 盃	(22.0) [6.4]	口部部は外反し、器底は上下に肥厚し、右側面腹面をもつ。 〔外〕凹打・凹打・凹打 〔内〕凹打・凹打・凹打・凹打	〔外〕灰N6/ 〔内〕灰N6/ 普1.5mm以下の石黄・長石 貝		

表 12 土器観察表⑨

図版 番号	標高 番号	地文 番号	遺構 層位	種類 器種 (部位)	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
24	76	148	19-53/30 下層	須恵器 甕 (口縁)	(22.0) - (9.4)	口縁部は外反し、口縁部付近で水平に開く。端部は上 端を揃み上げ面を持つ。 [外]平行円形・自然釉付着・粘土地2層 [内]平直・自然釉・平口付	[外]灰白/緑 [内]灰白/緑 普・2mm以下の砂粒 良	
24	76	149	19-53/30 下層	須恵器 甕 (底面)	- (15.0) (27.4)	大型甕の底面。 [外]平行円形・自然釉 [内]平直・自然釉・平口付	[外]灰白/緑 [内]灰白/緑 普・2mm以下の砂粒 良	
24	76	150	19-53/30 下層	土師器 甕	21.8 - 32.4	口縁部は屈曲・外傾し、端部は丸く収める。体部は卵 形を呈す。 [外]円形 [内]円形	[外]浅黄緑10YR6/3 [内]灰白10YR8/2 普・1mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
24	76	151	19-53/30 下層	土師器 甕	23.6 - (15.4)	口縁部は屈曲・外反し、端部は丸く収める。 [外]円形 [内]屈曲(底面・円形)	[外]浅黄緑10YR6/4 [内]浅黄緑10YR6/3 粗・1mm以下の砂粒 良	
77	152	19-50/45	須恵器 杯蓋	(14.2) - (4.6)	口縁部と天井部の境は明確に区別が通り、端部は内傾する同 面を有する。 [外]円形・自然釉・自然釉 [内]円形・自然釉	[外]灰白/緑 [内]灰白/緑 普・2mm以下の石英・長石 良		
25	77	153	19-50/45	須恵器 杯蓋	(15.0) - (3.2)	口縁部と天井部の境は明確に区別が通り、内端部は広い同 面を有する。 [外]円形・自然釉 [内]円形・自然釉	[外]灰白2.5Y7/1 [内]灰白/緑 普・2mm以下の石英・長石・黒色粒 良	
25	77	154	19-50/45	須恵器 杯蓋	(16.0) - (4.0)	口縁部と天井部の境は明確に区別が通り、内端部は広い同 面を有する。 [外]円形・自然釉・自然釉 [内]円形・自然釉	[外]灰白/緑 [内]灰白/緑 普・4mm以下の石英・長石・黒色粒 良	
25	77	155	19-50/45	須恵器 杯蓋	(13.2) - (3.0)	口縁部と天井部の境は明確に区別が通り、内端部は広い同 面を有する。 [外]円形・自然釉 [内]円形・自然釉	[外]灰白/緑 [内]灰白/緑 普・1mm以下の石英・長石 良	
77	156	19-50/44	須恵器 杯蓋	(14.1) - (2.85)	口縁部と天井部の境は明確に区別が通り、内端部は広い同 面を有する。 [外]円形・自然釉 [内]円形・自然釉	[外]灰白/緑 [内]灰白/緑 粗・0.5mm以下の細粒 良		
25	78	157	19-50/5	須恵器 杯身	(8.6) - 3.15	口縁部の立ち上がりは折れ曲がりにより短く内湾し、端 部は丸く収める。底面外面に土質の剥離有り。 [外]円形・自然釉・底面・自然釉 [内]円形・自然釉	[外]灰白/緑 [内]灰白/緑 普・1mm以下の細粒・黒色粒 良	
25	78	158	19-50/5 上層	須恵器 高杯	- (9.5) (8.15)	杯部は腹面を呈し、体部は2条の沈線が通る。脚部は 短脚でハの字状に開き、縦端部はわずかに下方に突出 し、外端部を持つ。 [外]円形・自然釉 [内]円形・自然釉	[外]灰白/緑 [内]灰白/緑 普・3mm以下の細粒 良	
25	78	159	18-50/5 最下層	須恵器 高杯 (脚部)	- 8.0 (5.5)	脚部はハの字状に開き、縦端部は短く下方に突 出し外端部を持つ。脚部外面に沈線が1条通る。 [外]円形・自然釉 [内]円形・自然釉	[外]灰白/緑 [内]灰白/緑 普・3mm以下の細粒 良	
25	78	160	18-50/5	土師器 杯 (脚部)	- 7.6 (3.6)	脚部はハの字状に開き、短脚である。 [外]円形・自然釉 [内]円形・自然釉	[外]粗2.5YR6/8 [内]粗2.5YR6/8 普・5mm以下の細粒・赤色粒 良	
25	78	161	19-50/5 上層	土師器 杯	11.6 - (3.7)	腹面を呈し、平底。底面はやや厚い。 [外]円形・自然釉 [内]円形・自然釉	[外]浅黄緑7.5YR8/4 [内]浅黄緑7.5YR8/4 普・5mm以下の細粒・赤色粒 良	
78	162	18-50/5 最下層	土師器 甕 (口縁)	- - 5.9	口縁部は直口し、やや厚みを有す。 [外]円形・自然釉・口縁のみ自然釉 [内]円形・自然釉	[外]粗2.5YR6/8 [内]粗2.5YR6/8 普・5mm以下の小石・赤色粒 良		
25	78	163	18-50/5 最下層	土師器 甕	11.7 - 10.2	小型丸底の甕。口縁部は軽く折れ曲がり、底面に1cm 程の小円孔と4cm大の不整形な孔を穿つ。いずれも焼 成後穿孔。 [外]円形・自然釉・底面・自然釉 [内]円形・自然釉	[外]浅黄緑10YR6/4 [内]浅黄緑10YR6/4 普・2mm以下の石英・長石・赤色粒 良	
26	80	164	19-50/1 灰黄色粘質土 1層	須恵器 甕	15.8 - (3.1)	口縁部は外傾し、端部は丸く収める。 [外]円形・自然釉 [内]円形・自然釉	[外]灰白/緑/1 [内]灰白/緑/1 普・2mm以下の細粒 良	
26	80	165	18-50/1 最上層	須恵器 杯	- (11.4) (1.6)	底面に低い高台を施し付ける。 [外]円形・自然釉 [内]円形・自然釉	[外]灰白/緑 [内]灰白/緑 普・2mm以下の細粒 良	

表 13 土器観察表⑩

図版 番号	断面 番号	地文 番号	遺構 層位	種類 部種 (部位)	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
26	80	166	19-50-1 最上層	土師器 杯	— (6.8) (1.5)	平底を台を呈する。 [外]同軸付? [内]同軸付?	[外]紺7, 5336/6 [内]に灰い紺7, 5337/4 普:1mm以下の石英・長石・赤色粒 不具	
26	80	167	19-50-1 灰黄色粘質土 1層	須恵器 甕 (口縁)	19.4 — (5.6)	口縁部は外反し、肩部は丸く収める。 [外]同軸付? [内]同軸付?	[外]灰36/ [内]灰36/ 精良:1mm以下の砂粒 不具	
26	80	168	19-50-1 1層	土師器 移動式ナド	— — — [外]ナ? [内]ナ?	移動式ナドの掛け口上座部分の破片である。付け 部。 [外]ナ? [内]ナ?	[外]に灰い紺7, 5336/3 [内]に灰い紺7, 5336/4 普:5mm以下の長石・石英・赤色粒 不具	
26	80	169	19-50-1 灰色粗砂 2層	須恵器 甕	(16.4) 2.35	天井部・体部にやや丸みがあり、扁平なやや小さな 甕実つまみを貼り付ける。口縁端部は強く下方に屈 曲する。 [外]同軸付? [内]同軸付?・静止付?	[外]灰白57/ [内]灰36/ 普:2mm以下の細粒 不具	
26	80	170	19-50-1 灰色粗砂 2層	須恵器 甕	16.0 3.45	天井部・体部にやや丸みがあり、ボタン状のつまみを 貼り付ける。 [外]同軸付?・同軸3回り [内]同軸付?	[外]灰白2, 5338/ [内]灰白538/ 普:2mm以下の細粒 不具	
26	80	171	19-50-1 灰色粗砂 2層	須恵器 甕	— — (2.0)	天井部・体部にやや丸みがあり、やや小さな甕実つま みを貼り付ける。 [外]同軸付? [内]同軸付?	[外]灰白57/ [内]灰36/ 普:2mm以下の細粒 不具	
26	80	172	19-50-1 灰色粗砂 2層	須恵器 甕	17.8 — 3.2	天井部・体部にやや丸みがあり、扁平な甕実つまみを 貼り付ける。口縁端部は強く下方に屈曲する。>記 号「×」あり。 [外]同軸付? [内]同軸付?	[外]灰35/ [内]灰36/ 普:2mm以下の細粒 不具	
80	173		19-50-1 灰色粗砂 2層	須恵器 甕	15.6 — (1.2)	天井部は平底で、口縁端部が強く下方に屈曲する。 [外]同軸付? [内]同軸付?	[外]灰白57/ [内]灰白57/ 精良:1mm以下の細粒 不具	
80	174		19-50-1 灰色粗砂 2層	須恵器 甕	— — (1.15)	天井部は平底で、扁平な甕実つまみを貼り付ける。 >記号あり。 [外]同軸付? [内]同軸付?	[外]灰白2, 537/1 [内]灰白2, 537/1 普:2mm以下の細粒 不具	
80	175		19-50-1 灰色粗砂 2層	須恵器 甕	23.2 — 0.6	天井部は平底で、口縁端部が強く下方に屈曲する。外 面保存。. [外]同軸付? [内]同軸付?	[外]灰白57/ [内]灰白57/ 精良:1mm以下の細粒 不具	
27	80	176	19-50-1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯A	— (10.4) (3.2)	底部は平底で丸みを帯びて口縁につながる。 [外]同軸付?・同軸3回り [内]同軸付?	[外]灰白7, 538/1 [内]灰白7, 537/1 普:3mm以下の細粒・黒色粒 不具	
80	177		19-50-1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯A	— (9.8) 1.6	白色を呈する。平底。 [外]同軸付?・同軸3回り [内]同軸付?	[外]灰白537/1 [内]灰白538/ 普:2mm以下の細粒 不具	
80	178		19-50-1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯A	— (9.2) (1.9)	底部は平底。 [外]同軸付? [内]同軸付?	[外]灰白57/ [内]灰白538/ 普:3mm以下の細粒・黒色粒 不具	
80	179		19-50-1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯A	— (9.0) 1.2	白色を呈する。平底。 [外]同軸付? [内]同軸付?	[外]灰白2, 538/1 [内]灰白2, 537/1 普:3mm以下の細粒 不具	
27	80	180	19-50-1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯B	— (12.0) (2.1)	底部に断面四角形の高台を貼り付ける。 [外]同軸付? [内]同軸付?	[外]灰白7, 538/1 [内]灰白7, 538/1 普:3mm以下の細粒 不具	
27	80	181	19-50-1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯B	— 11 (1.8)	底部に断面四角形の高台を貼り付ける。 [外]同軸付? [内]同軸付?	[外]灰白2, 538/1 [内]灰白2, 538/1 普:3mm以下の細粒 不具	
27	80	182	19-50-1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯B	— (10.2) (2.1)	底部は広く断面四角形の低い高台を貼り付ける。 [外]同軸付? [内]同軸付?	[外]灰白57/ [内]灰白57/ 普:3mm以下の細粒 不具	
27	80	183	19-50-1 2層	土師器 杯	— 10.5 (1.0)	底部に低い高台を貼り付ける。 [外]同軸付?	[外]紺5337/6 [内]紺5336/6 普:1mm以下の石英・長石・赤色粒 不具	
27	80	184	19-50-1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯B	— 12.2 (1.8)	底部に低い高台を貼り付ける。 [外]同軸付? [内]同軸付?	[外]灰白2, 538/1 [内]灰白2, 538/1 精良:3mm以下の細粒 不具	

表 14 土器観察表①

国民 番号	標記 番号	記号 番号	遺構 層位	種類 部種 (部位)	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴〔外〕〔内〕	色調〔外〕〔内〕 胎土 焼成	備考
27	80	185	19-5D 1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯8	- (8.6) (1.8)	底部に断面四角形の低い高台を貼り付ける。 〔外〕同軸付* 〔内〕同軸付*	〔外〕灰白S7/ 〔内〕灰白S7/ 普・2mm以下の細粒 良	
27	80	186	19-5D 1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯8	- (4.9) (2.1)	底部に低い高台を貼り付ける。 〔外〕同軸付* 〔内〕同軸付*	〔外〕灰白S7/ 〔内〕灰白S7/ 普・2mm以下の細粒・黒色粒 精良	
27	80	187	19-5D 1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯8	- (8.8) (1.2)	底部に低い高台を貼り付ける。西面降尻。 〔外〕同軸付*・同軸・3回り 〔内〕同軸付*	〔外〕灰白S7/ 〔内〕灰白S7/ 普・2mm以下の細粒・黒色粒 良	
27	80	188	19-5D 1 灰色粗砂 2層	須恵器 杯8	- (10.4) (6.9)	底部に断面逆字の低い高台を貼り付ける。 〔外〕同軸付* 〔内〕同軸付*・静止付*	〔外〕灰白S7/ 〔内〕灰白S7/ 普・2mm以下の細粒・黒色粒 良	
27	80	189	18-5D 1 2層	須恵器 杯8 (底部)	- (13.2) (4.43)	底部に断面四角形の高台を貼り付ける。 〔外〕同軸付* 〔内〕同軸付*	〔外〕灰白S7/ 〔内〕灰白S7/ 普・2mm以下の細粒 良	
80	190		19-5D 1 灰色粗砂 2層	須恵器 鉢 8	(16.8) - [4.6]	体部は浅く凹形を呈す。端部は丸く収める。 〔外〕同軸付* 〔内〕同軸付*	〔外〕灰白S7/ 〔内〕灰白S7/ 普・2mm以下の細粒・黒色粒 良	
80	191		19-5D 1 灰色粗砂 2層	須恵器 盥 (口縁)	16.2 - [3.75]	口縁端部付近でわずかに開く。 〔外〕同軸付* 〔内〕同軸付*	〔外〕灰白S7/ 〔内〕灰白S7/ 精良1mm以下の細粒 良	
80	192		19-5D 1 灰色粗砂 2層	須恵器 盥 (口縁)	(8.0) - [3.7]	口縁部は短く外反し、端部は弧を持つ。 〔外〕同軸付* 〔内〕同軸付*	〔外〕灰白S7/ 〔内〕黄灰S6/1 普・2mm以下の細粒 良	
27	80	193	19-5D 1 灰色粗砂 2層	須恵器 平瓶 (胴部)	頸径2.6 - [4.1]	体部に円筒部素直あり。 〔外〕同軸付* 〔内〕同軸付*	〔外〕灰白S7/ 〔内〕灰白S7/ 普・2mm以下の細粒 良	
28	80	194	19-5D 1 灰色粗砂 2層	須恵器 長頸壺 (体部)	- 4.2 [6.9]	体部は草鞋形を呈す。底部は平底。 〔外〕同軸付* 〔内〕同軸付*	〔外〕灰白S7/1 〔内〕灰白S7/1 普・2mm以下の細粒 良	
28	80	195	19-5D 1 灰色粗砂 2層	須恵器 盥 (体部)	- - [10.8]	胴部は強く屈曲し、平底。胴部に口縁の貼り付け痕あり。 〔外〕同軸付* 〔内〕同軸付*	〔外〕灰白S7/1 〔内〕灰白S7/ 普・2mm以下の細粒 良	
27	80	196	19-5D 1 灰色粗砂 2層	須恵器 長頸壺 (体部)	- - [12.5]	胴部は強く屈曲し、底部に高台の貼り付け痕あり。 〔外〕同軸付*・同軸・3回り 〔内〕同軸付*	〔外〕灰白S7/ 〔内〕灰白S7/ 普・2mm以下の細粒 良	
80	197		19-5D 1 灰色粗砂 2層	須恵器 盥 (底部)	- 8.8 [3.9]	底部は平底。 〔外〕同軸付* 〔内〕同軸付*・懸伏工具痕	〔外〕灰白S7/ 〔内〕灰白S7/ 普・2mm以下の細粒 良	
80	198		19-5D 1 灰色粗砂 2層	須恵器 盥 (口縁)	(11.8) - [3.6]	口縁部は外反し、端部は丸く収める。 〔外〕同軸付* 〔内〕同軸付*	〔外〕灰白S7/ 〔内〕灰白S7/ 精良2mm以下の細粒 良	
27	80	199	19-5D 1 灰色粗砂 2層	須恵器 盥 (体部)	- - [10.1]	胴部に索帯の付着痕あり。 〔外〕同軸付* 〔内〕工具・指頭圧痕	〔外〕灰白S7/ 〔内〕灰白S7/ 普・1mm以下の細粒・黒色粒 良	
28	80	200	19-5D 1 2層	土師器 杯 8	- - [3.5]	口縁部は内湾気味に立ち上がる。 〔外〕付* 〔内〕化粧土・緑文(0.3×8)	〔外〕黄灰S7/4 〔内〕黄灰S7/4 普・ 良	
28	80	201	19-5D 1 2層	土師器 盥	- - [3.15]	口径10mm程度。底縁部は丸くならぬで、口縁端部は丸い。 〔外〕同軸付* 〔内〕同軸付*	〔外〕灰白S7/4 〔内〕灰白S7/4 普・ 良	
28	80	202	19-5D 1 2層	土師器 杯 8	- - [3.3]	口縁端部は先細りしている。 〔外〕同軸付* 〔内〕同軸付*	〔外〕灰白S7/4 〔内〕灰白S7/4 普・2mm以下の長石・赤色粒 良	
28	80	203	19-5D 1 2層	土師器 盥	- - [1.9]	平底で、口縁部が大きく開く。 〔外〕同軸付* 〔内〕同軸付*	〔外〕灰白S7/4 〔内〕灰白S7/4 普・1mm以下の小石・赤色粒 良	

表 15 土器観察表①

国庫 番号	所収 番号	出土 番号	遺構 層位	種類 器種 (部位)	口径 底径 器高	形態の特徴 手法の特徴[外][内]	色調[外][内] 胎土 焼成	備考
	80	204	18-SD 1 2層	土師器 甕 (口縁)	- - (6.5)	口縁部は直口し、やや厚みを増す。 [外]中・細口→口縁のみ斜め↑ [内]↑↑	[外]紺S106/6 [内]紺S107/6 肌:1mm以下の細粒 良	
26	80	205	19-SD 1 2層	土師器 不明 (体部)	- - -	部位は不明だが、外から内にかけて円孔を穿つ。 [外]↑↑ [内]↑↑↑	[外]黄赤焼2 SY85/8 [内]黄赤焼S107/8 肌:5mm以下の長石・石英 良	
28	80	206	19-SD 1 3層	須恵器 杯 (底面)	- 8.4 (1.9)	平底。白色を呈する。 [外]↑ [内]同軸↑↑	[外]灰白S108/1 [内]灰白S108/1 骨:2mm以下の細粒 良	
29	81	207	19-SD 1 4層	須恵器 甕 (口縁)	- (15.8) (2.3)	天井部・体部にやや丸みがあり、口縁端部は下方に屈曲する。 [外]同軸↑↑・同軸↓削り [内]同軸↑↑	[外]RC36/ [内]灰白S107/ 骨:2mm以下の細粒 良	
29	81	208	19-SD 1 最下層	須恵器 和瓶 (底面)	- (11.3) (2.7)	底面に断面四角形の低い高台を貼り付ける。 [外]同軸↑↑ [内]同軸↑↑	[外]RC107/ [内]灰白S107/ 骨:2.5mm以下の細粒 良	
29	81	209	19-SD 1 4層	須恵器 杯 (口縁)	11.4 - (3.8)	口縁部は外傾し、端部は丸く収める。 [外]同軸↑↑ [内]同軸↑↑	[外]RC36/ [内]RC36/ 骨:3mm以下の細粒 良	
29	81	210	18-SD 1 4層	土師器 甕 (口縁)	(14.6) - (4.8)	口縁部は屈曲し、端部は面を持つ。 [外]↑↑・板↑↑ [内]↑↑・指頭正直	[外]にぶい黄緑10Y87/4 [内]にぶい黄緑10Y87/4 骨:1mm以下の長石・石英・赤色粒 良	
29	81	211	19-SD 1 最下層	須恵器 甕 (底面)	- - (5.4)	底面は丸底であるが、接地面は平坦である。底面にのみ格子状を施す。 [外]同軸↑↑・格子状 [内]同軸↑↑	[外]RC36/ [内]RC36/ 骨:2mm以下の細粒 良	
29	81	212	19-SD 1 4層	土師器 甕 (口縁)	(26.2) - (29.8)	体部は下膨れ状の長胴で形を呈し、口縁部は大きく開く。端部は面を持つ。 [外]おけ・斜方向の↑ [内]おけ・細い↑	[外]明焼2 SY85/6 [内]にぶい・明2 SY85/4 骨:3mm以下の長石・長石 良	
29	81	213	18-SD 7	須恵器 甕 (口縁)	(14.2) - (1.8)	口縁部は強く屈曲し垂下する。 [外]同軸↑↑ [内]同軸↑↑	[外]RC36/ [内]RC36/ 骨:1mm以下の長石・長石 良	
29	81	214	19-SD 7	須恵器 杯 (口縁)	(10.6) - (2.9)	傾斜を呈する。 [外]↑↑ [内]同軸↑↑	[外]RC35/ [内]灰白S106/1 骨:1mm以下の長石・長石 良	
29	81	215	19-SD 7	須恵器 和瓶 (底面)	- (9.0) (1.1)	底面に高台を貼り付ける。 [外]同軸↑↑ [内]同軸↑↑	[外]RC36/ [内]灰白S107/ 骨:1mm以下の細粒 不良	
29	81	216	18-SD 7	土師器 甕 (体部)	(15.5) - (2.1)	口縁部は斜めの上に開口端部は内側に丸く肥厚する。 [外]↑↑ [内]放射状縮み(→↑↑↑)	[外]紺S107/6 [内]にぶい・明2 SY87/4 骨:1mm以下の長石・長石 良	
29	81	217	18-SD 7	土師器 甕 (口縁)	(17.6) - (3.4)	やや大型。 [外]同軸↑↑ [内]同軸↑↑	[外]紺S107/6 [内]紺S107/6 骨:1mm以下の小石・赤色粒 良	
29	81	218	18-SD 7	須恵器 甕 (口縁)	- (12.0) (6.2)	意の底へ体部である。 [外]同軸↑↑ [内]同軸↑↑	[外]灰白S107/ [内]RC36/ 骨:1.5mm以下の長石・長石 良	
24	-	219	19-SD 1 2層	土師器 移動式(お)	-	-	-	写真のみ
24	-	220	18-SD 1 最上層	須恵器 甕	-	-	-	写真のみ

表 16 石器観察表

図版 番号	挿図 番号	報文 番号	遺構 層位	種類	法量 (cm)			重量 (g)	石材	備考
				器種	最大長	最大幅	最大厚			
30	4	S1	第1調査区 清掃	石鏃	3.1	1.9	0.45	1.6	サヌカイト	
30	26	S2	15-堅穴10 貼床	白玉	0.45	(0.35)	(0.3)	0.05	滑石	
30	30	S3	15-堅穴40 貼床	打製石斧	4.3	6.3	1.3	34.6	サヌカイト	
30	48	S4	16-堅穴1 床面直上	白玉	0.3	0.4	0.4	0.05	滑石	
30	55	S5	16-堅穴2 カマド除去中	石鏃	1.9	1.6	0.35	0.7	サヌカイト	
30	55	S6	16-堅穴4 貼床	白玉	0.6	0.6	(0.4)	0.05	滑石	

表 17 鉄器観察表

図版 番号	挿図 番号	報文 番号	遺構 層位	器種	法量 (cm)			重量 (g)	備考
					最大長	最大幅	最大厚		
30	55	M1	16-堅穴4 埋土	刀子	[8.5]	(1.5)	(0.4)	23.6	両側。柄に有機質の痕跡。
30	55	M2	16-堅穴4 埋土	不明鉄器	[3.9]	1.3	0.3	10.1	
30	76	M3	19-SK50 上層	不明鉄器	[3.8]	0.7	0.25	—	



調査区 全景（北西から）



第1調査区 全景（西から）



第2調査区 全景（西から）



第15調査区 全景（南西から）



第16調査区 全景（北西から）



第16調査区 全景（南西から）



第17～19調査区 全景（東から）



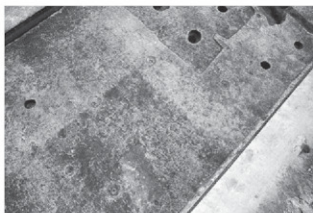
第17～19調査区 全景（西から）



1- 竪穴 1 (東から)



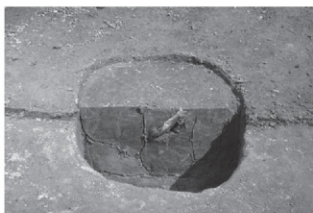
1- 竪穴 40 (南から)



1- 掘立 1 (北西から)



1- 掘立 1 完掘状況 (西から)



1- 掘立 1 SP14 (南東から)



1- 掘立 1 SP13 (南東から)



1- 掘立 1 SP16 (南東から)



1-SX115 断面 (西から)



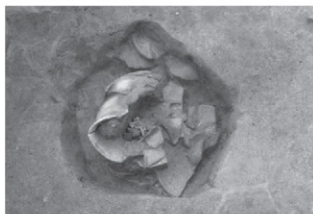
2- 竪穴 51 (西から)



2- 掘立 1 完掘状況 (東から)



15- 竪穴 20 (南から)



15- 竪穴 20 SP31 遺物出土状況



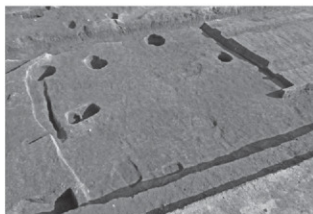
15- 竪穴 50 (南東から)



15- 竪穴 50 遺物出土状況 (南東から)



15- 竪穴 50 カマド (東から)



15- 竪穴 10 (西から)



15-掘立1 検出状況（南西から）



15-SK75 断面（西から）



15-SD21 完掘状況（東から）



15-SD21 西壁断面（東から）



16- 竪穴 1 (南から)



16- 竪穴 1 カマド遺物出土状況 (南から)



16- 竪穴 1 カマド完掘状況 (南から)



16- 竪穴 1 カマド東西断面 (南から)



16- 竪穴 2 (南から)



16- 竪穴 3 (北西から)



16- 竪穴 4 (南西から)



16- 竪穴 2 カマド完掘状況 (南から)



16- 竪穴 2 遺物出土状況 (西から)



16- 竪穴 2 遺物出土状況 (東から)



16- 竪穴 3 カマド完掘状況 (南から)



16- 竪穴 4 カマド完掘状況 (南から)



16-掘立 1 完掘状況 (南から)



16-掘立 1 SP32 断面



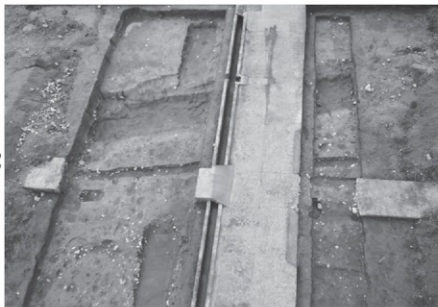
16-掘立 1 SP36 断面



16-掘立 1 SP31 断面



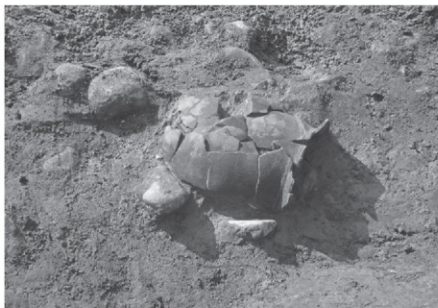
16-掘立 1 SP30 断面



18・19-SD 1 (東から)



18・19-SD 1 南壁断面 (北から)



19-SD 1 遺物出土状況 (東から)



18・19-SD 5 (北東から)



19-SD 5 北壁断面(南から)



18-SD 5 遺物出土状況(北から)



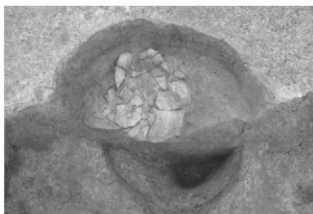
19- 竪穴 40 (東から)



19- 竪穴 40 カマド (南から)



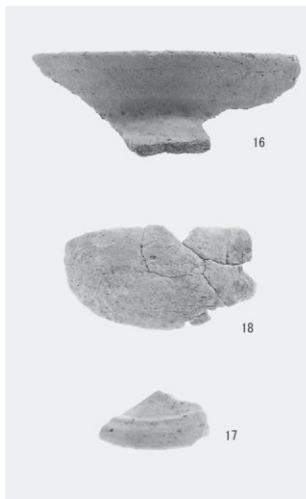
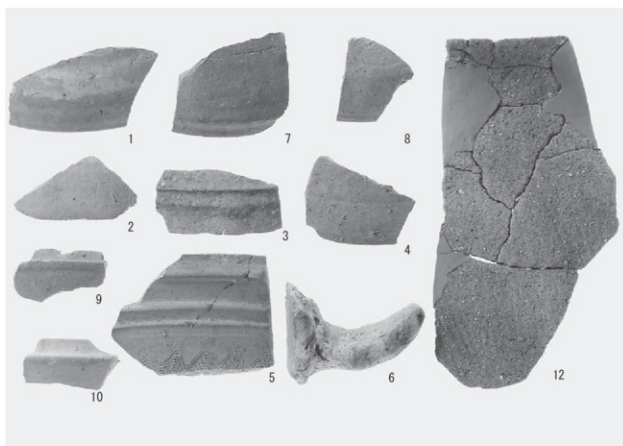
19- 竪穴 20 (南から)

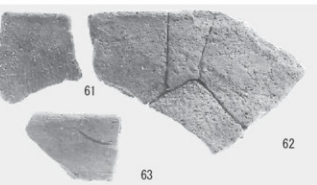


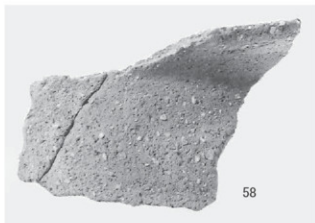
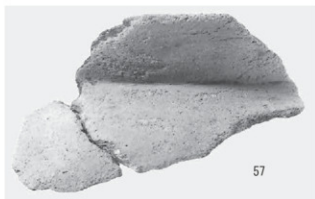
19-SK42 遺物出土状況 (南から)

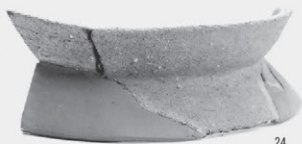


19-SK50 (北から)













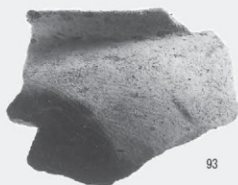
84



92



85



93



94



97



95

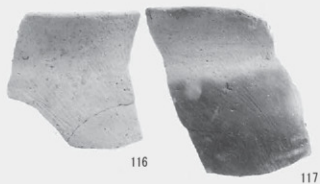
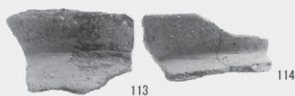


97

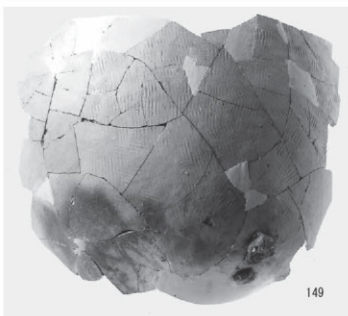


98

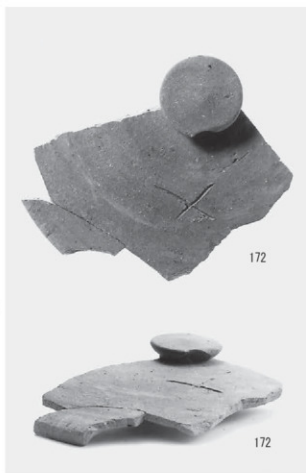
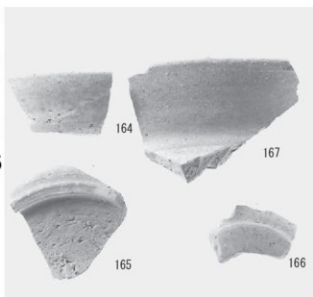


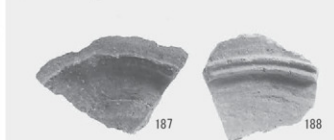
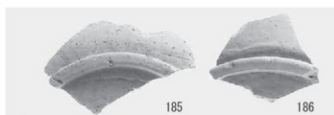
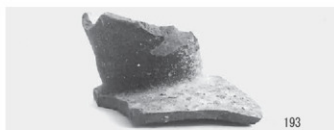
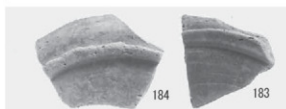














194



201



195



202



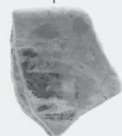
203



206



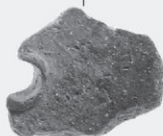
200



200



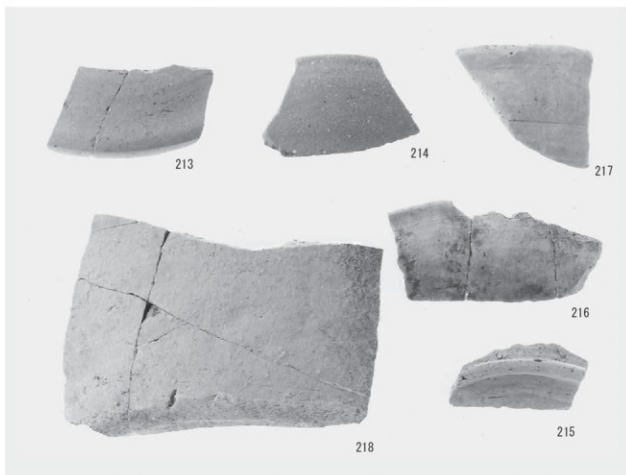
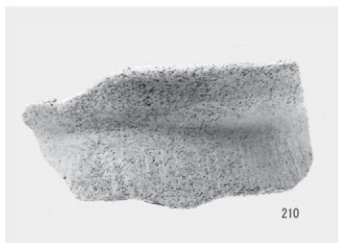
205

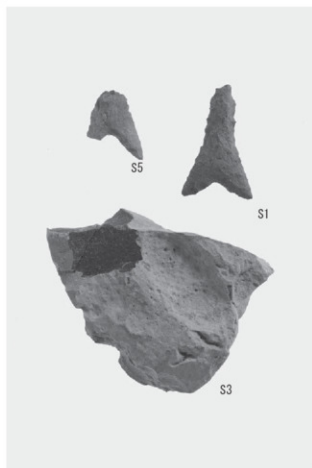
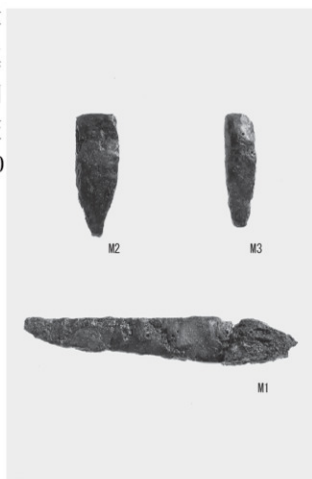


205



212





報告書抄録

ふりがな	はぎのまえ・いっぽんざいせきⅡ							
書名	萩前・一本木道跡Ⅱ							
副書名	市道仏生山町8号線新設改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第2冊							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第187集							
編著者名	船築 紀子・森原 奈々							
編集機関	高松市教育委員会							
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 TEL087-839-2660							
発行年月日	平成30年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査 面積	発掘 原因
		市町村	遺跡番号					
はぎのまえ・いっぽんざいせき 萩前・一本木道跡	ふりがな 香川県 たかまつし 高松市 ふしやまちょう 仏生山町 こし 甲	37201		34° 16′ 55″	134° 2′ 29″	2011.4.11～ 2012.3.30	2,865㎡	市道 仏生山町 8号線 新設改良事業
所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構		おもな遺物		特記事項	
萩前・一本木道跡	集落遺跡	古墳時代中期 古墳時代後期 飛鳥時代 古代 中世	堅穴建物 土坑 溝 掘立柱建物 柵 方形区画溝 水路		土師器（古墳時代） 須恵器（古墳時代・ 飛鳥時代） 鉄器 石器など		古墳時代中期中葉から古墳時代後期の堅穴建物や掘立柱建物を検出した。 その他、飛鳥時代の基幹水路及び中世の溝を検出した。	
要約	高松市仏生山町甲に所在する、古墳時代中期から飛鳥時代を中心とする集落遺跡である。今回の調査では、古墳時代中期中葉から古墳時代後期の堅穴建物を検出しており、特に古墳時代中期から後期のカマドに関する良好な資料が得られた。 また、飛鳥時代の基幹水路を検出した。							

2018 年 3 月 16 日 印刷

2018 年 3 月 31 日 発行

高松市埋蔵文化財調査報告第 187 集
市道仏生山町 8 号線新設改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
萩前・一本木遺跡Ⅱ

著作権所有	高松市番町一丁目 8 番 15 号
発行者	高松市教育委員会
印刷者	有限会社 中央ファイリング